昭和60年6月1日号（毎月2回1日、15日発行）第28巻・第11号　通巻632号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
11
6. 1.



戦争犠牲者を悼む永遠の火

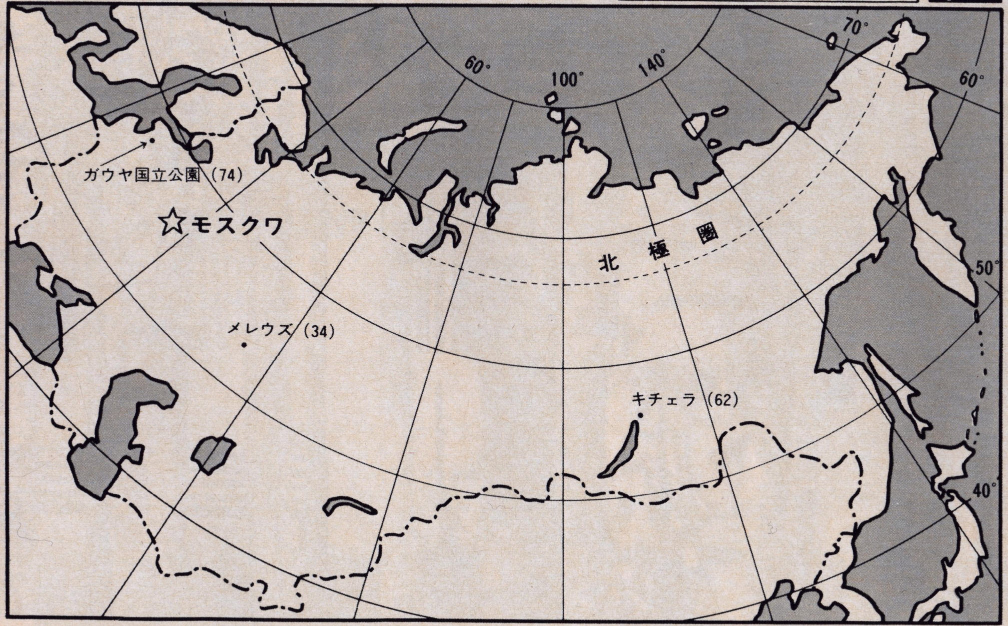
建築ルネサンスへの道（ソ日共同取材）

ソ連の学校教育――伝統と改革③

第11号　1985年6月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

表紙　建築家のファンタジーと現代大量建設の画一性を両立させようというモスクワ建築大学のイリヤ・レジャワ教授（右から2人目）と弟子たち（同大学の屋上で。本文42ページ参照）
カメラ　Y・ルイプチンスキー

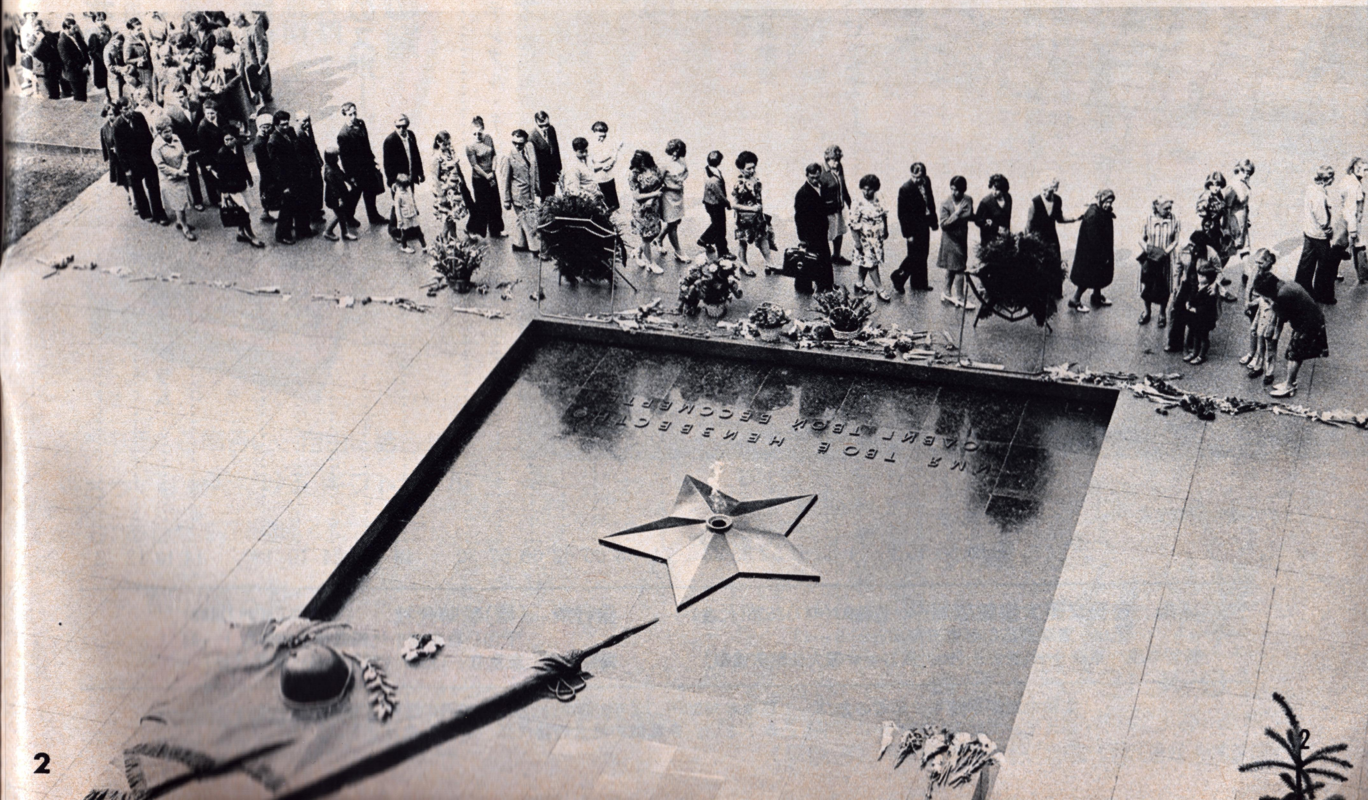
編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141　東京都品川区東五反田3—9—13
振替口座　東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101　東京都千代田区神田神保町1—44
振替口座　東京0—13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。



戦争犠牲者を悼む永遠の火

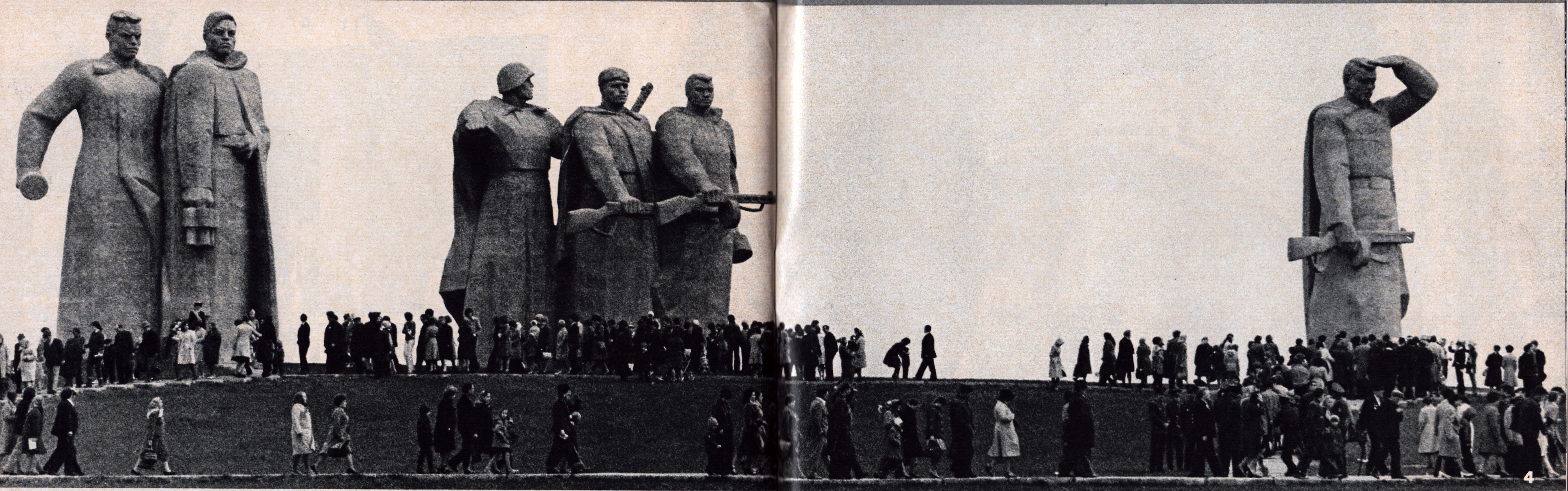




覚えておこう!
いついつまでも——
覚えておこう!
もう決してやって
こない人々のことを——

覚えておこう!
——ロベルト・ロジェストベンスキー
(『レクイエム』から)

1 静けさが記念碑を包む……
2 モスクワの"永遠の火"。記念碑には「あなたの名は知られていないが、いさおは不滅である」と刻まれている。
3 子供たちは自分の生命のためにどのような犠牲が払われてきたかを知らねばならぬ。



4



5

4 モスクワ州ネリドボ村の第三一六狙撃師団の28人の英雄戦士の碑（N・リュビーモフ、A・ポストル、V・フョードロフ作）

5 写真のカザフ人アミナ・マメドワの娘マンシュクさんは戦時中機関銃手として戦い、戦死した。死後ソ連邦英雄称号を授けられた。写真はアルマアタ市の栄光メモリアルの永遠の火のそばで思い出にふけるマメドワ。

6 ウズベク共和国ブハラの中心部の戦没軍人の碑（P・アセーエフ、V・ルチイン作）

7 「ブレスト英雄要塞」記念コンプレクスの入口

8 ブレスト要塞の英雄的防衛に参加した勇士の脳裏には、かつての戦友の面影が去来する。

この世には時がたっても、いつまでも消え去ることのない重大な意義をもつ出来事があるものだ。そしてこれらの出来事の偉大さや世界史の動きを決めたこれらの出来事の決定的な役割は、10年ごとにますます力強く強調される。大祖国戦争（一九四一—四五年）におけるソ連国民の勝利は、まさにこうした出来事であった。

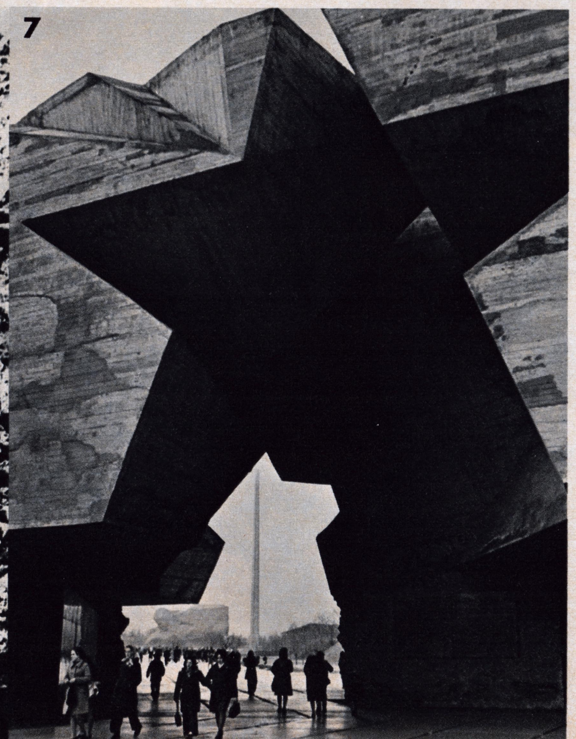
誰も忘れ去られてはいないし、何も忘れ去られてはいない！　祖国の自由と独立を守り、不滅の人となった人々を思うソ連国民の追悼の気持ちは、壮大な記念碑アンサンブルや赤い星のついたささやかなオベリスクに表れている。

ドイツ・ファシスト軍によるレニングラードの九〇〇日の封鎖の犠牲者を葬ったピスカリョフ墓地の母なる祖国像は、深い哀悼のなかに屹立（きつりつ）している。レニングラードを帯状に取り巻く〝栄光〟地帯や〝レニングラードの英雄的防

6



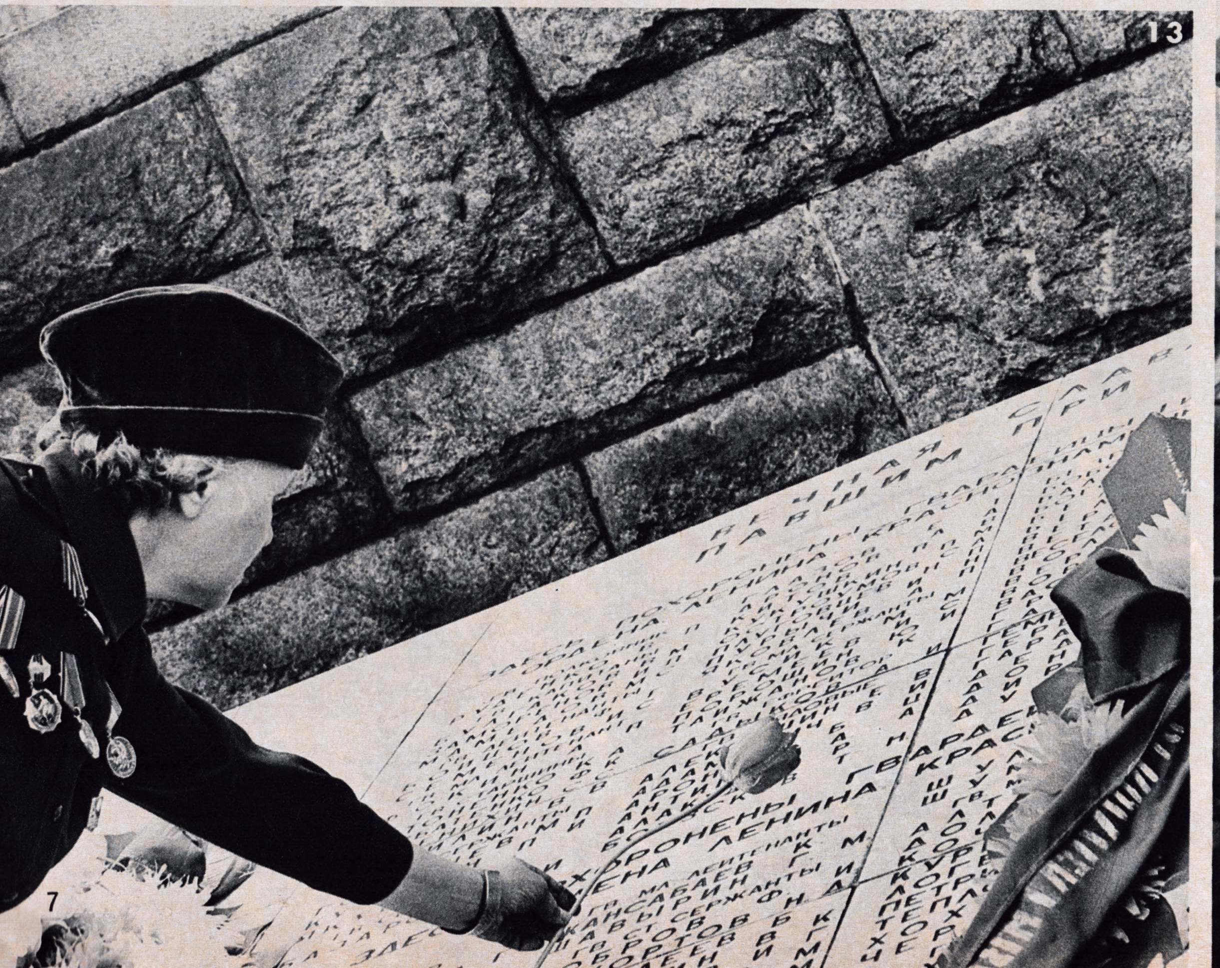
7



8







9 ドニエプル川右岸チェルカッスィ市の栄光の丘（彫刻はガリーナ・カリチェンコ作）

10 モルドワ自治共和国サランスク市の戦没者記念碑（N・トムスキー作）

11 クールスク戦参加パイロットの記念碑（M・クゾブレフ作）前で抱き合うかつての戦友

12 クラスノダル地方キーロフ・コルホーズの戦没コルホーズ員の碑

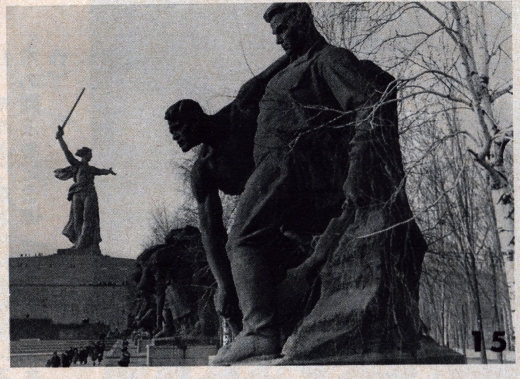
13 カリーニングラードの戦没者の碑









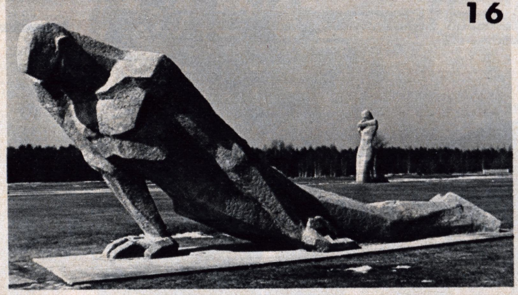




14 モスクワ第一医科大学構内の医療衛生関係軍人の碑（L・ケルベリ作）

15 ボルゴグラードのママイ丘の記念碑アンサンブルの中央部（E・ブチェチ作）

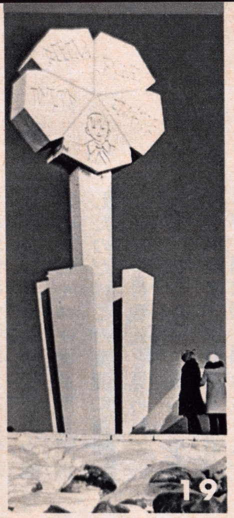
16 ラトビア共和国サラスピルスのファシスト・テロ犠牲者の記念アンサンブル。戦時中この地にドイツ軍は収容所を設置し、10万人を殺した（Y・ザリン、L・ブコフスキー、O・スカライニク作）



17 クラスノダル地方ノボロシースク市の戦没者記念コンプレクス（V・ツィガリ作）

18 レニングラード州ガッチナ市で地下活動をしたコムソモール員たちの碑







19 レニングラード防衛中に死んだ子供の碑「生命の花」（P・メリニコフ、A・レベンコフ作）

20 戦時下の一九四二年に消火活動で殉職したチェチェノ・イングーシ自治共和国グローズヌイ市の消防士たちの碑（R・マミロフ作）

21 クレムリンの城壁のそばの無名兵士の墓に詣でる人の列は絶えない

衛者"メモリアル・アンサンブルの多数の記念碑は、子孫たちに戦争の悲惨さを訴えている。英雄都市――モスクワ、ボルゴグラード、キエフ、ミンスク、オデッサ、セバストーポリ、ノボロシースク、ケルチ、ツーラ、ブレスト要塞のメモリアル・コンプレクスを飾る栄光と不滅の記念碑に参拝する人の列は決して尽きることはなく、冬も夏も頭を垂れる人の姿が絶えない。人々はここに来て父や夫、兄弟や友を改めて偲び、敬意を表しているのだ。ここには子供たちも来る。子供は自分たちの生命がいかなる犠牲を払ってかちとられたかを知らねばならない。



「あなた方のいさおは永久に民衆の中に生きる」——モスクワ州のネリドボ村の墓地の花崗岩の碑には、この言葉と戦死した23名の兵士の名が刻まれている。一九四一年11月、この村の近くでパンフィーロフ将軍麾下の第三一六狙撃師団の28名の兵士がドイツ軍の戦車18両をせん滅し、ファシスト軍のモスクワ進出を阻止したのだ。この戦闘に参加した者は全員戦死と見られていたが、後になって5名が生存していたことが分かった。

一九七五年の対ファシズム戦勝30周年に当たってネリドボ村の近くに28名の兵士の不滅のいさおを顕彰するモニュメントが建立された。祖国の自由と独立を守って血を流した英雄たちのその花崗岩の像はひらけた野原の中に立っている。

ベロルシアの首都ミンスクの東北58kmのハティニ村は、ファシストの手で焼き払われた（本誌8号参照）。この地の跡に建てられたメモリアル建築・彫刻コンプレクスは、一九四一—四四年にドイツ・ファシスト軍が住民もろとも この世から抹殺した何百というベロルシアの村を思い出させる。ハティニのメモリアル・コンプレクスの中心は、殺された少年を手に支えもった人の6mのブロンズ像である。子供の動かぬ体を支えもつその姿、顔、手は、戦争とファシズムへの憤怒に満ちた抗議、弾劾を具現したものだ。この像の右手にハティニ村の村人が焼かれた場所を示す黒花崗岩の塊があり、村人が歩んだ最後の道——白大理石のクサビ状の道がここに通じている。

オベリスクや鐘のついた26の鉄筋コンクリートの構造物はハティニの家を永久に記念している。ハティニの警鐘は広島の警鐘と同じく、不安と怒りをこめて「これを繰り返してはならない！」と呼びかけている。

ソ連の全土に花崗岩や青銅や金属の記念碑が建っている。それらは戦士や都市、戦闘、パルチザンや地下活動家、医師や看護婦、後方の勤労者を記念したものである。彼らの思い出は時に支配されることなく、大事に後世に伝えられ、幾百年も生き続けるだろう。



23



22



24

22 ベロルシア共和国のジョジノ市の碑。この碑のモデルはアナスタシア・クプリヤノワ（写真の女性）と戦死した彼女の7人の息子たち。アナスタシアは碑の息子たちによく会いにくる。

23 ベロルシア共和国ハティニ村。記念碑「敗れざる人」の一部（S・セリハノフ作）

24 ハティニの鐘

「よき人々よ、覚えておいてほしい。親愛な人々よ、われわれは生活を、わが祖国を、皆さんを愛した。われわれは生きたまま焼き殺された。

皆さんへのわれわれの願い——皆さんが哀悼と悲しみを雄々しさと力に変えて、地球上に平和と安穏を永久に確立できるように！ 今後いかなる場所でも決して生命が火の竜巻の中で失われることがないように！」——罪もなく殺されたハティニ村の住民の遺骨が葬られている「生きている人々に栄光を」碑の銘

ソ連の視点

軍縮こそ理性的な道

ノーボスチ通信政治評論員 S・ベグロフ

地上での核兵器庫の一層の増強と攻撃用宇宙兵器の準備を停止せよ、とのミハイル・ゴルバチョフの提案は、今も東西関係と世界政治全体の関心の的となり続けている。例によって米国政府は、ソ連提案の声をかき消し、それらを″ワナ″や″宣伝″に見せかけようと全力を投入した。

しかしそれにもかかわらず、あらゆる兆候から見て、今回のソ連提案の意義をおとしめることは米国指導部にとってきわめてむずかしい。というのもソ連提案は、現在すでに十分実施可能な実際的措置によってジュネーブ交渉に建設的な刺激を与えるという最も切実な要求にかなっているからだ。周知のとおりソ連は、米国製中距離ミサイルの欧州配備とソ連の対抗措置の強化を停止することも提案した。ソ連が自国の中距離ミサイルの展開に対する一方的モラトリアムと、その他の欧州での対抗措置の停止を本年11月まで実施することを、世論は善意のあらわれと評価している。

イタリアをはじめとする一連の西側諸国の対外政策指導者の中からは、ソ連提案は最も入念な検討に値する、との声が直ちにあがった。西独のSPDなど野党の本部では、この声はさらに大きく切実なものだ。それらの意見を要約して西独のフランクフルター・ルントシャウ紙は、ゴルバチョフ提案が政治風土の改善に役立つものなら、それだけの理由でも西側はそれらの提案を真面目に取りあげるべきだ、と強調している。良識ある人々の見解によれば、NATO諸国は、自国の安全を危険にさらすことなく、同様の対抗措置で応えることができるはずだという。

米国内でもカーター元大統領が、ソ連の措置に前向きに対応するよう政府に呼びかけた。有力なワシントン・ポスト紙は、レーガンの反応を″余りに否定的″と評価し、政府は″軍備査察をより深く探究する能力がない″と非難している。

実際その通りだ。ワシントンが軍拡競争抑制をめざす実際的な措置の分野でこうしてしつようにソ連との協同行動を避けているために、世界はすでに高価な代償を支払っている。最近評論家たちが正当にも指摘しているように、早くも一九七九年にソ連は同様の措置を提案しており、その時はSS20ミサイルの展開に対する一方的なモラトリアムの宣言によって、モスクワは、新型米国製核ミサイルの西欧配備に対するNATO決定の実施開始を防ごうとした。この試みは一九八二年に再度ソ連側からなされた。同じ年にソ連は、ソ米両国の戦略兵器庫の凍結提案を公式に行った。

一九八〇年に共和党の選挙綱領にうたわれたように、本当に米国政府が対ソ核優位の達成にとりつかれていないのなら、欧州に何百基もの新型ミサイルと弾頭が出現することはなかったろうし、軍備抑制問題全般を規制できないものにする恐れのある何千基もの巡航ミサイルやトライデントⅡ、MXミサイルといった新型先制核攻撃システムの開発に米国がとった強化措置が事実となることもなかったはずだ。

モスクワがたえず修正を加えて打ち出す提案に対するワシントンの否定的な反応が、広範な世論にとってますます受けいれがたいものとなっている理由の一つは、ワシントンがこのように、宇宙兵器も含めて次々と新たな戦争実施手段をやみくもに獲得しようとしていることにある。米国指導部はどうやら、理性のあらわれには″ソ連の宣伝″のレッテルを貼ってしまえばいい、このやり方はいつでもどこでも一種の呪文の働きをするのだから、と考えているらしい。

しかし、この魔法のカーテンをちょっとのぞいてみれば、核軍備・宇宙軍備に文字通りとらわれている光景が目の前に開けるだろう。核軍備の抜本的な削減を目的としてソ連と建設的に話し合う意図がある、とワシントンは何回も繰り返している。そのことを米国がいま幅広く展開している精巧きわまりない大量破壊兵器の開発作業とどう調和させていくつもりなのか、冷静にものを考える人々は理解に苦しんでいる。大量破壊兵器をつくるごとに、″ジュネーブ交渉を進展させるための最良の手段″という宣伝が行われている。

米国は、軍事分野での手段を選ばないやり方を宣伝によってカムフラージュしようとしているのだ。このような路線は、決して相手側に信頼を起こさせる上に役立たない。だが信頼の要素は、あらゆる交渉の成功にとって決定的な意義をもつものであって、ましてやジュネーブ交渉については言うまでもない。交渉の成功を望む者はみな、交渉当事者が双方とも軍備削減という一つのことにかかりきりになることを、当然ながら望んでいる。だがワシントンは、どんな犠牲を払っても軍拡競争を続行しようと努めている。

ソ連は最も自然で理性的なこと――この競争に″ストップ″をかけることを提案した。「軍備削減について取り決めるテーブルについた以上、少なくとも軍備を増強しないようにしなければならない」とミハイル・ゴルバチョフは強調した。先ごろソ連共産党中央委政治局会議が、ソ連側が送った善意のシグナルに対し米国政府が示した否定的反応に疑念を表明したのも、まさにそうした理由からだ。軍拡競争停止分野での米国とNATO側の言行の不一致は、すべての国の国民の安全にかかわるますます深刻な問題となりつつある。

第12回世界青年学生祭へ向けて

フェスティバルのスポーツ・プログラム

スポーツは世界青年学生祭に欠かせない行事である。7月27日から始まるモスクワの第12回世界青年学生祭とても例外ではない。青年学生祭のスポーツ・プログラムについて、エブゲニー・シェワロフスキー第12回青年学生祭ソ連準備委員会部長は次のように語った。

われわれの課題はまずスポーツに青年学生祭のスローガン「反帝連帯、平和と友好のために!」を反映させることである。青年学生祭に参加する人々は、平和をめざして連帯した、志を同じくする友人なのだから、スポーツ交流をやる人たちも友好を深め、スポーツの技の秘訣を伝授し合ってもらいたいものだ。

こんどの青年学生祭のスポーツ試合には強豪選手は出場せず、競技の原則をとらないことになっているので、強弱をとわず多数の人がこぞって参加できよう。また青年学生祭のすぐあと神戸でユニバーシアード大会が開かれるから、何も重複して競技をやる必要はあるまい。従ってこんどの祭典では優勝者とか入賞者とかはなく、トーナメントに出場した人々は皆チャンピオンになり、記念のペナントやバッジ、ファンの声援といった賞をもらう。ねらいは、活力と健康の増進なのだ。

青年学生祭のスポーツ大会は全部親善試合として行われ、モスクワの大競技場、スタジアムが会場となる。出場希望者は全員試合に参加でき、各国代表は国際チームをつくることができる。おそらく皆から好かれるのはゲーム的な要素の濃いスポーツ種目であろうが、オリンピックに採用されている競技種目のほとんど全部を大会でやる用意がある。このほか各国の民族スポーツ選手も招いているので、各国の民族競技も披露されよう。

スポーツ大会のスタートを切るのは、ルジニキのレーニン中央スタジアムを起点とする国際フェスティバル平和競走である。参加者全員が長距離を完走するのは無理なので、各自自分の力に見合った区間を走ってゴールインする仕組みにしている。

また軍中央スポーツクラブ(ツェスカ)の総合体育館ではソ連と外国のチェス名人たちが、一度に一〇〇〇面のチェス盤で多面打ちをする。

スポーツ・プログラムの総本部になるのは、中央体育大学内に置かれる予定の国際スポーツセンターである。ここでさまざまな討論会、会議、円卓会議が開かれ、スポーツ関係の写真、切手展が催される。大学の教師やコーチは外国の関係者と仕事の経験を交換し、模範練習をする。祭典参加者とソ連の名選手たちとの交流の会も行われる。

われわれはソビエト・スポーツの最良のものを残らず見てもらうつもりで、スポーツ・プログラムを準備している。だからわが国の有名選手のエキジビション・ショーが沢山組まれている。ページェント・スポーツ祭典「氷上の舞踏会」にはバレエや氷上サーカスのアーチストだけではなく、ソ連フィギュアスケート・チームのメンバーも参加する。

それに劣らぬ魅力をもつオリンピック・プールでの水上スポーツ祭典には、ソ連の有名水泳選手やシンクロナイズド・スイミング、高飛び込みの選手たちが妙技を披露する。

もちろん、われわれは″祭典の一マイル″競走の伝統を受け継ぐ。今回の祭典は一九八五年に開催されるので、この″一マイル″は一九八五mになる。この距離を完走できない人は、歩いてゴールに入ればよい。いずれにせよ出場者全員が入賞した気分になることは間違いない。

祭典へのソ連の青年たちの提案

ソ連の青年たちは第12回世界青年学生祭の準備にいそしんでいる。彼らはみな、モスクワへやってこない者までもが、この祭典を直接、自分たち自身のものだと考えており、世界の青年の祭典が成功すること、この祭典が参加者の記憶に永遠に残ることを心から望んでいる。

青年向けの新聞の編集部にはこのところ、たくさんの投書が寄せられている。どうしたらこの祭典がもっと立派な、面白い、内容のあるものになるかと、アイデアや提案を送ってよこすのである。ソ連の青年向け新聞で最大のコムソモリスカヤ・プラウダ紙（発行部数九〇〇万部）の編集部に寄せられたいくつかの投書の断片を紹介しよう。

※　※　※

「私たちは共通の幼年時代、住んでいる大きなアパート、運動場で結ばれている仲間です。何度も集まりましたが、私たちの個人的な関心の枠を越えるような話題では、ついぞ話したことがありませんでした。

ところが、すべては写真アルバムから始まりました。日本からきた私たちの友人のお父さんが持ってきたものです。長崎と広島の被爆40周年を記念したものでした。目撃者の証言と写真。その日私たちは、私たちはすでに大人になり、いまや私たちの世代が現在の世界に責任を負うべきときなのだ、と真剣に考えました。

私たちは、モスクワの祭典では広島と長崎の原爆の目撃者および犠牲者が、ぜひとも全世界の青年の前で発言してほしいと思います。私たちはそれを知り、記憶に留めなければなりません！」

ウクライナ共和国リボフ市、F・リドコ、L・トカチェンコ、P・ロジオノフほか。

※　※　※

「ピロゴフ記念第2医科大学の学生たちです。私たちはまだ医者ではなく、医者になるための準備をしているだけですが、それでも現在すでに、核戦争反対の証拠を示すことはできます。私たちは第12回世界青年学生祭にすべての医科大学生が結集し、ともに核戦争を防止し、人々の健康を守るために行動することを提案します」

モスクワの医科大学生11人。

※　※　※

「将来の仲間と話し合うことができたら、どんなに楽しいことでしょう。彼らはあすをどう考えているだろうか、自分の職業をどう考えているだろうか。

私たちは職業上の関心にもとづく集会を催すのは極めて重要だと思います。工科大学の学生、哲学を学ぶ学生、経済、歴史、農学を学ぶ学生同士といった具合です」

モルドワ自治共和国サランスク市オガリョフ記念モルドワ大学の学生一同

※　※　※

「モスクワ祭典でモスクワとこれまでの青年学生祭の開催地になった都市の選抜チームでバレーボール、サッカー、バスケットボールの親善試合ができたらどんなにすばらしいだろう」

ロシア連邦共和国ボロネジ市、P・サルヒン。



「平和、友好、連帯」は第12回世界青年学生祭を迎えるソ連の若者たちの合い言葉。

写真ニュース

ソ連・ハンガリー関係の強化

4月1日からモスクワの国民経済成果博で開幕した「社会主義の道を行くハンガリー」展の開会式に出席のためG・ラーザール首相を団長とするハンガリーの党・政府代表団が訪ソした。ハンガリー展の開会当日、ラーザール首相はゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長、アリエフ・ソ連第一副首相と会談した。

また二〇〇〇年までのソ連・ハンガリーの経済・化学技術協力発展長期計画が調印された。（写真は展覧会場のG・ラーザールとG・アリエフ）



ソ連・ルーマニアの協力



3月18日クレムリンでチーホノフ・ソ連首相、グロムイコ・ソ連第一副首相・外相とC・ダスカレスク首相を団長とするルーマニア代表団との会談が、友好裏に行われた。

双方はソ連・ルーマニア間の交流の拡大に満足の意を表するとともに、双方が相互協力の全面的拡大を念願していることを確認した。

また会談のさい、1986―90年度の両国の貿易・経済協力の発展に関する共同文書が調印された。（写真は文書に調印する両国首相）

ソ仏会談

3月11日、グロムイコ・ソ連第一副首相・外相とソ連政府の招きで訪ソしたロラン・デュマ仏外相が会談した。

会談のさい、ソ仏協力はこれまでなんども国際関係の改善の糸口となっており、従って両国間の定期的な政治接触、協議は有益であると指摘された。

双方は互恵の貿易・経済協力を拡大する問題を重視するとともに、科学技術、文化のさまざまな分野の交流を伸ばす余地があることを指摘した。

（会談前のグロムイコ、デュマ両国外相）





中国全人代代表団の訪ソ

ソ連最高会議の招きにより張承先常務委員を団長とする中国全国人民代表大会代表団が、3月3日から14日までソ連を公式訪問した。

全人代代表団はV・クズネツォフ・ソ連最高会議幹部会第一副議長と会談、双方とも議員の交流再開に満足を表明した。ソ連側は対中関係の改善は双方にその意思があれば可能であると強調した。

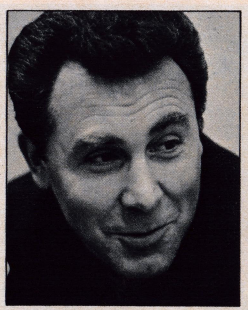
（写真は会談前の記念撮影）

ソ連の学校教育——伝統と改革③



お絵かきの時間よ……

（編集部から）　8号、9号に連載されたソ日共同取材「ソ連の学校教育——伝統と改革」の3回目をお届けします。昨年の秋、編集部の依頼でソビエト教育学の著名な専門家、東京大学教育学部の柴田義松教授が訪ソし、ソ連の多くの専門家と会い、教育と学校改革の問題について話し合いました。フェリクス・プラテ本誌記者らと共に柴田教授はモスクワのあと、アルメニア、エストニア両共和国を訪れました。このシリーズは合計5回にわたって連載されます。編集部ではこの記事についての皆さんのご感想をお待ちしています。



本誌記者フェリクス・プラテ



東京大学教授柴田義松氏

教育の最初の環——幼稚園

本誌記者　フェリクス・プラテ

わが国で行われている教育改革は幼稚園での仕事の改善から教育要員の養成や教育学の発展に至るまで、教育のすべての環にわたっている。主眼は中等教育の改革ではあるが、就学前児童教育の改善にも重要な意義が与えられている。

わが国では、中等義務教育が行われている、と言う場合、教育改革が完了する一九九〇年代まで、完全中等学校は10年制と11年制の2種類が存在することになる。

だが、学校へ上がるまでには、児童には準備が必要である。この準備は家庭あるいは幼稚園で行われる。ソ連では幼稚園はすべて国立で、学校と同様に、幼児を教育し、入学への準備をするにあたって、統一的な要求に応えなければならない。つまり、就学前児童施設は国の教育体系の一部であり、親の希望によってそこに入らずに家庭の教育で置き替えることはできるが、国の教育体系の最初の環であると見なす



すべての幼稚園にこういう快適な図画室があるわけではない。これはエストニア（バルト海沿岸）のキーフロ記念漁業コルホーズにある幼稚園の図画室。



ことができるし、見なす必要がある。世界中どこでもそうだが、就学前児童の教育は自発的なものであり、親に対していかなる強制もありえない。

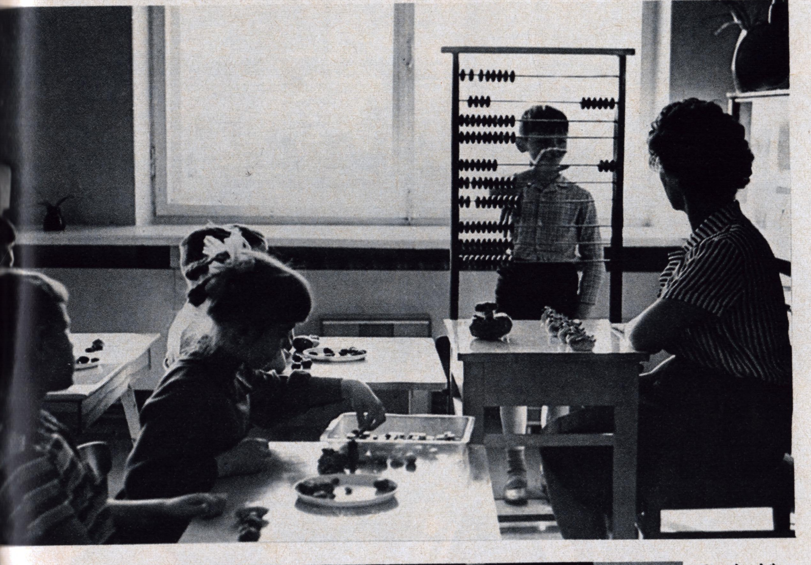
大半の子は幼稚園へ

圧倒的多数の親は、幼稚園システムは無条件に好都合だと確信している。ふつう、ソ連の家庭では両親ともに働いている。全ソ的な統計によれば、わが国では就労年齢の女性の92%が働くか学んでいる。ソ連では憲法によって、社会的有用労働は労働能力のあるすべての市民の義務になっている。これは女性にもあてはまることは言うまでもない。とはいえ、一人でも子どもがいれば、女性は仕事を辞めて、子どもの養育に専念することができる。なぜなら、それは社会のためになる仕事だと考えられているからだ。残り8%の仕事をしていない女性は、まさに何人か子どものいる、育児に専念している女性なのである。

だが、わが国では、複数の子どもを持つ母親が、出産後2、3年仕事を中断したのち、再び仕事に復帰する例は少なくない。

女性が仕事に復帰する場合の多くは、単に夫の賃金だけでは家計が苦しいという理由だけではない。しばしば女性は、特に若い女性の場合、自立したいと思っており、自分が選んだ職業の興味深い仕事を持ち、集団と利益を共にした生活をしたいと思っている。自分の生活を家や家族の枠内に制限している女性はますます減ってきている。

このような情勢の中で国家は若い世帯を対象に、希望者すべてが利用できるようにするため、就学前児童施設網を拡充する措置を講じている。保育所と幼稚園の建設と維持、職員の賃金に対する国家の膨大な補助金もこの目的のためである。



おばあちゃん問題

すでに述べたように、ソ連教育省の計算によると、都市では児童の約70%、農村ではほぼ40%が現在、幼稚園か保育所に通っている。しかしこの数字は、都市の子どもの30%が幼稚園や保育所に通うことを希望せず、親が家庭での教育の方をよしとしている、ということを意味しているわけではない。多くの地域（主に工業中心地や新興都市）



どこの幼稚園でもいちばん明るくて広い部屋が、遊戯室に当てられている。

▲バスケットをする幼稚園の年長組（5—6歳）。年少組（3—4歳）はまだ〃観客〃の役に甘んじる。



就学を控えた子どもたちのクラスの算数の授業

簡単な足し算、引き算は〃ソロバン〃を使って教えられる。ソ連のソロバンは日本の伝統的なソロバンとは大きさや玉の数が違うが、歴史の古さではそれほど変わらないだろう。

では幼稚園や保母がまだ足りない。この問題は九〇年代にならなければ完全に解決されないだろう。

このような状況のもとで母親たちは仕事を辞めるか、肉親——自分たちの親、子どもにとってのおじいちゃんやおばあちゃん——の援助にすがるしかない。

おばあちゃん問題には最近、専門家もマスコミも注目するようになった。学者たちは、おばあちゃんはいま不足している、と主張する。孫の面倒を見るために自分の仕事を辞めたり、個人的な利益を犠牲にしてもいいと考える祖母の数は、年ごとに減っている。おばあちゃんたちは仕事に魅力を感じているのだ。モスクワでアンケートをしたところ、答えた人の62％が年金受給年齢（55歳以降）に入っても働き続けていた。半数以上が社会的な活動に参加しており、孫のために仕事を辞めたのはわずか5人に一人だった。社会学者たちは、おばあちゃん不足は量的な現象であるだけでなく、質的な現象でもある、と説明する。現代のおばあちゃんは女性解放の産物であり、つらい下働き的な家庭内労働に進んで身を捧げようとは思っておらず、多くは自分の子どもたちを物質的に援助して、そのことによって孫の養育への直接の参加を〝免れ〟たいと思っている。

幼稚園のための新要綱

以上のことを総括すれば、わが国では就学前児童施設網を発展させた方がいいと結論しなければならない。普通教育学校の改革の枠内で就学前児童施設体系の改善をめざしたのが、昨年5月のソ連閣僚会議の特別決定である。ここでは児童の就学前教育をいっそう発展させ、学校へ上がる準備のための作業を改善する一連の措置が定められている。

この特別決定によって、幼稚園での子どもの教育の標準的な要綱（カリキュラム）を作成し、それを一九八五年末までに導入し、それに相応する全国のすべての就学前児童施設のための要綱、教科書、参考書を準備することがソ連教育省と教育学アカデミーに委託された。すでに教育省によって承認されているこの全ソ統一要綱は、ソ連のすべての連邦構成共和国で子どもの教育要綱を作るための基盤である。教育省と教育学アカデミーは財務省および保健省と共同で、6歳就学へのスムーズな移行のために農村に新しいタイプの児童施設〝学校幼稚園〟を組織する手続きを定めた。

特別決定はまた、何よりもまず社会的生産への女性の参加の水準が高い地域と新興都市での就学前児童施設の建設、合理的配置、その正常な活動に対する関係省庁と地方権力機関の役割と責任を高めることを定めている。

この決定の中で重要な位置を占めているのは、就学前児童施設の働き手の労働条件と生活条件の改善である。特に保育所で働く看護婦と保母のために、年次有給休暇を36労働日まで増やし（これはわが国の平均休暇日数よりかなり多い）、これによって幼稚園の年長組の保母の休暇日数と同じにすることが予定されている。

すでに述べたが、ソ連では幼稚園と保育所は親が働いている間ずっと子どもを預かり、しかも経費の4/5は国家が負担している。新しい決定によれば、家族一人あたりの平均総収入が一定の額を超えない家庭の親は、就学前児童施設に子どもを預ける費用をまったく負担しなくてよいことになる。子どもが4人以上いる家庭の親は、幼稚園や保育所に子どもを預ける費用を50％軽減される。

幼稚園での食事

話を具体的にするために、モスクワのごくふつうの幼稚園を例に、年長組（5—6歳児）のためのメニューを紹介しよう。こんな具合である。

朝食（朝8時半、10分間の体操のあと始まる）——牛乳に小麦のひきわりが入ったかゆ、またはオートミール、またはキビのひきわりが入ったかゆ、または目玉焼き、バターつきパン、野菜と果物のサラダ（刻んだキャベツ、ニンジン、リンゴ、ツルコケモモ）、チーズ、コンデンスミルク入りのコーヒーまたはココア。

朝11時ごろジュース（ブドウ、ミカン、リンゴ、オレンジその他）をコップ1杯。

昼食（12時50分から）——野菜サラダ（朝と同じかネギとキャベツ）、肉入りスープ（ビートを使うボルシチまたはキャベツを使うシチーまたはさまざまな野菜やジャガイモを使うもの）またはコンソメ、または鶏肉入りヌードルスープ、焼いた肉または煮た肉、焼いた魚または煮た魚、ビーフストロガノフまたはメンチカツ、果物の砂糖煮または果物。

昼食後3時15分—3時30分まで午睡。そのあとおやつ——牛乳と味つきパンまたはキツネ色に焼いた干しブドウ入りのカッテージチーズ。

子どもたちは夕食は家でとる。幼稚園は午後7時までやっているが、ふつう6時ごろになると親たちが子どもを迎えにくる。



柴田教授と語るモスクワ教育大学のミハイル・ロジオノフ副学長。比較教育学の専門家で日本語に通じ、日本の教育制度をよく知っている。

幼稚園に通わせるか家でみるか？

この問題は多くの親を悩ませている。もちろん、選択の余地のない人もいる。それは何よりもまず、女手一つで子どもを育てている母親、学生夫婦、夫の給料では2人以上の被扶養家族を養えない家庭である。

だが、母親が家計に特別の損失を与えることなく、好きな職場でのその後の出世にも悪影響を与えず、子どもが学校へ上がるまでの間しばらく仕事を辞めることのできる家庭も少なくない。あるいは、子どもにとって、おばあちゃん、おばさん、その他、養育を引き受けてくれる身内がいる家庭もある。このような場合、子どもをどうするかという問題への対応は一様ではない。

幼稚園に反対する主な論拠は、幼稚園へ行くと、子どもは家にいるよりもよく風邪を引く、というものだ。統計によれば、幼稚園や保育所に通っている子どもが病気になるのは、平均して年に17日。この間母親は仕事を休まなければならない（法律では病気の子どもの世話をするための休暇は父親にも平等に与えられているが、実際には世話をするのは主として母親である）。17日というのは全国平均の数字であって、ふつうの風邪を例にとれば（もちろん、はしか、水ぼうそう、おたふく風邪、しょうこう熱にもかかるが、これは通常というより、例外である）、気候の変動が激しく、屋内と屋外の温度の差が大きいわが国の中緯度帯と高緯度帯の子どもたちの方が、南部諸地域の子どもたちよりもよく風邪を引く。

幼稚園での学習の新標準要綱は、子どもたちの健康の強化に大きな関心を払っている。

肉体的準備に大きな注意が向けられている。週3回（以前は2回だった）、子どもたちの筋力、敏捷性、平衡感覚、持久力を高めるために体育をやる。

子どもたちの食事の基準が再検討された。栄養学者たちの勧告にしたがって、果物と野菜が増やされ、ひきわり麦と穀粉製品の量が減らされた。食事のための支出は増えたが、それは親の負担には影響していない。

大胆な鍛練システムのおかげで、子どもたちがほとんど風邪を引かないような幼稚園がある（私と柴田教授はアルメニア共和国でまさにこのような幼稚園を訪問した）。文字通り幼児からの水泳のような重要な鍛練法がますます広く普及しつつある。もちろん、すべての幼稚園に競泳コースのある本格的なプールを備えることはとてもできないが、水遊び用の小さなプールはどこにでも見られるようになった。

幼稚園の明らかな優位性は、子どもたちが就学のために十分に準備され、人見知りしなくなり、自分のことは自分でやる習慣、集団の中で行動する能力が発達することである。幼稚園で準備された子は、学校により早く適応し、学校への移行がより自然に行われ、ストレスが少ない。

就学のための準備

新しい要綱の中では、就学のための準備の問題が重視されている。というのは、ソ連の教育改革は6歳就学への漸次移行を定めているからである。

6歳就学を数年にわたって実験し、その効果を分析したのち、ソ連の専門家たちは就学前教育の新しい、より複雑な要綱を作成した。専門家たちは、現代の〝おませさん〟たちは以前考えられていたよりももっとむずかしいことができる、と考えている。たとえば、幼稚園の年長組（5—6歳）の子は、字を読むことができるだけでなく、読んだことを話して聞かせることもできるし、10まで数えるだけでなく、10から逆に数えることもできるし、10までの数を足したり引いたりすることもできる。

私たちが訪れたエストニア（バルト海沿岸の共和国）の〝ラフマ・ブイト〟コルホーズの幼稚園の年長組の勉強ぶりを紹介すると、次のようになる。

勉強は朝食のあと、9時から11時まで行われる。そのあとは遊び。勉強は20—30分続いて、その合間に10—15分の休憩をはさむ。

月曜日——音楽、母語、絵。

火曜日——算数、体育、粘土遊び。

水曜日——母語、体育、絵。

木曜日——音楽、模様貼り。

金曜日——母語、工作、体育。

これらは授業と呼ばれており、たとえば、音楽の授業では、保母がピアノを弾きながら、子どもたちに歌を覚えさせ、楽譜の読み方を教え、音感とリズム感を養う。母語の授業では、アルファベットと個々の単語の読み方を覚えさせ、絵本を読み、読んだ物語や見た幻灯の話をさせ、それらの物語の登場人物の役を演じさせる。絵の授業では、テーマを与えて書かせたり、想像で描かせたり、絵を模写させる。模様貼りでは、子どもたちに美的な趣味や小片を使って一定の形を構成する能力、与えられた空間に模様を配置する能力を発達させる。工作は立体的な思考を養い、量や大きさの概念を身につけさせる。

さて当然のことながら、子どもたちがつねに興味を持ち、飽きないようにするために、どの授業も必ず遊びの形で行われる。幼稚園で行われる授業はすべて、学校改革が提起している主要な課題——集団を通じての道徳教育に役立たなければならない。

新要綱は子どもたちの力に応じた社会的労働の種類と形態を提示している。すなわち、ベッドの整頓、遊んだあとのおもちゃの片づけ、食器の片づけ、配膳、動物や鳥の世話、花壇の手入れ、小さい子の着替えの手伝い、小さい子のための簡単なおもちゃ作りなどである。

このような〝労働〟教育は子どもたちの視野を広げるのに役立ち、子どもたちを仕事に慣れさせ、年長者の手伝いをしようという気を起こさせ、行動の文化と将来の社会の一員としての性格を育てる。

就学前児童施設での教育活動に対する全国一律の要求は、幼稚園出の子どもたちが、わが多民族国家のどの共和国においても、学校での教育プロセスに平等に参加できるよう十分な基礎的準備を施される、と考えることを可能にしつつある。

←

ソビエトの教員養成の実際

東京大学教授　柴田　義松

学校改革と教師

学校教育の質的な改善・充実は、一に教師の能力や人格的資質、そして何よりも学校改革に対する教師自身の意欲にかかっている。教育改革を、教師の問題を抜きにして考えることはできない。今回のソビエトの「学校改革案」においても、教師の資質向上を図るための対策に大きな注意が向けられていることは、前号でも述べた。教師の社会的地位と威信の向上のために最大の努力を払う必要に関して、レーニンの次のようなことばが引用されている。

「わが国では、国民学校の教師は、ブルジョア社会ではこれまでのぼったことがなく、のぼってもおらず、またのぼることもできないほどの高い地位に置かれなければならない。これは、証明するまでもない真理である。われわれは、教師の精神的向上の点でも、かれらをその真に高い使命にふさわしく全面的に養成する点でも、そしてこれが何よりも肝要なことであるが、かれらの物質的状態の向上の点でも、系統的に、うまずたゆまず活動することによって、そのような状態へ前進しなければならない」

今回の「改革案」で予定されている主な改善点は次のようなものである。

(1)　教師養成の質を大幅に改善する。この目的のため教育大学や師範学校の教育課程を改良し、条件がととのいしだい教育大学の修業年限を四年から五年にあらため、また将来、教員養成はすべて高等教育機関でおこなう体制に移行するための条件づくりに着手する。

(2)　教師要員の資格向上制度を一段と改善し、教師は、原則として四、五年に一回再教育を受けられるようにする。

(3)　教師の労働条件の改善をはかり、優秀な教師の活動に対する精神的・物質的褒賞制度を拡大し、九月一日を「知識の日」という名の全国民的祝日とする。

ソビエトの教員養成制度

ソビエトの教員養成は、現在主として、(1)師範学校、(2)教育大学、(3)総合大学、(4)その他の専門教育機関（体育大学・音楽大学など）でおこなわれている。

師範学校は、八年制学校修了者を入学資格とする四年制の中等専門学校で、小学校（一～三学年）および保育園の教師を養成する。

小学校や保育園の教師も、将来は大学で養成することが見込まれており、実際にもすでにいくつかの教育大学では小学校教員養成課程が設けられている。現在、ソ連の小学校教師の三五％はすでに高等教育修了者であり、その数はしだいにふえていくと思われるが、



モスクワ市第5師範学校のマルガリータ・レオンチエワ校長から教科課程の説明を受ける柴田教授



下　裁断の技術を学ぶモスクワ市第5師範学校の3年生。将来、中学校の労働の授業で生徒たちに裁縫を教えることになる。

師範学校の役割がここで急に低下するということはないだろう。

現在、師範学校は全ソ連邦で四五〇校あり、四〇万人ほどの生徒がそこで学んでいる。ここ二〇年ほどの間にも師範学校の数は五〇校あまりふえ、生徒数は十万人ほどふえている。師範学校の役割がこのように依然として大きいことは、第二次大戦後、師範学校を一挙にすべて大学に昇格させたわが国から見ると、意外に思われるところだが、幼稚園教員の養成はわが国でも九九%が短大でおこなわれていることを考慮する必要があろう。ソビエトの就学前教育施設は、現在なお発展途上にあり、年々その数は増加しているが、施設・教師ともに不足しているのが現状である。義務教育就学を一年はやめ、六歳児入学を実現することになると、小学校教師の需要もさらに増大することになる。

それにしても師範学校教育の実際はどうなっているか、私には格別に興味があった。というのは、私自身、戦前の日本の師範学校教育をいくらか体験しており、小学校教員の養成のあり方には今でも特別に関心があるからである。

私たちが訪問したのは、モスクワ市第五師範学校で、市の中心部近くにあった。モスクワ市内に十二の師範学校があるということだが、この学校は二十年前に創立された比較的新しいこぢんまりした学校であった。小規模な学校という印象は、何よりも生徒数が少ないことからくるものだろう。生徒数は全体で七七〇人。これは、ソビエトの師範学校の平均的な大きさである。一クラス三〇人編成で、実験・実習および外国語の授業ではこれがさらに二組に分かれ、十五人で授業をうける。いくつかの教室を見てまわったが、わが国の短大や高校とくらべたとき、この小人数教育がもっとも印象的であった。

学科は三つあり、生徒定員は次のようになっている。

就学前教育学科	一二〇人
初等教育学科	六〇人
労働教育学科	六〇人

このうち労働教育学科は昨年度新設されたばかりのもので、女子労働、つまり被服とか調理など、わが国でいう「家庭科」の教師を養成する学科である。受験生の倍率はこの学科がもっとも高く、今年度は四倍で、初等教育学科は二倍ということであった。

教育内容は、専門教育とともに中等普通教育もおこなわれてはいるが、小学校や保育園の教育活動と直結した実際的性格の各科教授法が主要部分を占めている。教育実習は、三年次に週一日、四年次に週二日、近くの小学校、保育園でおこなわれる。これら教職専門科目が十七、他の一般教育および社会科学系科目が十二で、教育課程の重点は、明らかに実際的な教職専門教育にあり、現場に出てすぐに役立つ実際的な知識や技能の教育が目指されていることがわかる。

この学校の生徒は全員女子で、校長のマルガリータ・レオンチエワ先生もはつらつとした女性である。革命後のソ連には女学校というものはないはずだが、師範学校は、見たところ、わが国の女子短大といった趣である。これは、ソ連の小学校・保育園の教師がほとんど女性であることと関連している。幼い子供の指導には、年齢の近い若い女性が向いていると、レオンチエワ先生は話していたが、子供が十歳になるまで、成人男子のほとんどいない、中等専門教育修了の女性ばかりの教師集団のもとで育てられるということには、いささか問題がある。このことは、ソビエトの教育界でもときどき議論されることのようだが、容易には解決することのできない難題の一つといえるだろう。

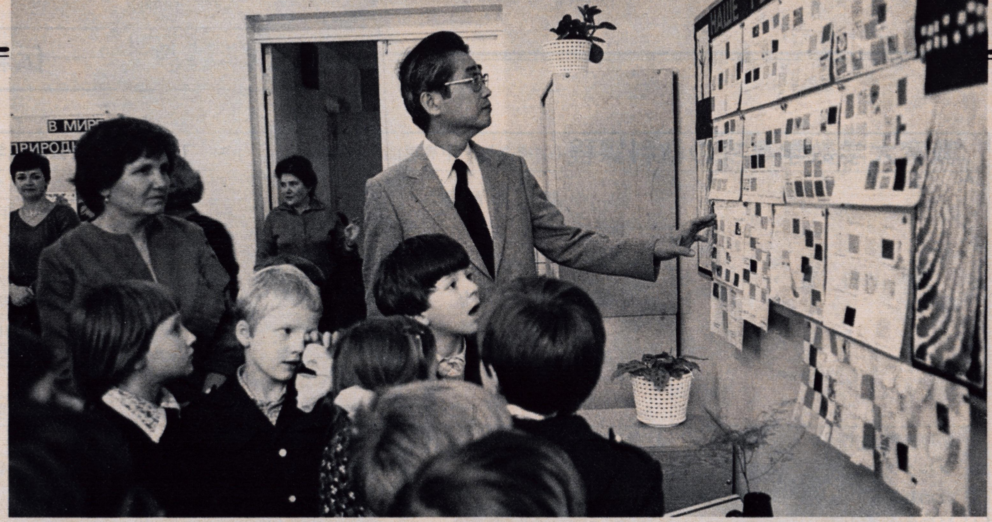
モスクワ教育大学の教育課程

現在、ソビエトの教員養成の根幹をなしているのは、教育大学である。全ソ連邦で教育大学の総数は二〇一、師範学校の半数にもならないが、学生数では逆に倍以上の九〇万人を数える。一大学平均四五〇〇人になるが、そのうち約半数は通信コースおよび夜間コースの学生である。この教育大学でどのような教育がおこなわれているかを知るため、私たちは、レーニン記念モスクワ国立教育大学とアルメニアの首都エレバンにあるアルメニア教育大学とを訪れた。

モスクワ教育大学で私たちを出迎えてくれたのは、副学長のM・ロジオノフ氏であったが、氏はソ連では数少ない日本教育の研究を専門とする比較教育学者である。



モスクワの第1実習生産コンビナートは中学校の上級生（8—10年生）がコンピューターの操作技術をマスターするのを援助している。この14歳の生徒は自分の計算に没頭していたので、記者たちの質問の意味がすぐには分からないほどだった。



モスクワの第91実験中学校の1年生にはまだ6歳児は一人もいない。柴田教授に自分たちの作品を見せているのは全員7歳の1年生。左に立っているのはこの学校のタチヤナ・ピリシチコワ校長。

レーニン記念モスクワ国立教育大学は、ソ連で最古最大の教育大学である。一八七二年創立のモスクワ女学院を基礎として、ソビエト政権により革命直後、モスクワ第二国立大学が組織され、一九三〇年にその教育学部を中心としてモスクワ教育大学が設立されたのである。現在、十五学部八二講座からなり、教員養成学部としては体育学部を除きすべてを網羅している。すなわち、1歴史学、2ロシア語・ロシア文学、3教育学、4就学前教育、5英語、6ドイツ語・フランス語・スペイン語、7欠陥学、8音楽教育、9美術、10数学、11物理、12生物化学、13地理、14化学、15産業教育学。

学生総数一万二〇〇〇人、毎年約一八〇〇人が卒業していく。外国からの留学生も多く、現在四八カ国から約六〇〇人の学生が留学している。授業料は無料だが、そのうえに大部分の学生は国から奨学金をもらい、成績がよいとさらに多額の奨学金が加算される。

教員は二五〇〇名、うち博士・教授一三〇名、助教授四〇〇名、修士六〇〇名で、アカデミー会員を含む多くの著名な学者をそろえている。建物は市内の数カ所に分散し、いわゆるタコ足大学となっているため、モスクワ大学のような威容を誇ってはいないが、上述の学部のほかに九つの研究所、計算センター、天文台、教育大学の教師資格向上学部、モスクワ地域の校長・教頭資格向上学部などが付設されており、文字通りソビエトにおける教員養成をリードする中核的存在となっている。

この大学での教員養成がどのようなカリキュラムでおこなわれているかは、日本の読者にとっても興味あるところだろう。保育園や小学校の教師を含め二八の専攻分野に分かれているが、数学の教師養成の教科課程は次ページの表のようになっている。

教科目は大きく三つに分類できる。

(1)一般教育科目（社会科学系科目、論理学、外国語、体育など）

(2)専門教育科目（この場合、数学系科目）

(3)教職専門科目（心理学、教育学、教科教育法、教育実習など）

この表からわかるように、外国語と体育は一、二年次に集中しているが、その他の一般教育科目、専門科目および教職科目は全学年を通して平行しておこなわれていること、教科教育法が三、四、五年次に三年間にわたっておこなわれていること、教育実習が一年から五年まで全学年にわたっておこなわれていることなどに、わが国の大学とくらべて大きな相違があり、重要な特徴があるといえよう。

特に五年間にわたる教育実習は、モスクワ教育大学で実験的におこなわれている先導的方式であり、大学で学ぶ教育学や専門諸科学の知識と実践とをより緊密に結びつける試みとして注目をあびている。

一年後期から三年前期にかけておこなわれる学校実習は、週一日学校に出かけて、学校の教育活動や生徒の集団生活を観察したり、部分的に教師の仕事の手助けをしたりする。特にピオネールの活動など低学年生徒の課外活動の指導に積極的に参加する。

三年後期の実習は、夏休みの期間中におこなわれ、ピオネール・キャンプで指導者の一員として子供たちの自主的集団的活動に参加する。

四年次の実習は六週間、学校の教師の入念な指導のもとで授業実習をおこなう。

五年次には八週間の教育実習がおこなわれる。授業実習はより自立的性格をおび、各教科でまとまった教材単元を数時間かけて指導するようになる。また、学校や学級の子供たちの指導、両親とのかかわり方など、学級担任や教師の仕事を多面的に学ぶ。

いわゆる開放制の教員養成制度をとるわが国の場合とは大いに異なり、極めて計画的、目的志向的教員養成が大学で、学校とも密接に結びつきながらおこなわれていることがわかる。この教科課程表からは、さらに大学の授業形態、試験のあり方などなお多くの興味あることが知られるが、あとは賢明なる読者の推察にまかせることとしよう。



解き方を覚えた算数の難しい問題を柴田教授に説明する2年生

教育大学数学専攻の教科課程（ソ連高等・中等専門教育省認可）

モスクワ国立教育大学数学部（5年制）

	科目	学期への配置：試験	学期への配置：小試験	学期への配置：学年論文	時間数：全時間数	内訳：講義	内訳：実験授業	内訳：演習	内訳：ゼミナール	内訳：学年制作・論文	1年 1学期(18週)	1年 2学期(18週)	2年 3学期(18週)	2年 4学期(18週)	3年 5学期(18週)	3年 6学期(17週)	4年 7学期(12週)	4年 8学期(18週)	5年 9学期(15週)	5年 10学期(5週)	6年 11学期	6年 12学期
											週授業時数											
1	ソ連共産党史	1、2			170	84			86		5	4										
2	マルクス・レーニン主義哲学	3、4			140	80			60				4	4								
3	政治経済学	5、6			140	70			70						4	4						
4	科学的共産主義		8、9		80	40			40									2	3			
5	科学的無神論	7			28	20			8								2					
6	マルクス・レーニン主義倫理学と美学		5		40	28			12						2							
7	ソビエト法		10		40	28			12											8		
8	論理学		4		40	28			12					2								
9	外国語		1、3、4		220			220			2	2	4	4								
10	専門への入門				36	24			12		2											
11	発達生理学と学校保健		2		54	34				20	1	2										
12	心理学	3	1、2	4	110	72	18			20	2	2	2									
13	教育学	4、5	2、3	4	160	110			30	20		2	3	1	3							
14	学校実習		5		200					200		2	2	4	3							
15	数学教授法	7	6、8、9	8	220	75	15	110		20					1	3	4	3	3	1		
16	職業指導		10		20	20														4		
17	問題解決演習		4、5、6、7、8、9		250			250						2	3	2	4	2	3			
18	教育機器		7		36	16	20										3					
19	数学概論				54			54			2	1										
20	解析学	1、2、3、4、6	1、2、3、5、6	6	540	340		200			6	5	5	5	4	5				2		
21	代数学	1、2、3、4、6	1、2、3、5、6	6	350	190		160			5	6	4	4						2		
22	幾何学	1、2、3、5、6	1、2、3、4、5	6	440	240		200			5	4	5	3	4	3				2		
23	数　論	5	5	6	72	36		36							4							
24	記号論理学とアルゴリズム	6、7			130	100		30								4	5					
25	数体系	8			54	36		18										3				
26	確率論	8			72	36		36										4				
27	解析関数理論	8			90	55		35										5				
28	数理物理学方程式	9			60	40		20											4			
29	学校数学の基本概念	10			50	50													2	4		
30	数学史		9		30	30													2			
31	コンピューターとプログラミング		7、8	8	100	60	30	10									4	2		3		
32	コンピューター数学	9		8	96	48	48											2	4			
33	一般物理学	7、8、9	6、7、8	6、8	280	125	125	30								5	5	4	4			
34	天文学	10			50	30	20												2	4		
35	選択科目		6、7、8、9		240	120		120							2	4	3	3	3			
36	体育		1、3、4		140			140			2	2	2	2								
	授業時間数				4841	2264	276	1679	342	280	32	32	31	31	30	30	30	30	30	30		
	学年論文数				3									1		1		1				
	試験数				37						4	4	4	4	4	4	4	4	3	2		
	小試験数				53						6	6	6	6	6	5	5	6	5	2		

選択科目

1. 外国語
2. 体育
3. ピオネール・コムソモール活動の理論と方法
4. 学級担任の仕事
5. 数学の課外活動の組織と方法
6. その他

実習：実習名	実習：学期	実習：週	生産実習：実習名	生産実習：学期	生産実習：週	卒業論文	国家試験
コンピューター実習	10	4	教育実習	6 7 10	4 6 8		1．科学的共産主義 2．数　学 3．教育学と数学教授法
計		4	計		18		

麻薬中毒との闘い

本誌記者　アンナ・ニコラエワ

編集部にくる投書のなかには、ソ連に麻薬中毒問題はあるか、あるなら、国としてどんな対策を講じているのかという質問もある。そこで、本誌のアンナ・ニコラエワ記者が関係者に取材して、このような読者の質問に答えることにした。

「見たところその男性は80歳か、それ以上に思われました。ひどくやつれていて、はっとするほどでした。足どりも覚つかなくて、息遣いも苦しそうでした。ところが実際にはそのツルディバイ・Aはまだ55歳だったのです」

麻薬中毒患者の治療を専門にしている精神科医リリア・キリーロワはそのときのことを回想して、こう語る。

「目の前に彼にかんする記録がありましたけど、とても55歳とは思えませんでしたね。おそらく、いままでの臨床経験で、なんの治療も施さずこれほど容態が悪化した患者に出会ったことが少なかったためでしょうが、この男性の様子には思わずぎょっとしたほどでした」

自分の意志でタジク共和国（中央アジア）からモスクワへ治療を受けにきたツルディバイは悲しい身の上話をあらいざらい話してくれた。

彼はここ数年のあいだ大変な苦労と危険を犯してまで自分がのむだけの分量のアヘンをなんとか手に入れてきた。ところが、遂にその当てにならない供給源さえなくなってしまった。麻薬の不法使用の取り締まりが厳しくなったのである。アヘンの入手ルートは完全に断たれてしまった。が、人間の方はもう麻薬なしでは生きられないからだになっている。助かる道はひとつしかない。治療を受けることだ。ツルディバイがモスクワの麻薬中毒診療所にやってきたのは、こういうわけであった。

麻薬問題はなくなったが……

麻薬の常用は一九一七年の社会主義革命前は中央アジアや、ロシアのそのほかの一部の地域で広く行われていたが、ソビエト政権樹立後の数年間で事実上根絶された。

「西側の多くの国がいま直面しているような、ああいう悲劇的と言っていい問題は、わが国にはない」——こう語るのは、ソ連の麻薬中毒治療体制の組織者で指導者をしているエドゥアルド・ババヤン。

「ここ数年のあいだソ連全国で年間約二五〇〇人から三五〇〇人の、いろいろな麻薬中毒患者が見つかっている。わが国では麻薬中毒患者はすべて義務的登録制になっている。麻薬常用者の割り出しは必ずしも簡単ではないから、もちろん絶対的に正確な統計はないが、引用した数字はもう長年そのままの水準で変わっていない。しかも、登録されている麻薬常用者全員を対象にわれわれが行っている調査では、その数が減る傾向にあることが分かる」

ババヤンは、ソ連で最近30年間ヘロインの常用者がひとりも見つかっていない事実を挙げた。ソ連ではヘロインの生産も使用も禁止されている。ＬＳＤとコカインについても同じだ。向精神薬の乱用問題もない。一九八三年度はモルヒネ、アヘン、大麻、コデイン、プロメドール、パントポンを常用している麻薬中毒患者二七八二名が登録されている。

ババヤンは話を続ける。

「わが国の麻薬中毒問題を研究することで、われわれは、麻薬を医療以外の目的に使用しないようにさせるとともに、ほかの鎮痛法を代用して麻薬を医療目的に使用するのを合理的に制限するための具体策を作成できるようになっている。16歳未満で、麻薬中毒の診断を下される者はわが国では事実上ひとりもいないと言ってよい。

麻薬常用者となるのは、慢性の重い病気にかかったあとその治療で長期間麻薬を使用した者が大半だ。禁酒した者が酒を飲んだときのような気分を味わいたくなって麻薬を常用するに至ることが時々ある。麻薬について書いた記事を読んだことや、仲間から変わったタバコを勧められたことがきっかけになって麻薬に手を染める者もいる」

入手ルートを断つ

実生活が示しているとおり、麻薬の常用はそれに都合のよい社会的温床が存在する国々で広まっている。ソ連にはそのような温床はない。ソ連には失業はないし、浮浪者や乞食がいないし、青少年は教育を受け、職種を身に付ける大きな可能性を持っているからである。

他方から言えば、麻薬の常用をやめさせる確かな歯止めは、国策として麻薬の生産と使用を厳しく規制することである。ババヤンは語る。

「ソ連では、麻薬の生産と販売はすべて国家の手に握られている。麻薬の生産量、輸入量、輸出量、販売量は医療用、学術的必要に基づいて決められる。ソ連の法律では、アヘンの原料になるケシ、インド原産大麻、南チュヤ山脈（アルタイ）原産大麻、南満州原産大麻を国内で栽培することは禁じられている。また予防上の目的から学者がアヘンの含有量の低い品種のケシを開発したが、その栽培地は厳重な管理下に置かれている。ヘロイン、ＬＳＤ、インド原産大麻、その他の危険な麻薬を生産したり、医学上の目的に使用することもソ連ではやはり禁止されている」

一九六一年の国際麻薬条約と一九七一年の国際向精神薬条約の要求を実行するために、ソ連保健省に付属して麻薬取締常設委員会が設置されている。この委員会には専門家のほか、税関、民警、教育省、医療品工業省、貿易省、外務省の代表がメンバーとして加わっている。委員会の採択する決定は、ソ連保健省がしかるべき省令を公布したあとで効力を持つ。

ババヤンはこの委員会の議長なのであるが、麻薬犯罪にたいする厳しい刑罰について次のように説明する。

「この刑罰はソ連の15共和国の刑法で決まっている。たとえば、法律を犯して麻薬を製造したり、取得したり、保管または輸送したりすると、最高10年までの自由剝奪刑に処せられ、そのうえ財産を没収されることがある。麻薬の窃盗犯は最高5年までの自由剝奪刑を受ける。ただし、刑罰の程度はその麻薬の量と危険度によって決まる。麻薬を他人に勧めたり、自分で使用したりすると最高5年までの自由剝奪刑になるが、未成年者や一群の人に勧めた場合には刑期が最高10年までとなる。法律で禁じられている麻薬の原料を栽培すると、3年以上最高8年までの自由剝奪刑を受ける」

対策は予防が第一

すべての新薬は量産に入る前の臨床実験の段階で、乱用されたらという観点から必ず検討を加えられる。そういう公算がある場合には、麻薬取締委員会でその新薬を患者に渡す一回分の量を定め、特別の処方せん用紙を制定する。

ババヤンは語る。

「一例を挙げると、数年前精神安定剤のうちのグルテチミッドを習慣的に常用するケースが見つかったとき、グルテチミッドは麻薬リストのなかに含められ、特別の処方せんがなければ患者に出さなくなった。こうした取り締まりの結果この5、6年はグルテチミッドが乱用された症例は一件もなくなった。ソ連では麻薬と向精神薬はすべて特別の処方せんによらなければ出さないことになっている。特別処方せんには通し番号がついていて、誰に、誰が、どれだけの分量を出したかを厳重に記録し保管しておいてチェックしている。医師はその麻薬、向精神薬を習慣的に常用する恐れがないかどうかを考慮し、使用する麻薬を数種類、きわめて慎重に決め、それを交互に使うようにしなければならない」

麻薬中毒との闘いには、あまり重要ではないという問題はない。ババヤンの意見によると、麻薬のことを説明したり、麻薬をのんだ場合の幻覚症状を書いた記事を新聞雑誌に載せるのも危険であり有害だと言う。青少年の不健全な興味をそそるからである。

「だから、私たちの委員会は新聞雑誌に載る麻薬問題にかんする記事に、麻薬にたいする興味をそそるような情報が入っていないようにさせるために必要な措置を講じている」と、ババヤン議長は語った。

麻薬患者の発見

麻薬取締機関を構成するすべての環が一致協力してめざしているのは、まず第一に、麻薬の乱用を放任してはならないということだ。そのほか、麻薬取締機関は麻薬の常用者を見つけだして、彼らに医療上の援助を与える。麻薬常用者の発見はいくつかのルートで行われる。

モスクワ市の首席麻薬中毒専門医エドゥアルド・ドロズドフの話。

「第一は、患者の中には進んでわれわれのところに助けを求めてくる者がいる。麻薬の常用者は、自分の生活がまともではないと自覚していることが珍しくない。自分は社会の落ちこぼれだという気持ちをもっているのだ。

もう一つのルートは、予防治療施設の医師のところへ一定の薬品の処方せんを書いてくれとひん繁に頼みにくるケースだ。このことから麻薬の常用者が分かる。予防治療施設の医師はこうした患者を厳しい監督下に置いている。

さらに、団地など小地区の社会秩序の維持にあたる区域担当民警は独自のルートで、麻薬を使用したり、取得したりした事件をすべて取り締まらなければならない。

モスクワにある9カ所の麻薬中毒予防診療所では（これらの診療所にくる患者の大半は麻薬常用者ではなくて、アルコール中毒患者である）、それぞれの具体的なケースに応じて外来患者を詳しく診察・検査し、その結果に基づいて麻薬中毒専門医が診断を下す。中毒症状がまだないことが分かると、その患者を予防リストに登録し、医師の所見に間違いがないか、時間をかけて確かめる。麻薬の常用による症状が確認された場合には患者の治療にかかる。患者の発見——予防診療所——入院というのが全体の図式である」

治療は無料で義務的

21歳の大学生イーゴリ・Ｋはあるとき仲間に勧められて大麻のタバコを吸った。

「ちょっと目が回った。なにをやっても気が楽になり、大声で笑いたくなった」と、すでに入院中のイーゴリはそのときの様子を話す。「そのときの気分が気に入ったので、機会があると同じようなタバコをのんだ」

こんなことが約4カ月続いた。夏休みがきて、大麻のタバコが手に入らなくなった。イーゴリは不快な気分になりはじめた。頭痛がし、非常に怒りっぽくなり、落ち着きがなくなった。大麻のタバコを吸った結果だと分かると、イーゴリは両親になにもかも打ち明けた。両親はその区の予防診療所の麻薬中毒専門医のところへ息子を連れて行った。

イーゴリの治療にあたった女医リリア・キリーロワの話。

「予防診療所で診察や検査を受けてから、イーゴリは私たちのモスクワ麻薬中毒専門診療所にやってくることになりました。普通の治療日数は45日から2カ月、重症の場合には4カ月に延びます。

最初の数日間は患者の虚脱感と目まいを取り除くことに努めました。麻薬をのむことは直ちにやめさせました。この診療所では、麻薬なしでは生きていられないと患者が言っても、患者に麻薬を与えるような治療は禁じられています。前述のツルディバイ・Aのように重症の場合には、3—5日間皮下注射で麻薬を投与します。ほんの少量なら、麻薬をのんだときの陶酔感が起こらず、心臓・血管系に余病を起こさずにすみます。

それからあとは、身体の活力を取りもどすために全身を強くする療法を施します。心理療法、反射療法、電気催眠療法など広範囲の治療法を利用します」

2カ月後イーゴリ・Kは退院した。彼のカルテの抄本は居住地の麻薬中毒予防診療所に送られ、イーゴリは3年間ここに登録されることになる。

キリーロワの話は続く。

「最初の半年間は毎月患者に予防診療所にきてもらって、検査をします。それからあとは、3カ月に一度、半年に一度、一年に一度きてもらい、それで異常がなければ、そのときはじめて患者は健全と見なされます」

17歳の患者エゴール・Sにはキリーロワ医師はイーゴリの場合よりずっと苦労した。エゴールの病歴はイーゴリとほとんど同じだった。

「イーゴリと違っているところは、エゴールは麻薬入りのタバコをのんでいたことを認める気がまったくなく、よほど麻薬患者を扱い慣れた精神科医でなければ彼からいろいろ聞き出せなかったことです。入院したてのころ彼はしかめ面でひと言もしゃべらず、治療を拒否して、しきりに家へ帰りたがりました。一カ月後には診療所から逃げようとしました。彼との接触は非常に困難でした。けれども、治療を進めていくうちに、意志の疎通ができるようになって、どこで麻薬入りのタバコを手に入れたか話してくれ、すすんで治療を受けるようになりました。退院後は普通の生活に戻りました」

キリーロワ医師は麻薬患者の治療で大切なのは心理的な療法だと考えている。

「医師と患者が親密に接触することが非常に大切です。辛抱強く、たっぷり時間をかけて治療すれば、患者は人生観を建て直し、麻薬についての考えを見直すようになります。それだけでなく、患者は医師に接することが多くなれば、医師を信頼しはじめるようになり、挫折してもまた医師が立ち直らせてくれ、元のような家族関係や職場での人間関係を取り戻してくれると分かっているので、挫折した場合には医師の助けを求めてきます。また私たち医師は、患者の身内の人たちとの連絡を保ち、患者への接し方をアドバイスし、患者の一日の過ごし方や食事の取り方まで教えます。患者がなにかいらいらしたりむしゃくしゃした感情を見せるとか、様子が変わったら、必ず私たちに電話するように頼んでおきます。この場合、時機を失しないことが大切なのです」

麻薬中毒は伝染病

患者が治療を受けることを頑として拒み、そのうえ仕事にも学校にも行かなければ、医師から民警に助けを求める。こういう場合、麻薬常用者の強制的な治療にかんする特別の規定が法律で決まっている。

これについてババヤン議長は言う。

「医学的見地からも、また心理学的見地や法律的見地からも強制治療は正当な理由があると、われわれは考える。もちろん、患者のプライバシーに干渉しないで、患者を運命のなすがままに放置することはできる。そうすれば実に簡単なのだが、私の、いやほかの誰の見地から言っても、それでは人道に反する。われわれとしては、患者の希望に反してもタイムリーに援助を与えて堕落、時としては破滅から患者を救う方がずっとよいと考える。

心理学的見地から強制治療が正しいということについて言えば、麻薬の作用下に置かれている麻薬常用者は本人も危険だが、その周囲の人たちにも危険だからだ。

さらに、治療を受けたがらない麻薬患者は、医師の処方せんがないのに麻薬を使用することを禁じた国法を犯しているのである。それにアルコール中毒者もしくは麻薬常用者が罪を犯して、責任能力ありと認定された場合、刑罰を受けるとともに、強制治療を受けることになっている」

麻薬常用者の親族、隣人、患者の住宅の管理事務所、社会団体、企業や官公庁の管理部、民警は裁判所に、強制治療を命じてほしい旨の請願を行うことができる。労働予防診療所の入所期限（1年から2年）は医事委員会の勧告内容に応じて裁判所が決める。労働予防診療施設に入所した患者は治療を受けるだけでなく、労働に従事する（賃金を支払われる）が、一部のカテゴリーに該当する者は特例として入所しなくてもよい。18歳未満の者、60歳以上の男性、55歳以上の女性、重病人と精神病患者である。こういう人たちは労働予防診療所ではなく、麻薬中毒治療施設、精神病院で治療を受ける。

リリア・キリーロワ医師は言う。

「私たちは、麻薬常用は伝染病だと考えています。麻薬常用者は新しい人間を仲間に引っ張りこもうとするものですから、彼らを健康人の社会から隔離して、治療する必要があるのです。早くそうすれば、正常な生活にカムバックさせるチャンスがそれだけ多くなるわけです」

☆　☆　☆

日ソ協会第29回全国総会



金沢市で開かれた日ソ協会第29回全国総会（写真提供＝日ソ協会）

4月13、14の2日間、金沢市の教育・自治会館で日ソ協会の第29回全国総会が開かれた。総会には協会の役員、代議員、評議員三〇五名が参加、中西陽一・石川県知事、江川昇・金沢市長、稲村佐近四郎・自民党衆議院議員、森昭・日本共産党中央委員など政党代表、ソ日協会代表団、在日ソ連大使館代表など多くの来賓も出席した。

在日ソ連大使館を代表してK・チジョフ公使があいさつし、日ソ関係の改善と日ソ協会の発展への期待を述べた。来日したソ日協会代表団のL・サリャエフ団長（ソ連対文連イルクーツク支部長）はあいさつの中で、「本年は世界の人々にとって特別の年です。ドイツ・ファシズムに対する戦勝40周年、第2次世界大戦終結40周年、また広島と長崎で使用された核兵器による最初の犠牲者が出てから40年目にあたります。世界はいま非常に複雑な局面を迎えています。事態の進展がどの方向に向かうのか——核兵器や宇宙兵器を先頭にした軍拡の方向に向かうのか、核兵器の生産停止、使用禁止、廃棄の方向に向かうのか——地球の運命はこれにかかっています」と述べた。

七つの分科会も含め、総会では熱心な討議が行われ、広島・長崎アピール署名運動などを中心とした一九八五年度の活動方針が全会一致で採択された。

総会および閉会後に開かれた第1回全国理事会、常任理事会で二一六名の役員が選出された。主な役員は、会長に石黒武重、副会長に宇佐美正一郎、井上頼豊、小笠原貞子、土方敬太、監事に堀卯太郎、美作太郎、荒木五郎、理事長に清水達夫、事務局長に星野健の各氏が決まった。

ターシャちゃんの絵が大賞に

——第3回カナガワビエンナーレ国際児童画展





喜びのターシャちゃん

右　同じく大賞を受けたポーランドと日本のお友だちと。

3月17日から31日まで、神奈川県立県民ホール・ギャラリーで第3回カナガワビエンナーレ国際児童画展が開催された。一九八一年に始まったこの国際展も年々世界にその存在を知られ、今回は世界91カ国から二万三八七八点の作品が寄せられた。神奈川県内からの応募作品は一万五一三七点。合わせて三万九〇〇〇点余りの作品から入賞作品一〇六〇点が一堂に展示された。

初日の17日、同ホールでカナガワビエンナーレ国際児童画展こどもフェスティバルが開かれ、子どもたちによる各種パフォーマンスのあと入賞者の表彰式が行われた。

大賞3点のうちの1点はソ連のモスクワ州エレクトロスターリ市に住む7歳の女の子、ターシャ・アブヨラッケルちゃんの作品「鏡に映った私」が射止めた。審査総評で内外9人の審査員がいずれも、ターシャちゃんの絵を、7歳とは思えない色感、構成力だと批評し、題材のとらえ方の珍しさ、女の子らしさの素直な表現をほめている。

大賞のあと2点は、ポーランドのプシェムイスラーフ・ゴディツキー君（11歳）の「商い中」、日本の佐々木理恵子ちゃん（8歳）の「新聞を読む父」に授与された。

スポーツ

小都市メレウズのスポーツ生活

カメラ M・ユルチェンコ



ポニーを駆って丘を走る子どもたち

メレウズ市はバシキール自治共和国（南ウラル）のあまり大きくない都市。だが、ここでは大都市に劣らないほどスポーツが盛んで、大勢の大人や子どもがスポーツに取り組んでいる。市当局はそのために最も好ましい条件を作り出そうと努力している。

バシキール産の馬は大昔から非常に評判が高い。ここの子どもたちは、歩けるようになる前に馬に乗ることを覚える、と言われているほどだ。バシキールの民族叙事詩にうたわれている想像上の有翼の馬〝トゥルパル〟は、幸福のシンボルである。最近建設された総合馬術場は市民の自慢のタネだが、これはトゥルパルと名づけられた。他のス

民族的な馬術競技〝キジ・クー（娘を追いかけろ）〟の参加者





馬の水浴。ポニー・クラブの子どもたちは馬の世話も自分たちでする。



メレウズ市の中央広場

ポーツ施設と同様に、この馬場も無料で利用できる。トゥルパルには野外騎乗や馬場馬術をやる大人のスポーツ学校のほかに、子どものポニー・クラブもある。

ここでは6歳から16歳までの子どもたちが学んでおり、スコットランド・ポニーが20頭いる。スコットランド・ポニーはおとなしく、子どもにも楽に扱える。経験豊かなコーチの指導のもとに、子どもたちは乗馬を習う。子どもたちとポニーは深い友情で結



市の総合馬術場で



野外騎乗も重要な課目の一つ



郊外の丘陵地帯は絶好のハンググライダー場。



バギー・レースも若者の間でとみに人気を集めている。



郊外の貯水池ではウインドサーフィンが盛ん。

▼古い伝統を持つアーチェリー。



ばれている。子どもたちは自分たちでポニーの世話をやき、餌をやったり、水浴させたり、ブラシをかけたりする。

メレウズ市民は馬に対して大変な熱の入れようだが、馬術競技にだけ熱中しているわけではない。おしなべてバシキール自治共和国では古い伝統を持つアーチェリーが盛んだが、メレウズ市もその例外ではない。また、現代的なスポーツ種目の愛好者も少なくない。勇気と敏捷性を養うにはもってこいのスポーツであるバギー・レースも若者たちには人気がある。広大な貯水池はウインドサーフィンのためのすばらしい条件を提供しているし、郊外の起伏に富む丘陵はハンググライダーのための理想的な場所になっている。

☆ソ連共産党第27回定例大会の招集と、その準備および開催に関連する課題について

――ソ連共産党中央委員会総会（1985年４月23日）でのＭ・Ｓ・ゴルバチョフ書記長の報告

☆ソ連共産党第27回定例大会の招集について

――ソ連共産党中央委員会総会決定

☆日本記者クラブでのＰ・Ａ・アブラシモフ駐日ソ連大使の講演と一問一答

（1985年４月16日）

「今日のソ連邦」1985年第11号付録

ソ連平和基金に絵画を寄付



ソ日協会理事で作家のサッワ・ダングロフが収集した絵画が、さる３月モスクワの対外友好会館で「母への想い」と題して展示された。これらの絵画はゴリャエフ、ファリク、ゴンチャロフ、ベレイスキーらソ連の有名な画家や外国の大家の作品で、作者たちからダングロフに贈られたもの。

展覧会の閉会後このコレクションはソ連平和基金に寄贈された。写真は展覧会の開会式であいさつするダングロフ。

文化トピックス



バクーの春の祭り

アゼルバイジャンの首都バクーの名所の一つ古い「乙女の塔」の近くの広場や町角で、民謡や伝承を吟誦する語り手のまのびした歌声が、春の祭りの開始を告げた。

祭りは中世に建てられたバクー城で行われ、多くの見物が集まった。この地方の三弦楽器サアズの伴奏で歌う歌謡コンクールには、希望者全員が参加できた。このほか輪舞や綱渡り競技なども行われ、観客を沸かせた。また旧市場広場では見物の人々の前でさまざまなお国料理が作られた。

（写真――サアズの調べにのっていやがうえにもお祭り気分は盛り上がる）

世界の人形劇の人形展



左上　日本の前橋市の学校の人形劇クラブのママ山羊と７匹の子山羊（『狼と７匹の子山羊』から）

左下　モスクワ中央人形劇場の『兵士と悪魔』の音楽家たち

中国の影絵芝居の人形





さる２月から４月までモスクワの全ロシア装飾・応用美術博物館で舞台人形展が開かれ、日本を含む各国の人形劇に登場する最も興味深い人形300点余りが展示された。

展示物の中核となったのは、約50年前に設立されたモスクワの中央人形劇場博物館所蔵の人形である。中央人形劇場の博物館にはソ連の120の人形劇団と外国の50の人形劇団の人形2500点余りが収蔵されている。

の方々ばかりですので、この問題にふれようとは思いません。一言申し上げておきたいのは、この問題に実際に関心が寄せられているのであれば、私はもう一度ここにお集まりの皆さんと会って、アフガニスタンについても、ポーランドに対するソ連の内政干渉というデッチ上げについても、現在は当の米国人や、日本人も否定していますが、南朝鮮機の事故はソ連の責任だとやらいううんざりするほど聞かされた主張についても、皆さんにお答えする用意があります。これは、スパイ目的をもって航空機がわが国の領空を侵犯した計画的行為でありました。われわれの行動、わが国のパイロットたちの行動が正当であったということは、われわれではなく、世界の著名な法律家たちによって記録にもとづいて立証されています。従って、日本のマスコミで以上のような問題を煽り立てることは日本国民をいたずらに惑わすだけです。それに加えて、ソ連が極東から日本を脅かしているなどという主張がなされていますが、何によって脅かしているか言える人は、ここにお集まりの皆さんのうちで一人もおられないでしょう。何によって、誰が脅威を与えているのでしょう？　誰一人答えられないのではありませんか。ところが日本のマスメディアは私が日本に着任して以来、文字通り一日おきにこのテーマを取り上げています。ですがアフガニスタンやポーランドの出来事についても南朝鮮機の事故についても、極東から日本への脅威など一切ないことをわれわれが実際に再三言明してきたということについても、真実を語る必要があるのではないでしょうか。それはデッチ上げられた〝脅威〟です。ソ連側から講じられる可能性があるのは、日本領からソ連に対して何か敵対的なことが行われた場合の対抗措置だけなのであります。それだけであって、それ以上ではありません！

一九七三年10月10日付のソ日共同声明の引用に関して言えば、私はそこに述べられている次の個所を指摘したいのです。「……双方は第二次大戦の時からの未解決の諸問題を解決して平和条約を締結することが両国間の真の善隣関係の確立に寄与することを認識し、平和条約の内容に関する諸問題について交渉した」

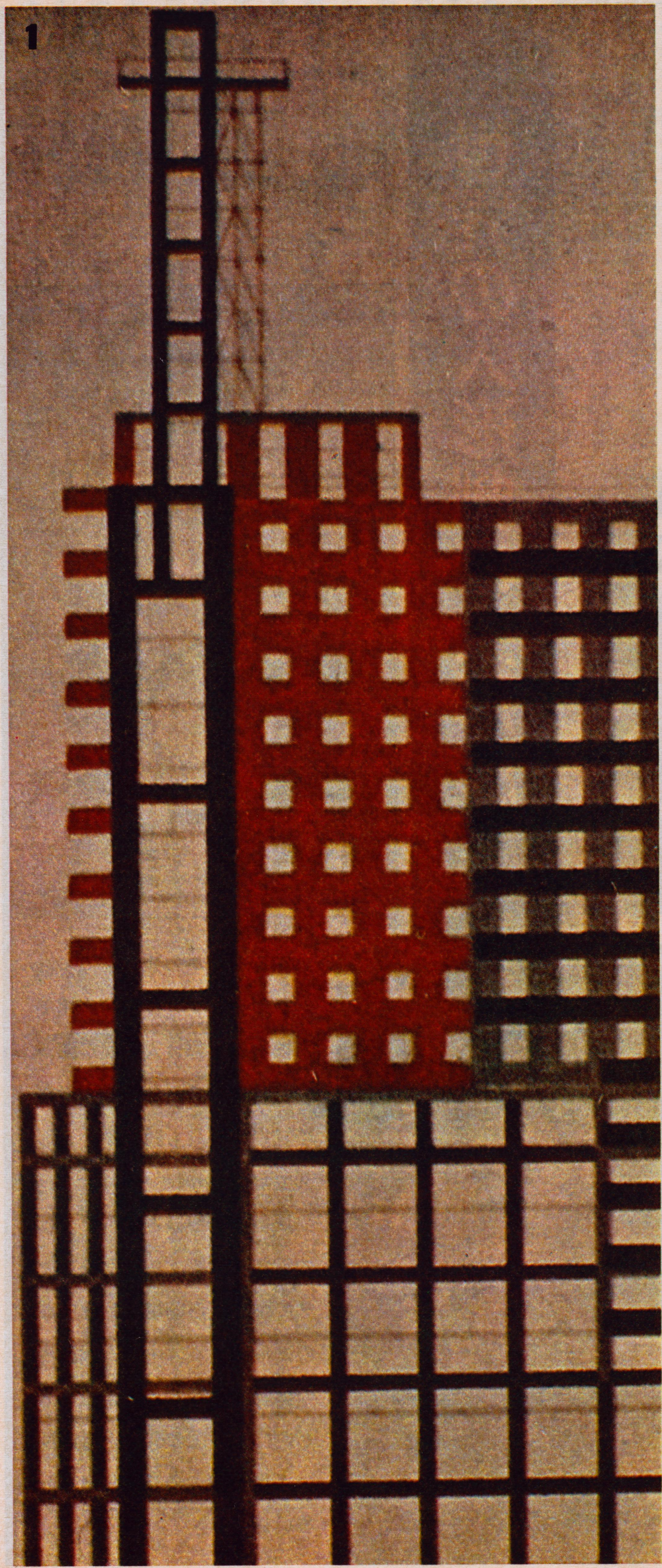
これから明らかなように、この声明では領土問題については一切ふれられなかったのであります。

もう一度グロムイコ同志の訪日について申し上げます。くりかえしますが、観光旅行のような旅行のためのソ連外相の日本訪問はわれわれには不要です。訪日は、それによって日ソ間の善隣関係の改善と発展への方向が示されるような文書ができるようにするために必要なのです。まさにこのことが、わが国の国民にも日本国民にも必要なのであります！　単に彼が日本にきて、皆さんと会うためだけではないのです。もちろん、彼が日本にくる時には皆さんとお会いすることでしょう。私は彼が皆さんと会見するよう説得するためにできる限り努力いたします。もしかしたら、この建物でということになるかもしれません。しかし単にやってきて、おしゃべりして帰るというのであれば、そのような会見は誰にも何一つ成果をもたらさないでしょう。私が講演の中で挙げたリストの中で何か具体的なものを作成し、調印し、明文化して、ソ日両国民の幸福のためになるようにすることが必要なのです。従って、これは条件ではなく、必要なことなのです。

『今日のソ連邦』一九八五年６月１日号付録
発行人　加藤宣幸
編　集　ソ連大使館広報部
（郵便番号１４１・東京都品川区東五反田３—９—13・電話０３—４４７・３５３６）
印刷・発行所　（株）新時代社
（郵便番号１０１・東京都千代田区神田神保町１—44・電話０３—２９３・４８８１）

建築ルネサンスへの道

本誌記者　ビタリー・トレチヤコフ

1


1　1920年代のソ連の建築家の優秀設計作品の一つ——モスクワの超高層ビル（V・クリンスキーの作品）

2　パリの国際建築家同盟のコンクールに入賞したアフリカの部族のための住居（現代のモスクワの若い建築家集団の設計）

建築家の探求と大量建設方式の画一性とはおよそ相容れないもののようだが、いまモスクワの若い建築家たちは、どうしたらその二つをうまく融合できるかを考えている。

若い建築家たちとの会話を始めるに先立って、まず現代ソビエト建築の若干の特徴を挙げておこう。

第一の特徴はソビエト建築の**民主性**である。それはまず

2


例えば工場長と同じ工場の労働者が同じアパートの新築のフラットに入居している点に現れている。エリートたちの住む団地は、腕のよい建築家が設計し、「一般の労働者」用の団地は、腕の劣る建築家が設計するというようなことはソ連にはなく、公共住宅は大体がオリジナルな設計によって建てられている。

第二の特徴は、**現代建築と都市・自然環境とが調和していること**である。それはあらゆるところでうまくいっているわけではないが、全体としてこの方向が主流となっている。

都市建設問題の総合的解決。この総合的解決は今のところまだ完全にうまくいっていないことが多い。たとえばボルガ川沿岸のトリアッチ市のボルガ自動車工場と同市の工場に接続する新区域の設計は、原則的によく出来たと認められてはいるが、総合的に処理されず、「住宅地区—企業」という一つのまとまったアンサンブルにはならなかった。もう一つ例を挙げておこう。カマ自動車工場があるブレジネフ市（タタール自治共和国の旧ナーベレジヌイエ・チェルヌイ）には地下道や歩道橋が設置され、市の交通問題はうまく解決された。それに伴ってこの市の数十年先の運輸インフラストラクチャーの問題が解決された。交通機関は団地区域から完全に締め出されたが、交通幹線は市を幾つかのコンプレクスに事実上分断してしまった。これらのコンプレクス間の歩行交通は、距離がひどく離れていることや沢山の地下道や横断歩道を通らねばならないことで、非常にわずらわしい。

次の特徴は**建築が華麗になっていること、標準規格の建物の仕上げでの色の使用と小建築形式に関心が高まっていること**である。この傾向は、一方では完全に新しい都市コンプレクスに最もはっきりと現れており、他方では既成の歴史的核をもつ諸都市に現れている。つまり建築家たちは完全に新しい建築環境ならびに古い建築物と並んで建てられる近代的な建物を"人間味"のあるものにしているのである。

過去の基準に代わる新基準。一九六〇年代の標準規格建設の基準に代わって、新しい、十分に改善された基準が登場した。これらの基準だと、限られているとはいえ、種類の多い規格部品から、さまざまな建築様式の建物をつくることができる。

民族派の繁栄。一九六〇年代の新しい住宅団地は、ある地域内だけでなく、ロシア北部とたとえば中央アジアといった対極的な自然・気候条件の地域同士でも、互いに似かよっていたが、現代の住宅団地（ましてやオリジナルな公共建物）は、たとえばタシケント、タリン、モスクワ、エレバンではそれぞれ異なる特色をもっている。建物に民族色、時には純民族的イメージをもたせる多種多様な建築形式が使われるようになって、沿バルト海、中央アジア、カフカズ、ベロルシア、モスクワ、レニングラードなどのそれぞれに特色のある建築流派が、あらためて話題になり始めた。

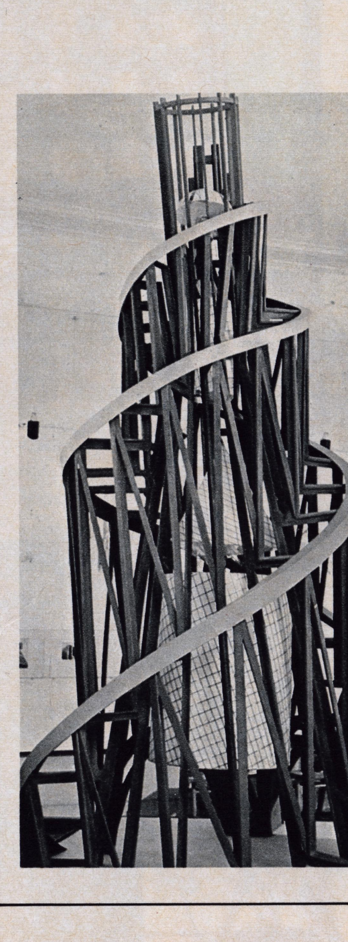
ソ連の新しい建築設計の成果についてはもっと沢山のことを語ることができるが、ソ連には建築家に対する批判的意見も十分にあることを認めなければならない。特徴的な傾向と言えるのは、この批判が主に未来の立場に立っていることである。つまり新しい型の都市である社会主義的都市、建築家だけでなく、一般市民から見てどの建物、どの街区、都市全体も傑作であるような単一の大都市機構——社会主義的都市の理想を完全に守れという要求と立場に

3　1920年代のソ連の建築家の優秀設計作品——第3インタナショナル記念碑（V・タトリン設計）

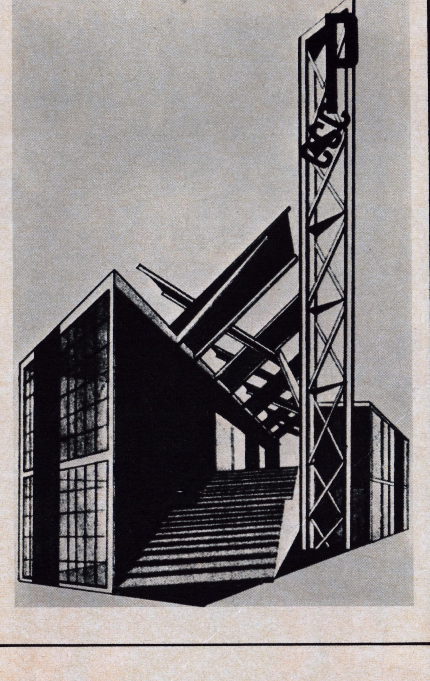
4　1920年代のソ連の建築家の優秀設計作品——1925年のパリ国際博のソ連館（K・メリニコフ作）

5　「衰微した都市環境における小アンサンブルの再生」国際コンクールに出された「蝶」（I・レジャワ、M・ベロフ作）。廃虚になった都市の建物の跡地に、都市の廃棄物を加工処理して新しい建物や環境の材料をつくる超近代的工場が建てられ、工場は役目を果たしたあと解体されるというのが設計の趣旨。

3



4





5

立った批判である。

そのことがモスクワの若い建築家たちと話し合ったときに話題になった。

構想のコンクール

私の話し相手になった人たちは、いずれも国際建築コンクールにモスクワ建築大学在学中から応募し始め、何回も入賞しており、各自設計作品がすでに幾つか採用されて実際に建てられている人々だ。

この若い建築家グループの先生であり、非公式のリーダーである**イリヤ・レジャワ**建築大学教授は、数回国際コンクールにソ連の若い建築家を代表して参加し、最近のパリのコンクールでは審査員を務めた。これらの国際コンクールでのソ連の建築家たちの成果について、レジャワ教授は次のようにコメントしてくれた。

「ソ連の学生たちは一九七〇年代初めから国際建築家同盟のコンクールに応募している。最初に応募したウラジスラフ・キルピチョフ君はパリのコンクールで1等に入賞した。その後も上位の賞や奨励賞に入った者は数多い。最近の〝ユーザーに奉仕する建築〟コンクールでソ連の学生建築家たちは、上位の賞を二つ、奨励賞を四つ獲得し、非公式ながら〝団体〟で優勝した。だから優秀建築グループに贈られる賞がソ連に来るものと期待していた。しかし同僚の審査員の話では、ソ連の建築家たちの作品は余りにも多様なので、ソ連の建築グループを全部一つにまとめて語れないということだった。だがこの意見は審査員全員の意見ではなかった。たとえば英国代表は、ソ連の建築家グループをやはり優秀と認めなければならないと考え、コンクールに入賞したイギリス人たちに、ソ連の建築大学を視察するためのソ連旅行を賞として与えるよう希望した。そして審査員団はそのように決めた。

ここ数年の国際コンクールでのソ連の若い建築家たち（学生、〝成人〟とも）の成功は、ソ連の建築界の創造力の高さを示しているものであり、若干の分野ではソ連の建築界が世界一であることを遺憾なく示していると言えよう。残念ながらわれわれは、コンクールから実際の建築設計、建設に移るさいに、この創造力を必ずしも発揮できないでいる。それは複雑な問題であり、別個に取り上げなければなるまい。しかしひとこと言っておきたいが、ソ連の今の建築家の若い世代は、仕事の面で大いに前途有望であるだけでなく、標準設計の基準や画一性の〝厳しい抑圧〟を十分に克服することもできるだろう」





社会主義的建築とは？

われわれは建築大学の学生設計室に集まった。壁や机にはファンタジックな建築の見本や建築芸術の年代記に恐らく記載されることになる作品が見られる。

集まったのは、部屋にたえず駆け込んでくる学生たちと外見はさほど違わないが、モスクワの建築界では名の知られた人々だ。その顔ぶれは、**ウラジーミル・ロマキン**（建

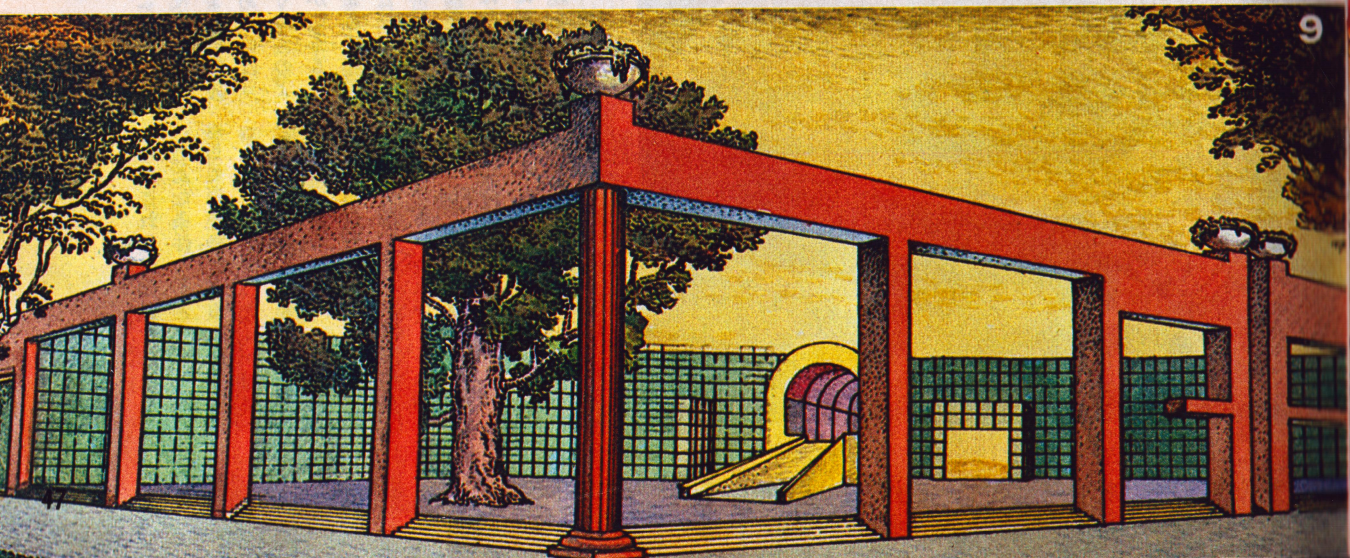
6　日本での展覧会用の「未来都市」の設計。（作者はY・アバクモフ、V・ロマキン、M・ラバゾフ、V・チューリン、A・サビン、M・クリヘリ）

7　〝公園パビリオン〟をテーマにした建築ファンタジー（M・ハザノフ作）

8　「市街の景観」をテーマにした建築ファンタジー（M・ベロフ作）

9　パリの国際コンクールに出されたラ・ビエット公園の設計の一部（設計者はY・アバクモフ、M・ベロフ、B・エリョーミン、V・ロマキン）





築大学建築設計科講師、32歳）、**ユーリー・アバクモフ**（建築大学学生設計室職員、27歳）、**ミハイル・ベロフ**（建築大学都市建設科講師、28歳）、**ミハイル・ハザノフ**（保養地設計研究所〔保養地施設を設計する国立の組織〕建築家グループ指導者、33歳）の4名である。

まず初めに建築構想コンクールのことがちょっと話題になる。出席した建築家たちの意見によると、これらのコンクールで示されているのは、いま世界ではどのように建設しているかとか、あるいはコンクールのあとすぐにどのように建設するかということではなくて、どのように建設すべきかということだ。コンクールではユーザー（審査員がユーザーを代表）と建築家との間に対立はないが、現実では両者の間に沢山の職業的問題や他の問題を抱えた建設者が介在する。コンクールはこれらの問題を捨象し、どんな条件のもとでも芸術としての建築を守ることができる。

ここで各人に発言してもらおう。

アバクモフ――「建築は記念碑芸術であるだけでなく、美術でもある点が、よく忘れられている。建築設計図そのものはグラフィックの傑作になりうるし、壁にかけることもできる。しかし、設計が現実の建物になって日の目を見るのがもっとよいことはいうまでもない。ところで、設計図に対するこうした態度は、いま建築中の建物の質を明らかにするための試金石の一つである。これらの建築中の建物の設計図の多くは、住宅または博物館のインテリアの装飾にはとても使えまい」

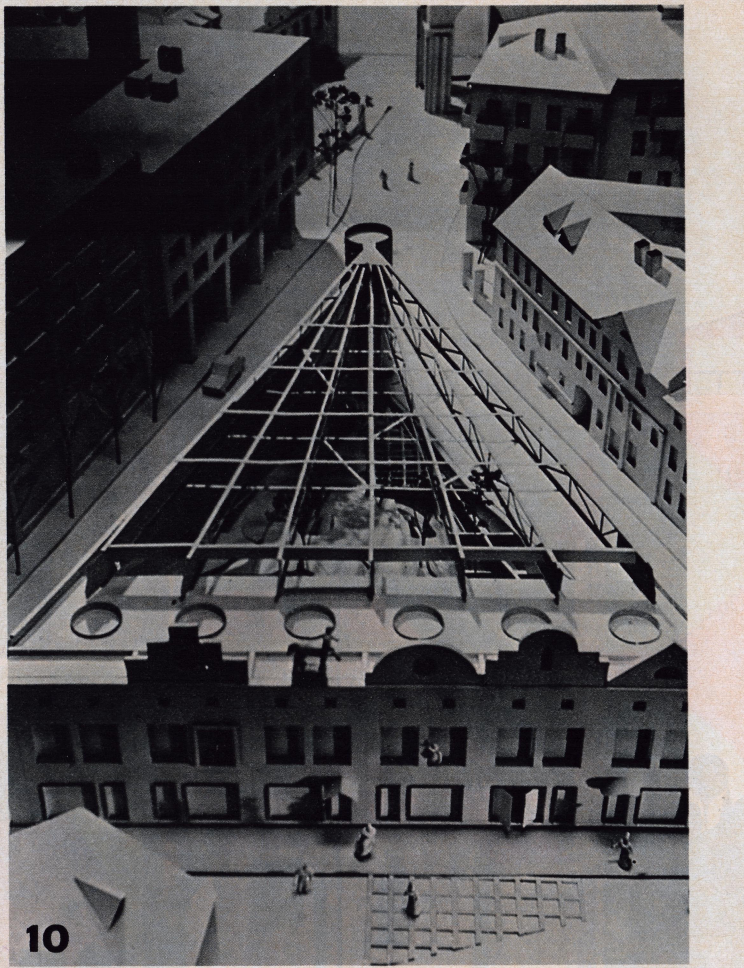
ハザノフ――「いま突然全世界で一九二〇年代のソ連の建築への関心が高まっているのは、どうしたわけだろうか？ 状況全体や現代建築の公理といったものが、その時代とは違っているし、その時代の設計が実際に使われた数は十指に足りないが、設計処理の重視と当時のわが建築の特色だった形式への“傾倒”は、新しい段階に入って標準規格建築にあきた現代建築家の好みに合ったようだ。ベスニン兄弟、メリニコフ、レオ

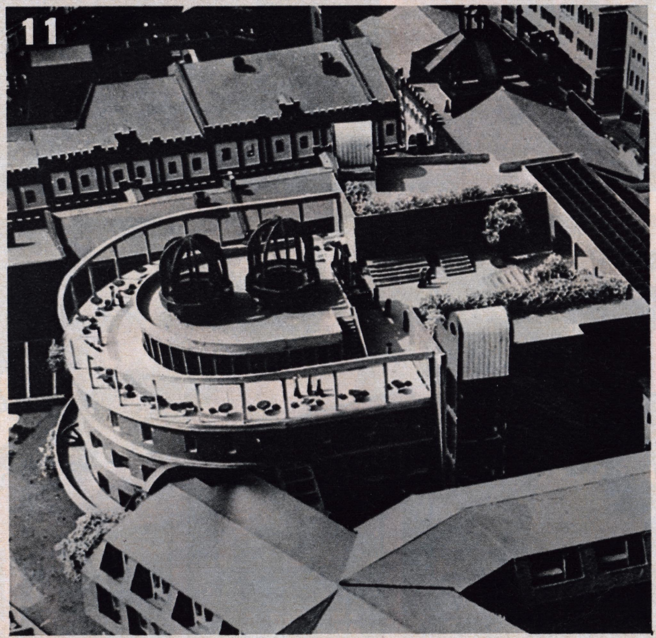
10　ユネスコの「未来の住居」コンクールの応募作品――温室の家（V・ロマキン、M・ベロフ作）

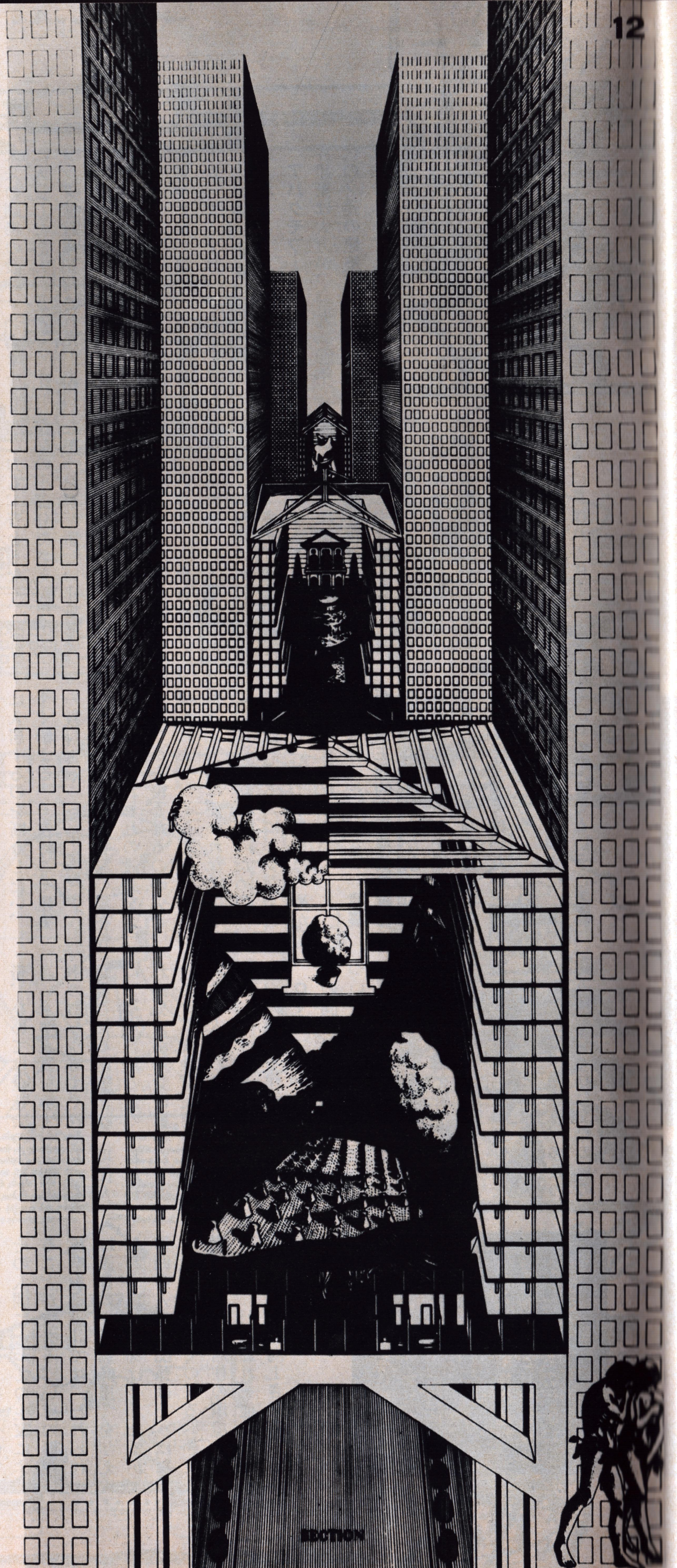
11　モスクワ建築大学卒業者たち（現在建築工房モスプロエクト２に勤務）が制作したモスクワ旧市街の一つの改造案

12　「住居の歴史主義とローカル性」国際コンクールに出されたモスクワ建築大学生A・サビンの作品「反高層」。近代都市の超高層ビルの間の冷たい感じのする空間に人間味を出すため、生態系の保全に役立つ建築物をはめ込む。

13　英国の「人形の家」国際コンクールに出された「遊戯の家」の設計作品（Y・アバクモフ、S・ボドヨムチコフ作）


10


11



12


13

ニードフ、クリンスキー、エリ＝リシツキー、タトリン、ラドフスキーら多くの人々の実際に使われなかった設計は、現実の建物にはならなかったが、今も建築上の傑作であることは確かだ」

ベロフ――「外国で一九二〇年代のソビエト芸術に対する関心がますます高まっていることは、われわれも自分でしかと納得した。われわれは未来の劇場の設計コンクールに入賞したあと、賞としてオランダ旅行に招待された。ある都市でオランダその他の西欧の芸術家の作品を見ようと思って、現代芸術博物館に立ち寄ったが、驚く一方でうれしかったことは、一九二〇年代のソ連の前衛芸術が沢山あったことである」

アバクモフ――「現代の世界建築は大方が、一九二〇年代のソ連の建築家の構想の再認識である。しかしこれらの構想はあまり現実のものとはなっていない。ご承知のとおり、当時コンクールはひんぱんに行われ、コンクールのおかげで沢山の傑作が誕生した。今コンクールを通じて外国の建築家や建築作品を求める人々は、ソ連の生活を前よりもよく理解している。だから日の目を見なかった設計さえ、文化のなかでたくましく生きているのだ」

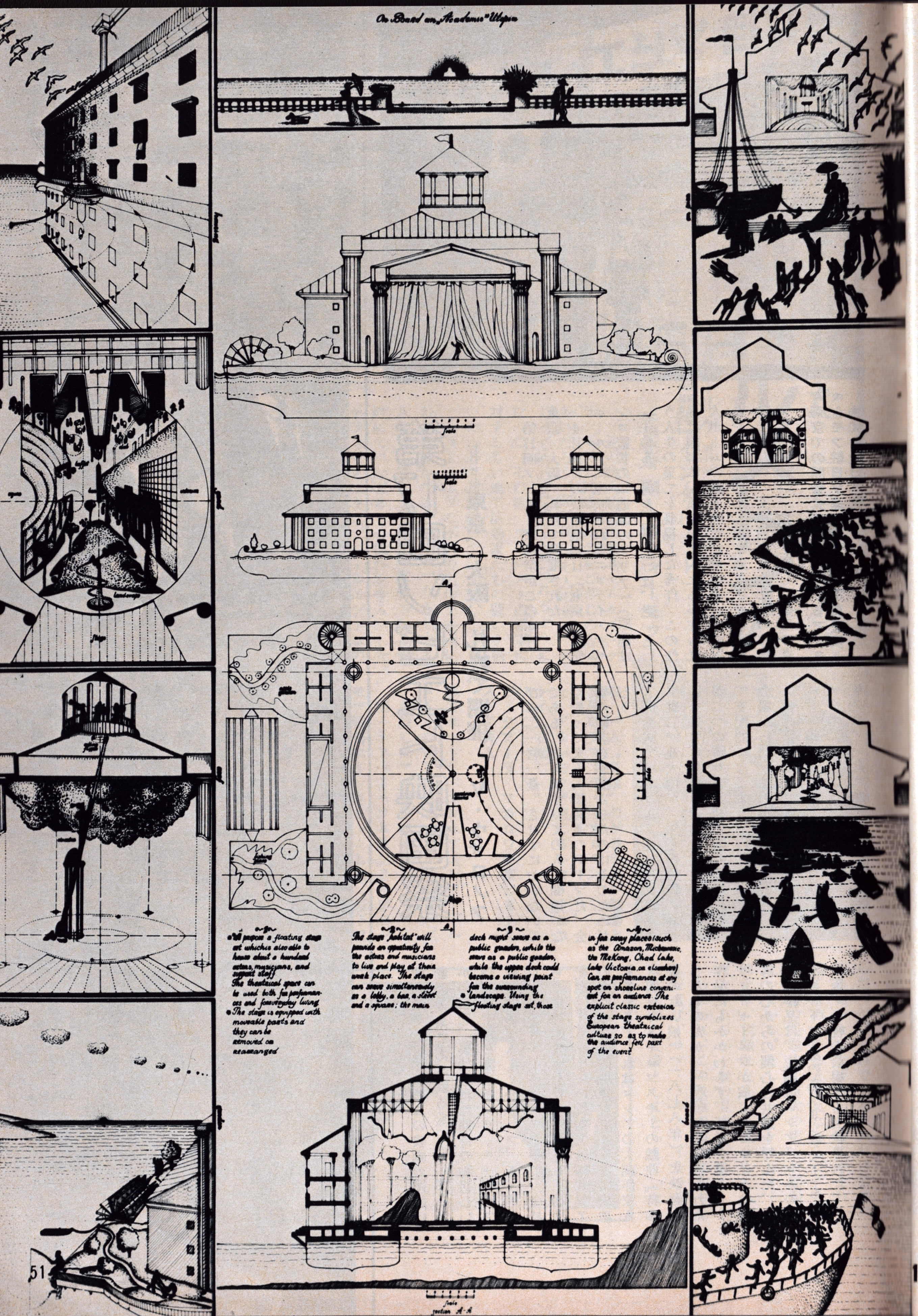
ハザノフ――「一九一七年の10月社会主義革命の頂上で成長した一九二〇年代のソビエト建築は、偉大な実験であり、たとえ二〇〇〇年になっても建築できないようなものが、多く設計された。当時は国に力も、資金もなく、設計作品の小部分でさえ実現できなかったが、新しい建築形式と構想を創造するという社会主義社会の社会的注文は、立派に達成された。当時や（設備のよいフラットを各世帯に確保するための）大量建設が最も盛んに展開された六〇―七〇年代でさえ、建築設計をすべて実現することは、不可能であったに違いない。しかし建築構想と建設産業の実践とを完全に引き離したり、対立させたりしてはならない」

ロマキン――「社会主義は建築の分野で二つの壮大な目的を実現した――一九二〇―三〇年代に一連の天才的構想と設計を世界に送り出し、また人々に喜ばれる住宅をどんどん都市に建て、都市の住宅不足はほとんど解消した。古い都市環境を保存するという、もう一つの課題も、ここ数年来かなり着実に解決されている。いま建築構想と実際の建設を改めて統合しなければならない時が来ている。この過程はもうすぐ動き出そう。ではそれはいつか。最初の人が住宅が美しくないことを口実にして、提供されるフラットに入居するのを断りしだい、すぐ始まる。その時こそ建築の教科書や二〇年代のアルヒーフ、ソ連の建築家の現在の設計（われわれの設計を含めて）から優秀なものが引き抜かれよう。そしてそれらがたとえ実際に使われなくても、この頑固な居住者のための住宅を設計する人に、少なくとも新しいアイデアをほのめかしてくれるだろう」

私は皆にたずねた。**「建築が社会主義的生活様式の確立にどのような巨大な創造的役割を果たしうるかを理解している人は、おそらく建築家の中にもそう多くはいないと思う。しかももちろん、この建築が民主主義を単調さに、誰もが利用できるということを規格ものにすり替えず、またユーザーが余り注文をつけないということを建物の正面の特徴のなさや目をたのしませる部分のないことにすり替えないという条件のもとでの話である。この点についてご意見があれば……」**

アバクモフ――「建築の社会的役割は大きい。私はこう言いたい――各世帯にとって便利で美しい住宅は、この世帯、ひいては全社会の生活の高い水準と質を示す。人間の中のあらゆるすぐれたものを発現させる建築とは、現代人にとって当然のもの、われわれが先人から受け継いだもの、リスク、実験、突発的事態に対する人間の欲求を満たすもの、つまり未来の建築の諸要素を内臓する建築である」

ロマキン――「いまわれわれの間では社会主義的文明についてさかんに論議されている。建築は居住環境づくりを通じて社会主義的文明の形成に重要な役割を果たすことができるからだ。このような建築の合理性は消費を理性的なものにし、美と優雅がけだかい精神的要求を生み、多数の巧みに配置された交際の場の存在は、交際の希望と交際の熟練を生み出し、古い建築の要素の採用は過去、先祖への愛、前の世代の人たちの貢献への尊敬を生み、あらゆる建築的要素の十分な検討は周囲の事態に対する関心を生み出す。一言で言えば、社会主義的建築は、人間に必要で便利な個々のフラットから人間をいわば引っ張り出して、街区全体、都市全体、社会全体をその人間にとっての生家にすることができる。いまの形の標準規格設計では、われわれは設備のよい〝蜂房〟を与えられ、自分自身はよくなるが、周囲の人との関係はそうはならない。建築での来るべき段階は、交際と居住の環境を結合して、われわれを他の人々との関係でも向上させることになるだろう」



14

14 カスピ海、チャド湖、ビクトリア湖などの大きな湖用の巡回劇場案（I・レジャワ、V・ロマキン、M・ベロフ作）。劇場の建物は双胴船にとりつけられ、俳優たちの住居にもなる。

横川・日ソ貿易協会会長に民族友好勲章



民族友好勲章(左の勲章)を胸に答辞を述べる横川正市・日ソ貿易協会会長。その左：アブラシモフ駐日ソ連大使。

ソ連最高会議幹部会は3月6日付の同幹部会令で、日ソ両国国民の友好と協力の発展・強化への多大の貢献に対して、堀江邑一・日ソ協会副会長と横川正市・日ソ貿易協会会長の両氏へ民族友好勲章を贈ることを決定しました。

このうち、横川正市・日ソ貿易協会会長への民族友好勲章授章式が4月5日、東京の駐日ソ連大使館で行われ、P・アブラシモフ大使がソ連最高会議幹部会の名において横川氏に民族友好勲章を授与しました。アブラシモフ大使は横川氏にお祝いの言葉を述べ、日ソ関係を強化する上での氏の活動の重要性を指摘し、この崇高な活動分野でのいっそうの成功を希望しました。

出席者一同の温かい拍手を受けた横川氏は感謝の言葉を述べ、今後も日ソ友好のために重ねて努力すると語りました。

なお、堀江・日ソ協会副会長への同勲章授章式は近くモスクワで行われる予定です。

第17回ソビエト映画祭

——東京、大阪、札幌で開催

V・ウォロノフ



▲東京での開会式であいさつするアブラシモフ駐日ソ連大使(右)(写真提供＝株式会社日本海)

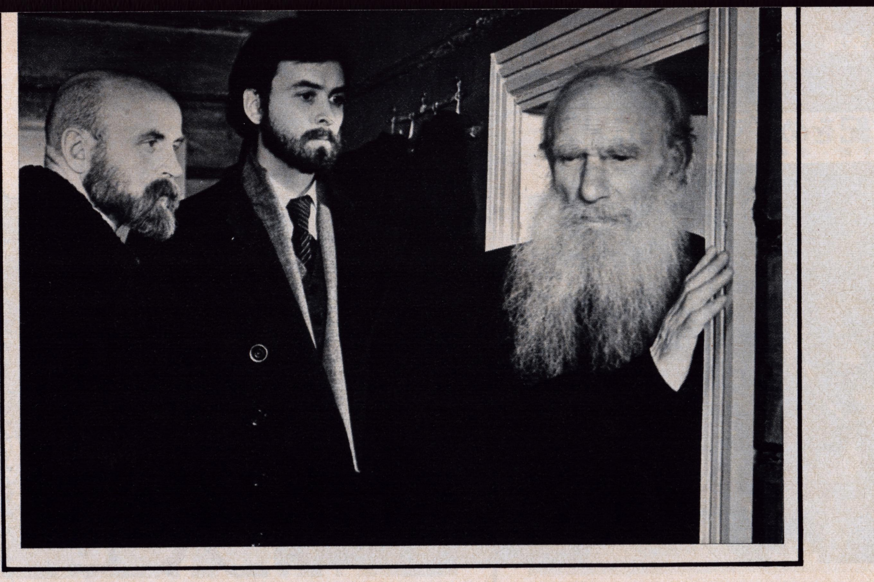
第17回ソビエト映画祭がこの4月、東京、大阪、札幌で開催された。

4月16日の映画祭初日（東京・読売ホール）に上映されたニコライ・グベンコ監督の『追憶のアリア』（原題は『生命も、涙も、愛も』）は、老いという人生の果てを凝視した秀作。この作品は観客に、孤独な老人たちが住む老人ホームの廊下をただ単に老人への思いやりを込めて〝通り過ぎさせる〟だけではない。文字通り老人たちの体験を共に味わい、共に生活し、彼らの喜びに〝一喜一憂〟させずにおかないのである。老いはすべての人に間違いなくやって来る人類共通のテーマだ。会場の観客を感動させたのはそのためだろう。

開会式ではピョートル・アブラシモフ駐日ソ連大使が、相互の信頼、お互いを知り、分かり合おうとする気持ちが二つの隣り合わせの国の関係において支配的になるよう望むとあいさつし、会場から熱い拍手が送られた。

映画祭で上映された2本目の作品は『持参金のない娘』（原題は『残酷なロマンス』）で、監督はエリダル・リャザノフ。一九八四年ニューデリー国際映画祭グランプリのこの映画の題材は劇的要素にあふれるもので、実らなかった恋、裏切られた期待の物悲しい詩情が全編を流れている。リャザノフ監督は名優A・ミャフコフ、A・ペトレンコ、N・ミハルコフを得て、金持ちの精神的荒廃を見事に描写し、19世紀七〇―八〇年代の資本主義国ロシアの女性の隷属的地位をあばくのに成功している。これはロシアの大劇作家A・N・オストロフスキーの戯曲『持参金のない娘』（一八七八年）を映画化したものだが、一〇〇年前に書かれた作品にもかかわらず、新進女優ラリーサ・グゼーエワが演じたヒロインは観客の心からの関心と共感を呼んだ。

両作品は、短編『ロシアバレエのシルエット』『謎の鳥シリン』とともに、大阪、札幌の会場でも上映された。



日本を訪れた〝文豪トルストイ〟

——セルゲイ・ゲラシモフ監督にインタビュー

本誌記者 M・エフィーモフ

ソ連の映画監督の長老セルゲイ・ゲラシモフ（79歳）の名をご存じの方は多いだろう。50年前、『七人の勇者』によって彼の名は広く知られるようになった。その後、ファシスト占領軍に対する若い地下活動家たちの闘いを描いた『若き親衛隊』（一九四八年）、M・ショーロホフの不朽の名作を映画化した『静かなるドン』（一九五七―五八年）、環境保護の問題を扱った『湖畔にて』など多くの傑作を生み出した。ゲラシモフはまた、レールモントフの『仮面舞踏会』、スタンダールの『赤と黒』など世界文学の古典も映画化している。そしてこのほどゲラシモフの新作『レフ・トルストイ』が封切られた。ゲラシモフはこの作品ではシナリオ、監督、主演の〝三役〟をこなしている。

4月12日、東京の映像カルチャーホール（有楽町・そごう百貨店8階）でこの『レフ・トルストイ』が日本で初上映され（主催＝映像カルチャーセンター）、この日のために特に招かれて来日したセルゲイ・ゲラシモフと女優のタマーラ・マカロワ（レフ・トルストイの妻ソフィア・アンドレーエブナを演じた）が姿を見せた。

M・エフィーモフ本誌記者がゲラシモフ監督にインタビューした。以下は同監督の話。

「映画の製作にとりかかるにあたってわれわれは、この映画を見る観客の多くがトルストイの作品を読んでおり、トルストイを世界史上の偉大な人物として知っていることを予定した。率直に言って私には、今までの映画の伝統がわれわれの障害となり、観客から良い評価は得られないのではないかという恐れがあった。なにしろこの映画には追跡場面も射撃場面もないし、肉体的な攻撃性も精神的な攻撃性もないからだ。が、それでもわれわれは製作に踏み切った。なぜなら、時代がそれを強く求めていると考えたからだ。人間の良心の問題は、現代の第一の問題になっている。そしてレフ・トルストイは正に、鋭敏な良心を人格化した人物だというのが一般の見方だ。

われわれ、この映画の製作に取り組んだ者は、レフ・トルストイを一般的な意味での文豪としてとらえていない。われわれは彼の中に、地上に人類が存続するために闘っている同時代人を見た。私は彼の文学ではなく、そういう文学を生み出すことができた彼の人格を研究した。

最後に、映画『レフ・トルストイ』が日本でも観客を見つけ、その人たちがこの大作家、偉人との出会いから何かをつかんで下さるように願っている」



右 一人〝3役〟のゲラシモフ監督と女優のタマーラ・マカロワ

上 ゲラシモフが演じるレフ・トルストイ（右端）

下 タマーラ・マカロワが演じるトルストイ夫人





第4回日ソ婦人セミナーの会場

4回目を迎えた日ソ婦人セミナー

一九七九年にモスクワで開かれた第1回以来4回目を迎えた日ソ婦人セミナーが、去る4月6・7日の両日、埼玉県武蔵嵐山の国立婦人教育会館で、「21世紀を目ざす婦人の課題——平和と平等達成のために」をテーマに開催された。

セミナーにはソ連からL・バリャスナヤ・ロシア連邦共和国教育次官を団長とし、L・ラスロワ・アゼルバイジャン共和国労働組合評議会議長・ソ連最高会議代議員、M・ポレシュク・社会主義労働英雄、N・タタルキナ・ウラジオストク医科大学内科学部長、M・フリストフォーロワ・ソ連婦人委員会職員からなるソ連婦人委員会代表団が参加した。

日本側からは高田なほ子・日ソ婦人セミナーと交流の会実行委員長をはじめ、報告者7名を含む日本代表団14名と27団体代表等約二〇〇名が参加した。

セミナーでは第1日目の日本側奥山えみ子さん、ソ連側バリャスナヤ団長による基調報告のあと、平和を強め、核廃絶と軍拡競争反対のたたかいへの積極的な婦人の参加問題を中心に、「核戦争の脅威と軍拡競争反対・平和確立のための婦人のたたかい」、「婦人・子どもがおかれている状況と国連婦人の10年の取り組みの成果について」、「両国国民の間の信頼確立に向けて婦人の果たすべき役割について」の三つの課題について討議が深められた。

双方は広島・長崎が受けた悲劇を二度と絶対にくり返さないためにも、核戦争の脅威から人類を解放するたたかいで、国の体制の違いを超えて共同の努力を一層積極化する固い決意を表明し、世界の完全な平和と平等達成のために、全世界の婦人の連帯に向けて行動を起こし、地球上の全人類の幸せと安全確保のために力を結集することを確認した。そして、その行動発展のために、今後ともこのような日ソ両国婦人の交流を継続することの重要性を指摘した。


ソ連側代表団

4月8日、ソ連代表団は国会を訪問し、木村参議院議長、阿久根参議院副議長と会見し、石本環境庁長官をはじめ超党派婦人議員団と意見を交換した。

ソ連代表団はこのあと被爆地長崎をはじめ大阪、京都、横浜を訪問し、多くの婦人団体や市民各層との交流を深めた。（写真提供＝日ソ親善協会）


一行は長崎で本島市長を表敬訪問した（左端：バリャスナヤ団長）。

日ソ親善協会第21回定期総会


一九八五年度親善協力計画に調印する赤城・日ソ親善協会会長とヤナエフ・ソ連対文連副議長（写真提供＝日ソ親善協会）

4月19日、東京港区芝・弥生会館大会議室で、「日ソ友好でアジアと世界の平和を！」、「日ソ親善運動の輪を強く大きく！」をスローガンに、日ソ親善協会第21回定期総会が開かれた。総会には、全国各地の34支部の代表ならびに会員80名以上が代議員として参加した。

来賓として出席したチジョフ駐日ソ連公使はあいさつの中で、日ソ両国の善隣・友好、相互理解のために果たしている日ソ親善協会の活動を高く評価するとともに、日ソ両国関係に若干の関係改善の兆しが見られる中、日ソ親善協会の先導的な役割を今後も強く期待すると強調した。

総会では、八四年度の活動報告がまず承認され、次いで八五年度の運動方針が討議された。

八五年度の運動方針では、日ソ親善運動をとりまく国際情勢、日ソ二国間情勢の現状と展望が分析され、その中で日ソ親善協会が果たす役割と任務、ならびに今後の進むべき方向と主要な目標が確認された。

そのさい特に、本年度の運動の重点として、日ソ不戦・反核・軍縮平和運動の推進が挙げられた。具体的には、先頃発表された赤城・チーホノフ往復書簡をもとに、より充実した第四回日ソ不戦の誓い代表団の派遣をはじめ、各種平和運動との取り組みが決められた。

なお、総会にはソ連対外友好・文化交流団体連合会（対文連）とソ日協会から親善使節としてヤナエフ・対文連副議長、ジャルコワ・ロシア連邦共和国児童図書館館長が出席した。席上、赤城宗徳・日ソ親善協会会長とヤナエフ・対文連副議長との間で、日ソ両国民間の親善強化のために全面的相互関係の一層の拡大をめざす一九八五年度親善協力計画が調印された。



トルクメン共和国から親善の使節団

4月の前半、日ソ親善協会の招きでソ連アジア・アフリカ連帯委員会副議長、ソ連婦人委員会委員、トルクメン共産党中央委員会書記マイヤ・マラエワ（５１歳）を団長とするトルクメン共和国代表団が日本を訪れた。代表団にはトルクメン民族アンサンブルが同行した。

一行は日本各地で行われたトルクメン共和国を紹介する行事に参加し、日本のさまざまな人たちと交流し、懇談した。とくにトルクメン・アンサンブルの公演は人気を呼んだ。

（写真提供＝日ソ親善協会）

上　日本の子どもたちも舞台に上がったトルクメン・アンサンブルの公演風景（４月12日、千葉県松戸市で）

シルクロードの乙女たちのあでやかな踊り





ソ連コーナーの一部

ワールド・インポート・フェアのソ連コーナー

A・ラザレフ

　3月21日から4月14日までの25日間、名古屋市国際展示場でワールド・インポート・フェア・ナゴヤ’85（輸入博・名古屋）が開催され、ソ連を含む42カ国1地域（香港）が参加した。

　主催者側はこのフェアでシルクロードの国々の文化と歴史の紹介に力を入れ、これをテーマにした特別パビリオンまで開いた。

　ソ連コーナー（三〇〇平方m）はインポート館「トレード・アンド・バザール」に設けられた。今回のインポート・フェアのシルクロード色を踏まえて、ソ連の展示品の企画・構想を担当したデザイナーや美術家は、ソ連中央アジアとザカフカズの連邦構成共和国を例にしてソ連の生活を日本の入場者に知らせようと努めた。

　目のさめるような民族衣装、伝統楽器、中央アジアやザカフカズで出版された図書が展示され、入場者は、ソビエト国家がソ連に住む大小民族それぞれの伝統、独自の文化的遺産の保存をどれほど大切にしているか、実際に自分の目で見ることが出来た。

　フェア開催中に日ソ親善協会の招きで来日していたソ連中央アジアの共和国の一つ、トルクメン共和国の代表団が名古屋を訪れた。その中には民族アンサンブルのアーチストもいて、会場内の展示ホールのステージで情熱的な踊りを披露した。

　ソ連の五つの貿易公団と東洋貿易（白樺店）の展示品は実にバラエティーに富んでいた。特に民族工芸品の類は非常に豊富だった。ホフロマ塗り（彩色された木製食器）、ディムコボの粘土人形、パレフの細密画製品、セイウチの骨細工、カフカズのチェカンカ（金属の打ち出し細工）、中央アジアのじゅうたん、ウズベキスタンの刺しゅう入りのチュベチェイカ（円帽）など、どの民芸品も入場者の強い関心を集めていた。

　ソ連コーナーで行われたタス通信社の写真展にはシベリアの自然とこの地域の無尽蔵の天然資源の開発の歴史を物語る写真も展示された。

催し物のお知らせ

☆ソビエト反戦映画特集

　会場：大阪・ＳＡＢホール

　「人間の運命／誓いの休暇」（5月18日）、「鬼戦車Ｔ－34／スターリングラード大攻防戦」（5月26日）、「戦いの終りの静かな一日／野獣たちのバラード」（6月2日）、「みなし児／小さな英雄の詩」（6月9日）

▽お問い合わせは、全大阪映画サークル協議会（電話06・375・0502）へ。

☆エブゲニー・ネステレンコ（ボリショイ劇場バス歌手）公演

　松戸・聖徳学園川並記念講堂（6月13日）、福島市公会堂（6月15日）、東京・東京文化会館（6月20、22日）、東京・新宿文化センター（6月25日）、筑波・ＥＸＰＯホール（6月27日）、東京・昭和女子大学人見記念講堂（6月29日）

▽お問い合わせは、ジャパンアーツ（電話03・235・1661）へ。

☆北海道・エルミタージュ美術館展

　7月13日(土)—8月22日(木)（月曜休館）

　北海道立近代美術館（札幌市中央区北1西17）

　前売り料金（一般600円、高・大生400円、小・中生200円）

▽お問い合わせは、北海道新聞本社事業局文化事業部、各支社事業部へ。

☆ボリショイ劇場バレエ学校特別公演

　東京・東京文化会館（7月17、18、19、20、21、22日）、筑波科学万博会場（7月26日）、長野・県民文化会館（7月28日）、群馬・県民会館（7月29日）、宮城・県民会館（7月31日）、宇都宮市文化会館（予定、8月1日）、大阪・フェスティバルホール（8月3、4日）、名古屋市民会館（8月6、7日）、福岡・サンパレス（8月9、10日）、広島・郵便貯金ホール（8月12日）、松山市民会館（8月15日）、東京・ＮＨＫホール（8月18日）

▽電話予約・お問い合わせは、エミー・インターナショナル（電話03・234・7207）／東京労音（電話03・265・6361）へ。

☆映画『鶴は翔んでゆく』（旧『戦争と貞操』第11回カンヌ国際映画祭グランプリ受賞）ロードショー

　5月24日まで、東京六本木・シネ・ヴィヴァン（電話03・403・6061）で。

生物工学を利用したデジタル・テレビ

本誌科学解説記者　ゲオルギー・クドリューモフ

**　近い将来、現在のいわゆるアナログ式テレビ放送はデジタル式テレビ放送に席を譲るだろう。一九八三年にジュネーブで開かれた第4回世界通信展にソ連はデジタル式の原理で作動するテレビスタジオ一式を出品した。この方式でソ連の専門家たちは情報の流れを符号化して圧縮することに成功し、通信回線の容量に対する要求をほぼ$1/7$に切り下げることができた。**

　あらゆるデジタル機器の作動は、たとえばコンピューターのように、生物システムの神経細胞の働きに非常によく似ている。神経細胞では一切のことが〝すべてか無か〟という原理によって進行する。神経細胞内でパルスが発生すると、それは伝達線維を通じて伝えられ、きわめてはっきりした波形と振幅をとっていく。

　アナログ式電子機器に対してデジタル式電子機器が優れていることは、デジタル・システムをテレビ放送の分野でも利用したいという当然の希望を呼び起こした。何よりもまず、これによって画像の質を高めることができる。アナログ式で信号を記録した場合、放送あるいは再録画のすべての段階で生じるノイズと歪みがどうしても蓄積されるのに対して、デジタル式の録画だとほとんどそういうことがない。これは画像にも音声にも同じように当てはまる。

　デジタル式テレビ放送の作動原理は、アナログ信号をいくつかの標準値に分割することである。普通のテレビカメラから得られた絶えず変化する電気信号は、この信号をパルスに変換する特別の装置に送られる。これらのパルスはさまざまな瞬間における信号の数値を2進法で記録したものである。端末受信施設ではこの0と1のデジタル信号を再びアナログ信号に変換し、これを普通のテレビ受信機に送信する。しかし、デジタル式の長所は、この方式をテレビ受信機の中に組み込むことも可能にしており、これによって受信の質と安定度を本質的に高めることができる。恐らくいずれ、テレビカメラから受信機のブラウン管までテレビ放送のすべての段階がデジタル化されるだろう。

　いいことずくめのように見えるが、デジタル・テレビには長所しかないのだろうか？　残念ながら短所もある。中でも最大の欠点は、送られる情報量が膨大なことである。1秒間に二億一六〇〇万パルスの速度で情報を送らなければならない。画像の鮮明度をさらに高めることを考えるならば、これでもまだ限度ではない。このような大量の情報を現在開発ずみの方法のどれかを使って遠距離に送ることは難しいし、現段階ではコストが高くつく。

　この問題の解決に取り組んだソ連の研究者たちは、生物に見られる原理の応用――バイオニクス（生物工学）を利用することにした。

　人間の目が知覚する情報の流れは、画像がラインの本数とスクリーンの大きさによって限定されているテレビのスクリーン上に再生されるものをはるかに上回っている。計算が示すところでは、脳の視覚領に伝えられるのは、目が知覚する情報の小部分にすぎない。情報の本質的な処理が目そのものの中で起こっているのだ。脳が受けとるのは、さまざまな部位の色と明るさについての情報だけではなく、コントラストのある細部、直線、動く物体、その他についての情報でもある。さらに目は、目の周囲の状況に適応する驚くべき能力を持っている。目の感光能力、細部、垂直または水平の線、動く物体などに対する目の感受性は、入ってくる情報の性格に応じて激しく変化することができる。ソ連の専門家は、目のこれらの性質をモデル化して、デジタル・テレビに利用することに成功した。

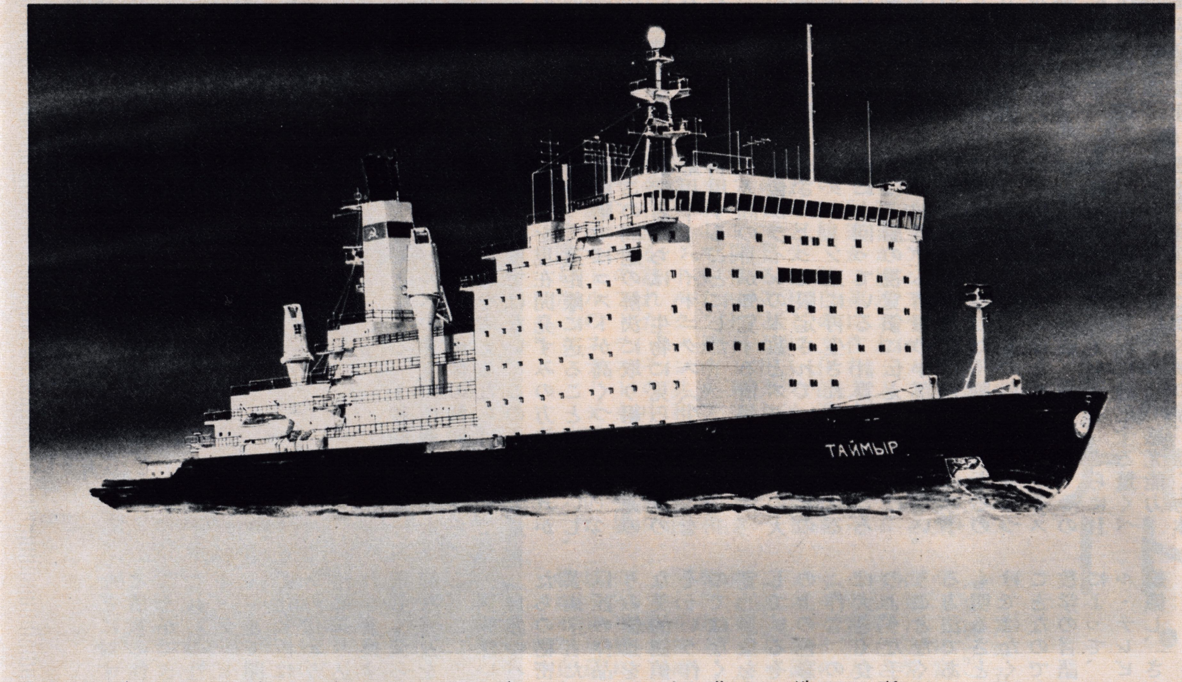
　ソ連で開発された生物工学的適応符号化装置は、秒速二億一六〇〇万パルスの代わりに三四〇〇万パルスを伝送路に送り込めば十分なように情報の流れを変換する。これは伝送の難しさを著しく減らし、デジタル・テレビの広範な普及をより現実的なものにしている。

　興味深いのは、この装置の開発には〝自然のパテント〟だけでなく、画家たちの秘密も利用されたということだ。画家芸術学者たちが指摘しているように、巨匠の作品はよく日常生活のありきたりの情景を描きながら、なおかつ大きな美的価値を持っていることがある。そういう作品で面白いのは主題そのものではなく、作者が自分のとらえた視覚的形象を画布や紙の上で伝えようとしているその手段である。そういう絵の上の色彩と明るさの配分は、観察者（作者）の網膜上の光の最初の配分とは大きく食い違うこともありうる。このような手法は、形象の表現力を損なうことなく情報の流れを著しく圧縮する方法である。しかし、テレビの課題も明るさと色彩の配分をただ伝えるだけではなく、要は視覚的形象を伝えることなのである。大画家たちの手法を数学の言語で定式化し、記述することによって、ソ連の研究者たちはデジタル・テレビの情報の流れをさらによく組織し、さらに圧縮することができた。

8頭のトラの子が誕生



檻の中でトラの子が生まれるのはそれほど珍しいことではないが、やはりちょっとしたニュースになる。サーカスの調教師N・K・パブレンコが飼っているトラたちのところではこれまで何回もそういうことがあったが、先頃クラスノダル（南ロシア）で公演中、3頭の雌トラがほとんど同時に合計8頭の子を生んだ。写真はパブレンコと生まれたトラの子たち。



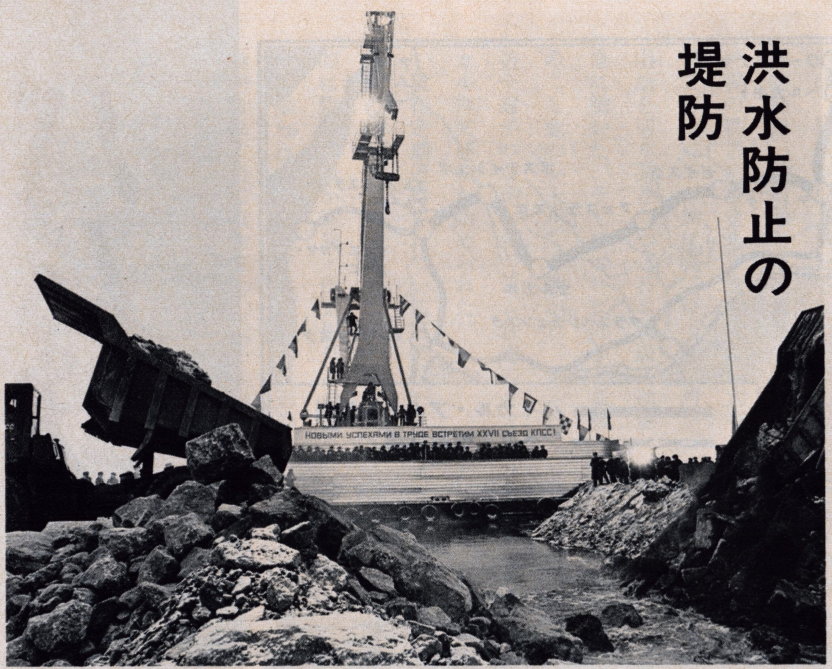
新しい原子力砕氷船

いまフィンランドの造船所でソ連の原子力砕氷船タイミル号（五万馬力）が建造されている。この砕氷船は吃水が8mと浅いので、北方航路で使われるだけでなく、シベリアの河川の港にも船を先導できる。

船体はわりには小さいが、6ノットの速力で約2mの氷を割ることができる。

なおこの船では主スクリュー、タービン、ディーゼル発電機、補助ボイラーなど、すでに極地で使われた折り紙付きのソ連製設備が最大限使用される。タイミル号は船体が完成後ソ連へ回送され、ソ連製の原子力エンジンが据えつけられる。上の写真はタイミル号の完成予想図。

洪水防止の堤防



低気圧の通過のさいレニングラードが面するフィンランド湾に高潮が発生するが、洪水の原因となるこの高潮からレニングラードと周辺を守る水工施設の建設の第1段階が終了した。高さ8mの石と土の堤防ぞいにフィンランド湾のコトリン島から湾の北岸まで30kmの自動車道路が作られ、コトリン島のクロンシタット市は本土と陸路で結ばれた。

いまコトリン島から湾の南岸までの堤防施設の11km区間で工事が進められている。ここにはバルト海からレニングラード海港に外洋船を通すための200mの門が建設される。工事が全部完了するのは1990年の予定。写真はコトリン島での工事。

地下を走る路面電車

ボルガ川下流のボルゴグラード市にソ連初の地下の路面電車がお目見得した。地下の路線の延長は3.5km（電車の路線全体の4分の1）で、従来通り地上を走る部分の長さは10kmである。土地の人はこの地下電車を地下鉄のメトロと路面電車（トラムバイ）の2つの言葉を折衷して「メトラム」と呼んでいる。

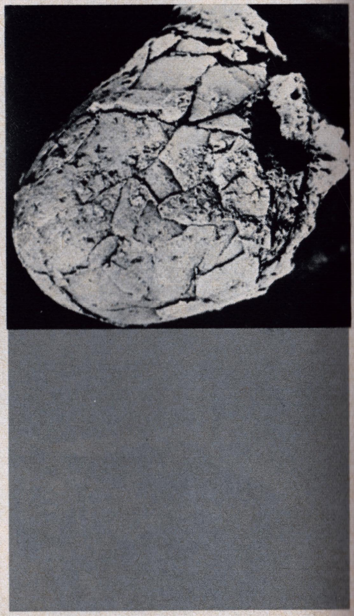
この電車が地下鉄と違う点は、トンネルが地表から浅く、駅のホームの高さが低く、車両は上（パンタグラフ）から電力をとる路面電車型であることだ。

この電車が通る地下の部分は、ちょうど市の中心部の真下に当たっており、レールや信号機が撤去されたので中心部の混雑は緩和され、騒音もぐんと減った。



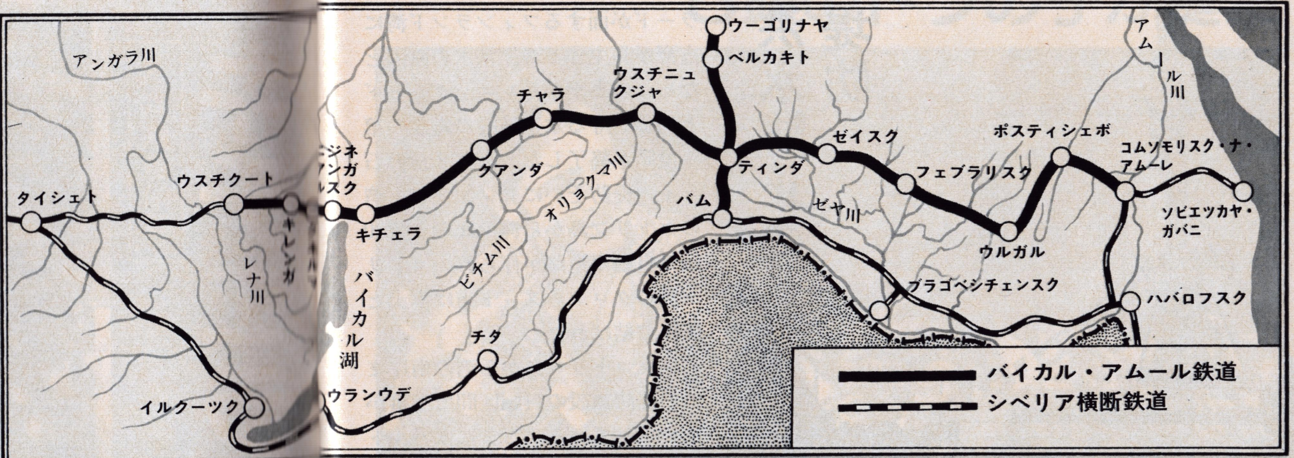
恐竜の卵の殻

レニングラード大学古動物学調査団は中央アジアの天山山脈内で1億500万年前の白亜紀に生息していた恐竜の卵殻の破片のついた岩石を発見した。写真は比較的保存状態のよかった恐竜の卵の殻。

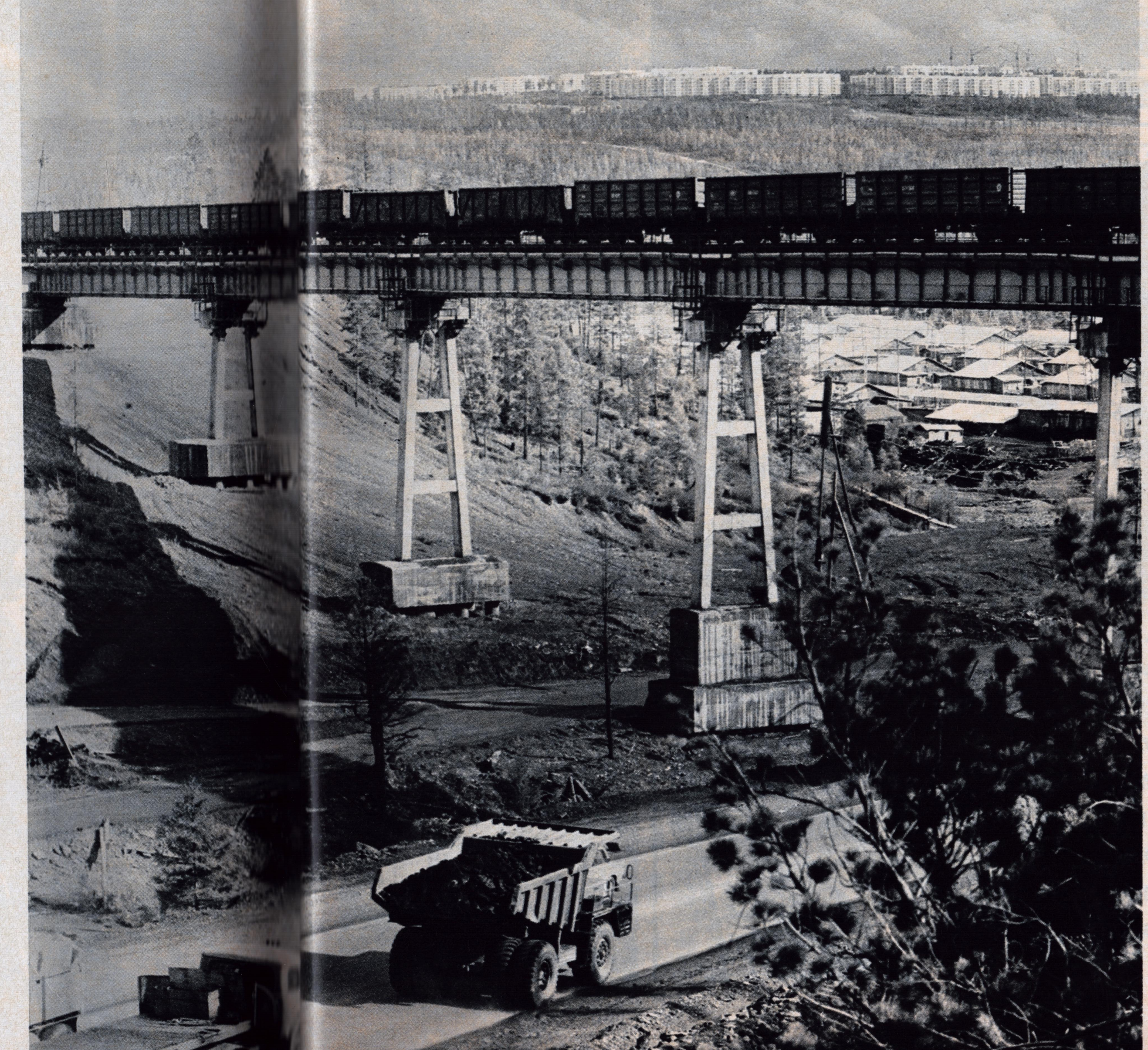


バム鉄道——一九八五年

ソ連運輸建設次官、バム鉄道建設総局長　コンスタンチン・モホルトフ



ティンダ付近のバム鉄道（1985年）



バイカル・アムール（バム）幹線鉄道は、建設規模、動員された労働力、物的資源、技術面での複雑さの点で、世界の鉄道建設史上、類を見ない大事業である。この10年間、原生林、河川、山地を切り開きつつ、バム建設者は懸命に働いた。そしてついに昨秋、最後の〝黄金のレール〟が敷かれ、バム鉄道全線がつながった。バム鉄道のローカル営業運転が始められた。

現在定期運行されている区間はバム全線の半分以下にすぎず、その他の区間は臨時列車か業務・作業用列車の運行に限られているのだが、バム鉄道の輸送量はすでに貨物五〇〇〇万t以上、旅客五〇〇万人以上に達している。バム鉄道の輸送量は定期運行区間の増加とともに、年間約25—30%も増えている。

バム建設は今年も従来どおり、急ピッチで進められている。西部区間の二七八・八km、東部区間の三二五km、中部区間（ティンダ以西）の二〇七kmが間もなく定期運行に入る。本年末までには全部で一六四三kmが定期運行に入るが、これはバム鉄道総延長の半分より一〇〇km多い。

ベルカキトからヤクーツクへ北に延びるバムの支線の敷設工事も始められた。南北に延びるこの支線の総延長は八三〇kmで、アムール＝ヤクーツク線と呼ばれる。基本作業は10年後に完工の予定。

もう一つの目標に鉄道の電化があるが、計画では全部で七五六kmが電化されることになっている。今年電化が実施される長さ三四三kmの区間はバム鉄道で最初の電化区間になる。この区間には六〇〇〇本以上の支柱を建て、五六五kmの架線を張りめぐらし、変電所を稼働させる必要がある。

トンネル工事では多くの障害にぶつかった。特に一番長い北ムヤ・トンネルは難工事だった。列車を運行させるために臨時の迂回線が敷かれた。現在、複雑な地質学的条件にかかわらず、北ムヤ・トンネルの工事は続けられている。コダール・トンネルはもう今年中に開通する予定だ。

一九八五年中にレナ、ニジネアンガルスク、ウスチニュクジャ各駅の機関庫やその他の駅の操車場の業務を開始しなければならない。

近い将来、住宅建設・土木工事の規模を約2倍に増やし、住宅（総面積はおよそ六五万平方m）、学校、幼稚園、保育園、文化・体育施設を完成させねばならず、そのため今年は建設作業の重点をこっちに移さねばならない。

バイカル・アムール幹線鉄道——それはシベリア・極東の天然資源への道、シベリア・極東の生産力発展への道である。これは経済の動脈であるのみならず、社会生活の動脈でもある。バム地帯とは一五〇万平方kmにおよぶ地域である。将来ここには11の地域生産コンプレクス（TPK）および工業中心地が形成されよう。そのいずれもがそれぞれ専門に個々の製品を生産する。

例えば、南ヤクートTPKはコークス用石炭と鉄鉱石を、レナ川上流TPKは材木、カリ塩、数種の金属を含む鉱石を、ウドカン工業中心地は銅を、という具合だ。多様な天然資源を基盤にして、バイカル工業中心地およびムヤ・ビチム工業中心地とともに北バイカルTPKが形成されつつある。

今年は、バム幹線全線の定期運行の実施とバム地帯の経済開発の過程で重要な年の一つになるだろう。



バム鉄道沿線

キチェラの一家

本誌記者 ビクトル・ルデンコ
カメラ V・ビャトキン



キチェラはバム幹線鉄道沿線にあるザバイカル地方（バイカル湖の東側）の小さなまち。5年前、まだやっとこの地方の鉄道敷設工事が始まったばかりの頃、私はキチェラに行く機会を持ったのだが、そのキチェラは今、バム建設中心基地の一つとしての意義を失ってしまった。〝レール敷設手〟とか〝路盤の砂利敷き〟とか、〝ヘリ降下部隊〟、〝レール敷設速度〟といった、当時はここの誰もが関心を持たずにはいられなかった事柄も、もう過去のものとなってしまった。

ザバイカル地方のタイガ（針葉樹林）地帯は以前は敷設されたレールの距離でその開発の度合いが計られたものだが、現在の尺度はまったく違う。今はバム沿線地帯の開発と幹線鉄道の整備によって開発の進み具合を判断する。

私が宿をとった独身寮は、5年前は超満員だったのに、今回はがらがらだった。その代わりカラマツに囲まれた児童遊園地は子どもであふれていた。小さなキチェラっ子が遊んでいる。みんなここで生まれたバム沿線を故郷とする子どもだが、親の方はソ連各地、それも主として伝統ある先進地域から当地に、鉄道敷設のためにやって来た人ばかりだ。直通列車が走るようになった今、この人たちは果たしてまちに留まるのだろうか？

まちのソビエト執行委員会（町役場）で私は子だくさんの家庭の名簿を見せてもらった。その中からクレーン車の運転手イワン・ビャトキンの一家を選び、会ってみることにした。

イワンの奥さんのアニタ・シリニャはラトビア人だ。バルト海沿岸のラトビア共和国から、バム鉄道建設の意欲に燃えた若い仲間たちと連れだって当地に来た。アニタの方が今の夫イワンよりも一足早くこの地を踏んだ。

まだ建設作業は始まったばかりだった。キチェラというまちはまだなく、キチェラ川だけが流れていた。ラトビアの青年たちは、川に沿ってレールを敷設し、まちの建設にあたった建設・組み立て列車第608号の最初の労働者、技師、技手になった。

製図が専門のアニタは生産・技術部で働くことになり、現在のキチェラのまちの基盤作りをした一人になった。

アニタの最初の連れ合いだったカルリスは、いわゆる〝黄金の腕を持つ名人〟で、建設現場に絶対必要ないくつもの職業——機械工、大工、線路敷設工としての確かな技術を持っていた。2人の間には子どもが2人——娘のエジタとお父さんの名前をもらった息子のカルリスがいた。

路盤を作るためにキチェラの近くの丘で木を切り倒していた時期があった。

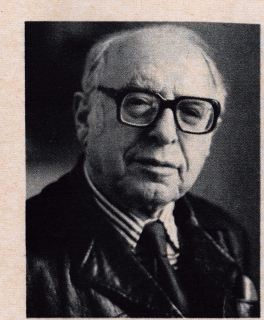
右 息子のレオニードとくつろぐイワン・ビャトキン
上 お客をもてなすビャトキン一家



右　職場からの帰り道、保育園に寄ってレオニードを連れ帰るのがアニタの日課。
下　道路で同僚の運転手と〝立ち話〟。右がイワン・ビャトキン。

線路予定区間の数カ所で同時に伐採作業が行われた。各現場に人員が手配され、時にはヘリコプターで伐採者グループが送り込まれた。
　こういうグループの一つにカルリスもいた。ある日カルリスだけが一人タイガに残った。カルリスのグループはまちに戻り、カルリスは交替のグループの到来を待ちうけていた。厳寒がつづき、気温は零下50度Cにも下がった。極寒の中で夜も火を絶やせなかった。カルリスはへとへとに疲れていた。ストーブが不完全燃焼を起こし、寝ている間に一酸化炭素中毒にやられてしまった。
　アニタ・シリニャは未亡人になってしまった。キチェラで最初の、たった一人の寡婦であった。2人の忘れ形見を残してカルリスはいってしまった。
　その直後、アニタがどんな気持ちになったかよく分かる。ここを去ろうと決心した。すべてのものがかつての幸福と期待について思い出させるこの地——とんでもない不幸に見舞われたこのバム地帯から去ろうと心を決めた。
　アニタはラトビアのマードナ市近郊ユラニ村の両親の許に帰った。近親者や友人はアニタと子どもを何とか励ましてやろうと温かい手を差しのべた。アニタはバムを、タイガを、夏でも寒いキチェラを、永久に忘れ去ろうと努めた。
　だが、忘れることは出来なかった。ある日突然、不意に、アニタは荷物をまとめてキチェラに発った。
　ここでアニタはロシア人の青年イワン・ビャトキンにめぐりあう。この青年はあの悲劇を知らない。その頃はまだイルクーツク州の郷里で働いていたのだ。イワンはキチェラでアニタと同郷のバルト海沿岸出身の古参の青年たちと一緒に働くようになった。口数が少なく、きちょうめんで、誠実な人柄のイワンはすぐに仲間にとけ込み、余暇も一緒に過ごすようになった。そうするうちにアニタと知り合った。
　こうしてキチェラに新しい家族が出来た。最初は4人家族——イワン、アニタ、エジタ、カルリスだったがやがてレオニードという男の子、それから1年半後には妹のラリサが生まれた。
　ビャトキン一家はコテージ風平屋の半分を占めている。キチェラの家はほとんどどこも諸設備が完備している。付属地もある。ここにイワンは温室を建てようと思っている。
　ビャトキン一家はここに住みつくだろうか?
　イワンの目で物事を捕らえてみよう。仕事はおもしろいし、賃金もいい。
　2年後にイワンは通信教育でイルクーツク鉄道大学を卒業し、鉄道技師になる。よく考えたうえで選んだ進路だ。新しい職業はイワンにバムでの新たな前途を約束している。
　アニタの場合は何よりもまず子どもたちにとっていいか悪いかですべてが決まる。目下のところはキチェラでの生活条件にすっかり満足している——いい幼稚園、いい小児科医、立派な10年制の学校。だが同時に、生まれ育った家もアニタには忘れがたい……
　遠いラトビアのユラニ村にはアニタの母親の家がある。今は年金生活者の母親が家事全般を受け持っているが、彼女だけでは家を持ちこたえられなくなる時が早晩やって来る。そうなったら、イワンとアニタはラトビアに帰らなければならなくなるかも知れない。
　アニタはそう思う。イワンの方は、
「女主人が決めたようになるものさ。お母さんが満足なら子どもも満足、みんな満足なら私も満足というわけですよ……」と屈託がない。





東京で平和風刺画展

ソ連人民美術家　ボリス・エフィーモフ



本誌のためにボリス・エフィーモフが書き下ろした風刺画『平和な宇宙のために』

6月の初めから東京で平和風刺画展（「平和のためにたたかう風刺」国際展）が開催されるが、ここで展示されるのはいずれも、一昨年の10―12月にモスクワ（美術アカデミーのホール）で開かれた第4回国際風刺画展に出品されたもの。"軍拡を阻止し、国際緊張緩和をめざす闘争を強化しよう"というモットーのもとに開催された同展には40カ国以上の美術家が参加した（本誌一九八四年第1号に紹介）。東京で開かれる展覧会について有名なソ連の漫画家ボリス・エフィーモフ（84歳）は次のように語った。

地球の平和を維持し、核破局を防ぐための諸国民の闘争戦線は果てしなく、また多様だ。この戦線は都市の街路や広場を通り、国際的な大会や会議の演壇、新聞の紙面やテレビ、美術展の会場などを通じて広く展開されている。

平和擁護の事業に果たす風刺画家の役割は大きい。風刺芸術は、人類を核破局の淵に突き落とそうとしている帝国主義者層や無責任な政治家どもをあざ笑い、その正体をあばいている。世界各国の作家の作品一七〇点が紹介される東京の平和風刺画展はそれを力強く雄弁に確認するだろう。

この東京展は第2次世界大戦でのドイツ・ファシズム壊滅40周年に開催されるので当然、特別な意味を持つ。東京展に出席する画家を含め、ソ連内外の中高年の風刺家は、世界の支配という妄想にとりつかれたヒトラーとその手先、あらゆる毛並み、地位のナチ主義者に、戦争放火者、偏執狂、殺人者という絶対に消えない烙印が押されるよう、少なからぬ努力をした。このような美術家の作品は、平和と民主主義の勢力が全人類の凶悪な敵に勝つための鋭利な武器になった。その伝統がいま、新世代の美術家に受け継がれているのを見て、私はうれしい。

出展作品は実にさまざまな芸術的伝統や民族的伝統を背景に制作されており、その創造的手法、スタイル、美術的表現の幅も広く、作者本人のみならず、何百万もの同国人の感情や思念を表す強烈で表現力豊かな風刺的形象のパノラマとなっている。これらの作品は芸術的、主題的に多彩だが、同時に政治的、精神的統一を併せ持っている。

さまざまの子午線、いろいろな川の岸辺、山脈のふもとで作品は制作され、その作者たちは異なる言葉をしゃべる。だが平和とヒューマニズムの言葉がみんなを結びつける。そして観客の前に、不安を抱き、憤怒し、抗議する人類が立ち現れる――作品の一枚一枚に、戦争と絶滅には断じて"ノー"、平和と生命は断然"イエス"と訴えかける文字がありありと読み取れる。

この国際展の作品には、私は、三つ



▲B・ソロビヨフ作『反目より平和を選べ』（一九八二年、グワッシュ）



ククルイニクスイ作『NATOの経験豊かな顧問』（一九八三年）

の基本的傾向が見てとれると思う。まず第一が、地球文明絶滅の不吉な形象、一種の全世界的核破局の幻影を前面に押し出した作品である。これらの作品は観客にこう語りかけているようだ。
「人々よ！　気狂いじみた軍拡競争をあおる帝国主義の行為を、今まだ間に合ううちに止めなければ、わが美しい地球、わが自然、わが都市、何千年にもわたって人類が蓄えてきた文化遺産は、こんな無残なさまになってしまうかもしれないのだ！」
こういう方向の作品と本質的に隣り合わせにあるのが政治的風刺——戦闘的、攻撃的で、パンチの効いた風刺である。このような風刺は核戦争の脅威の存在を確認するにとどまらず、脅威の根源を確実に指し示している。こういう性格の風刺画は、笑いとはかけはなれた事柄を扱っているのに、笑いを誘う。笑いはしかし恐るべき力を持つ。風刺画展で笑いが聞こえなければ、つまり、風刺家がその最強の武器を捨てたことになる。
そして風刺画の最後のカテゴリーに入るのが、ユーモアに富んだ作品群である。これらは明るい楽天主義に彩られており、その意図するところは、ソ連でよく歌われている歌の一節——「……われらにはその力がある——地球を火事から守ろう！」で言い表せる。こういう作品は善意の人々の団結、その指導者たちの健全な考え、反戦運動の威力が人類を核の火事から救うという深い信念に貫かれている。
東京で開催される風刺画家の国際展は画家の高度の筆力だけでなく、明確な市民的立場をしっかりと示すだろう。
今後も彼ら風刺画家たちが自分の持ち場に立って警戒の目を光らせつづけるように。国際緊張緩和の反対者たちを打ちのめす、その鋭い矢を鈍らせることのないように。大地の上の澄んだ空、われわれの無限の、と同時にこんなにもちっぽけな地球上の人々の安全と平穏な生活を守るために、創造的絵筆で闘う画家のインスピレーションや技巧が枯渇することのないように。

平和風刺画展は6月上旬から7月上旬まで東京で開催予定。お問い合わせは〒105　東京都港区芝1—4—9　平和会館内平和博物館、電話03—454—5859へ。

ヒロシマを繰り返さないために

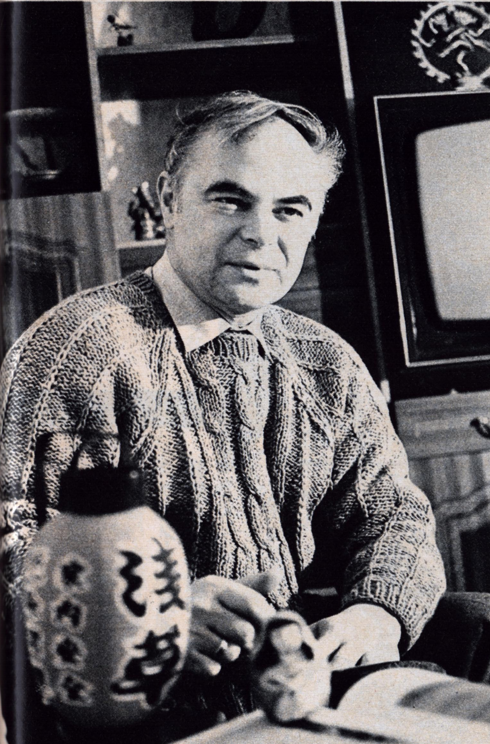
——キエフで出版された『ヒロシマの警鐘』

キエフ駐在本誌記者　ワレリー・ブダルギン



ユーリー・ヤルムィシ著『ヒロシマの警鐘』の表紙

▼日本旅行の思い出を語るヤルムィシ



「今度出たあなたの本を読むと、日本人の心が分かります。この本はヒロシマの悲劇を繰り返さないよう、各国の人々に協力を呼びかけています」
「『ヒロシマの警鐘』をクラス全員で読みました。日本の子供たちがどんなふうに暮らしているかをもっと書いて下さい」
「あなたがとても温かい目で書いている高槻市の子供たちを、ぜひ招待したいと思います」
以上はウクライナの作家ユーリー・ヤルムィシ（50歳）が子供たちから受けとった手紙の内容の一部である。彼はウクライナ共和国の首都キエフに住んでおり、昨年末キエフ市の出版社「ベセルカ」（〝虹〟）から日本旅行の印象をまとめたルポ『ヒロシマの警鐘』を出した。彼は一九八一年末にソ連の作家、画家、ジャーナリストの代表団の一員として日本を訪れた。
高校生向きのこの本は現代日本のさまざまな姿と古い伝統を紹介しており、著者本人が撮った20枚の写真を載せている。しかし何と言ってもこの本のさわりは原爆被災者たちの悲劇を書いた部分である。
ヤルムィシはこう語っている。
「私は核戦争がもたらす苦難を若い世代に、ぜひ知ってもらいたいし、ミサイルや爆弾のない世界を築くために力を合わせることを世界中の人々に呼びかけたい」
10冊以上にもなるユーリー・ヤルムィシのきれいな写真アルバムには、彼の日本旅行のコース、日本のさまざまな人々との交流を物語る写真がぎっしりとつまっていた。
「日本の行く先々で心から歓迎を受け、日本人の暮らしや彼らの抱えている問題を知った」と、ユーリー・ヤルムィシは続ける。「日ソ青少年芸術教育シンポジウムで私たちはたくさんの重要な問題を論じ、ソ日双方とも多くの共通の心配事や希望を抱えていることが分かった。この会合で私は日本の児童作家松谷みよ子さんと親しくなった。彼女の作品はソ連で、ロシア語、リトワ語、ラトビア語、グルジア語その他の言語に訳され、何度か出版されている。彼女の話だと、彼女の有名な作品『龍の子太郎』はロシアの作家ピョートル・エルショフの物語『せむしの子馬』に触発されて書かれたそうである」
ユーリー・ヤルムィシはシンポジウムで日本の関係者と話し合ったとき、たくさんの質問に答えた。児童図書専門の「ベセルカ」出版所（主にウクライナ語、一部ロシア語で出版）の活動についても聞かれた。「ベセルカ」出版所発行の新刊本には日本の作品もある。例えば松谷みよ子さんの『はなさかじじい』、早乙女勝元氏の『ゆびきり』、砂田弘氏の『さらば、ハイウェイ』などだ。
「うれしいことに、日本でウクライナの作家の新しい作品について聞かれた。翻訳者の松谷さやかさんは、ウクライナの女流作家オクサーナ・イワネンコの童話『サンダルよ、全速力』を訳したいと言っていた。ウクライナの革命詩人タラス・シェフチェンコの研究家小松勝助氏とは、旧友のように話がはずんだ。
広島の平和記念公園では、高槻市の小中学生が作った千羽鶴を見たが、そこにはこんなことばが書き添えられていた——〝学校の授業で、先の戦争の恐ろしさをいろいろ学びました。だから私たちはこの千羽鶴を折りました。絶対に核戦争が起こらないように強く望みます〟」
ユーリー・ヤルムィシは新刊の自著の中でこう書いている。
「広島の警鐘は、こんにちますます激しく鳴っている。その鐘は私の胸の中で、私の祖国の戦争の全犠牲者の思い出と一つになっている。皆さん、過去を忘れないでほしい。未来のことを考えてほしい！」
ヤルムィシはウクライナ人で、キエフ市の生まれ。キエフは第2次世界大戦中、一時ドイツ・ファシスト軍に占領された。キエフのドイツ軍の収容所で二〇万人の市民が殺され、約一〇万の市民がドイツへ送られて強制労働をさせられた。キエフ市の全住宅のほぼ半数と、八〇〇余りの工場が破壊された。
……ヤルムィシは最近、広島から持ち返った数個の折りヅルをキエフの国際親善クラブ員の小中学生との会合に持って行った。その会合は大人、老人、子供ら二〇〇〇万人のソビエト国民の命を奪った第2次世界大戦で、ファシストとの闘いに倒れた各国の若き英雄たちを偲ぶために催されたものである。
子供たちは日本の小・中・高校生が「原爆の子の像」に飾ったように、自分たちで折った折りヅルで壁を飾った。広島の鐘が鳴った。ユーリー・ヤルムィシがテープレコーダーに吹き込んで来た鐘の音だ。そのあと、やはり彼が撮ってきた日本のスライドが上映された。原爆記念館、原爆ドーム、原爆慰霊碑。そして広島駅のプラットホームが映った。新幹線「ひかり」でここに来た女子中学生が靴をぬぎ、ソックスをはいたまま駅名のかかった柱の前のベンチに立ち、駅名の「ひろしま」という字を写真にとっている。この女の子たちのことを、ユーリー・ヤルムィシは自著の中でこう書いている——「この写真がいつまでも皆さん一人一人の胸に残っていて欲しい。この写真が一九四五年8月6日にヒロシマの数万の小中学生が焼かれたように、新型爆弾の地獄の炎の中で皆さんと一緒に燃えてしまわないために。私たちソビエト国民は、そんなことが決して起こらないようにと、強く望んでいる」

ノーボスチ通信特派員報告

宇宙を平和目的に

O・アルテミエフ記者（ニューデリー）

今年の4月、インドの最初の宇宙飛行士ラケシ・シャルマの宇宙飛行1周年を記念する集会がインド全土で開かれた。昨一九八四年4月、この飛行を記念してニューデリーに宇宙クラブが設立された。その設立者でインド国会議員のI・V・グプタ氏は宇宙におけるソ印協力に尽力している。同議員は次のように語った——

「宇宙は軍事物体を展開する場所になってはならない。宇宙は平和の目的にだけ利用されなければならない。インドはこの問題で明確な立場を取っている。インドは宇宙の軍事化に反対し、宇宙にあらゆる種類の兵器を配備することに反対している。宇宙にレーザー兵器その他の兵器を配備することは、軍拡競争を一層エスカレートさせ、世界に緊張をつくる原因になり、新たな戦争をぼっ発させる可能性がある。われわれはソ米両国間の相互理解と軍拡競争の制限に関する合意の達成を望み、最終的には兵器全般の廃棄を望んでいる。

ソ連製中距離ミサイルの展開に対するモラトリアムと欧州における他の対抗措置の実施の中止に関するソ連の提案に何人も無関心ではいられないと思う。もし米国がソ連の新提案を受け入れるなら、平和の保障に大きく寄与することになるだろう。

われわれインド国民は″スターウォーズ″に関してソ連の指導者が語った言葉に完全に賛成している。実際、核兵器の出現が通常兵器を一掃せず、核兵器や通常兵器の競争を一層促進したにすぎなかったと同様に、宇宙兵器の開発は軍核競争をさらに激烈にし、新たな領域を軍拡競争に巻き込む結果をもたらすだけだ。

すべての問題は平和的に、暴力なしに解決されなければならない。幾多の困難はあるが、私は意見の相違が取り除かれ、地上の生命が維持され、人類が自らの幸福のために宇宙を開発することを確信している」

故郷の土地を追われて

A・ジグノフ記者（ダルエスサラーム）

マゴラの住人は泣いて祈っていた。彼らは当局に決定を変更するよう頼んだ。だが、当局は強硬だった。7日間だけ猶予するというのである。マゴラはボツワナとの国境に近い南アフリカ共和国の小さな町だが、昔からここに住んできたバクウェン族の人々は、新しい土地へ移らなければならなかった。それはバンツー族と呼ばれるアフリカ人のために人種差別主義者がつくった10の民族居留地の一つ——ボプタツワナである。新しい土地はひどく乾燥しているので、植物は育たず、草は枯れ、動物も人間も死にかかっている。

マゴラとて天国ではなかった。砂地で、やぶに覆われていた。だが、そこはバクウェン族の土地であり、彼らの先祖代々のふるさとである。彼らはその土地をできるかぎり整備してきた。木を植え、井戸を掘り、学校を二つ建ててさえした。だが、人種差別主義者たちはそんなことはお構いなしだった。彼らにとって大事だったのは、″白い″南アフリカを維持することだった。だからマゴラの掘っ立て小屋は″白い地域″の真ん中にある″黒いシミ″であり、抹殺されなければならなかったのだ。それはブルドーザーによって行われた。

人種差別主義者たちの抑圧に対して、法的権利を求めるアフリカ人たちの大衆的な行動が広がっている。その勢いに押されて、ケープタウン郊外からアフリカ人二五万人を追い出す計画は一時的にストップさせられた。この成功は、完全な勝利は大衆の統一と団結にかかっている、という真理をいまいちど証明した。

人殺しは″兄弟″か？

V・カバリャウスカス記者（ニューヨーク）

彼らは農民に、サンディニスタが好きか、と聞いた。農民は答えた——「私は革命が好きだ。革命は私に土地を与えてくれたからだ」。すると彼らは農民を縛り上げ、銃剣で両目をえぐり、自動小銃でとどめを刺した。

この恐ろしいエピソードをニューヨーク・タイムズ紙の記者に語ったのは、農民たちとともにニカラグア反革命集団の収容所で5カ月間を過ごしたディナ・バレダ・ド・ウベダである。ニューヨーク・タイムズ紙のこの記事は、レーガン大統領がラジオを通じてソモサ派の残党を″自由のための闘士″″われわれの兄弟″と呼んだ直後に流された。

少し前、ニューヨークのパーク街で色の浅黒い若者が私の手に写真の束を握らせた。写真には手足をもぎ取られたいくつもの死体が写っており、その下に「これがレーガンの兄弟たちの仕業だ。だが、これはわれわれの兄弟ではない！″コントラ″部隊への援助をやめよ！」と書かれていた。

最近ニカラグアを訪問したポール・ムール・ニューヨーク司教はこう声明した——「何の罪もない人々を、男女子どもの別なく殺すことがわが国民的政策の一部であるということを、われわれはどうやって全世界に宣言できるだろうか？」

オコナー・ニューヨーク大主教を団長とする米国の高位聖職者代表団のメンバーも、ニカラグア国民が支持しているサンディニスタ指導部の真の意図を確信することができた。

米国議会の論調も、米国のマスコミの論調も、政治家を含む多くの米国人が、旧ソモサ派の残党を支援するというホワイトハウスの計画に反対していることを裏づけている。殺人者と抑圧者は米国の国民にとって″兄弟″ではないのだ。

ソ連の新聞記事から

（一九八五年4月後半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委員会政治局は定例会議で、一九八五年4月8日に開かれたソ連共産党中央委員会での会合で生産合同、企業、コルホーズ、ソフホーズ、生産班の指導者や専門家、学者が述べた諸提案の実現に関する措置を審議し、承認した。

この会合で出された提案は、政治局会議で指摘されたように、国の経済・社会発展、生産集約化の促進、経済機構と管理の改善、勤労集団の積極性とイニシアチブの向上をめざす基本方向を作成する上で重要な意義を持っている。

政治局はソ連国家計画委員会（ゴスプラン）、国家生産手段供給委員会、ソ連財務省その他の省庁に、会合で出された諸提案を実現する措置を作成し、これらの措置をソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議に提出することを委任した。そのさい、計画化を改善し、その科学的裏付けを高めることに特に注意が払われるだろう。

石油・ガス産業の諸企業、地質調査諸機関の技術的再装備に関する追加の措置の問題が審議された。

一九八六—九〇年度および二〇〇〇年までの期間の地方工業の一層の発展に関するソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議の決定が採択された。日用品の生産を増大する措置が決定された。

政治局はソ連閣僚会議が打ち出した、経済相互援助会議（コメコン）の一連の加盟諸国の機関が参加してクリボイログ酸化鉱採鉱・選鉱コンビナートを建設することに関する提案を審議し、承認した。

（プラウダ紙4月19日号）

最初の工業デザイン展

工業デザインは社会主義経済統合のプロセスでますます積極的に導入されている。4月16日にモスクワのソ連国民経済成果博会場で開かれた″社会主義社会のための工業デザイン展″は、この種の国際見本市としてはわが国最初のものだが、この分野での成果の水準を総括するだけでなく、科学技術の進歩と密接に結びついたこの領域でのコメコン加盟諸国の協力の可能性と成果を示すものである。

工業デザイン展は工業製品の美しさと使いやすさを高めるためのブルガリア、ハンガリー、ドイツ民主共和国、ポーランド、ソ連のデザイナーたちの協力の経験を広く交換する場になるだろう。

（プラウダ紙4月17日号）

大祖国戦争勝利40周年記念全ソ写真展

4月26日からソ連国民経済成果博（モスクワ）のソビエト文化パビリオンで、大祖国戦争勝利40周年を記念して写真愛好家の全ソ作品展″わが祖国″が開かれる。

これは全ソ・アマチュア芸術作品展の一環として開かれるもので、これに先立って企業、学校、都市、地方、共和国レベルの写真展が組織された。各共和国では芸術写真の個展やクラブ展も開催され、これらの期間中にはすべての共和国で児童の作品展も行われた。全ソ写真展″わが祖国″には約一〇〇点の児童の作品も展示される。

（イズベスチヤ紙4月20日号）



「播種機はいらないね」（V・モホフ作、トルード紙4月17日号）

ドシャンベで国際軽工業機械見本市

タジク共和国の首都ドシャンベの国民経済成果博の各パビリオンの上にオーストリア、ドイツ民主共和国、イタリア、オランダ、ドイツ連邦共和国、チェコスロバキア、スイス、日本の国旗がひるがえった。これらの国の約40の商社が、ここで縫製、ニット、製靴のための最新の機械を披露している。

見本市の責任者であるA・クズネツォフ全ソ公団エクスポセンター総裁は次のように語った——「ドシャンベに白羽の矢が立ったのはさまざまな理由からです。特にタジク共和国では工業総生産高に占める軽工業の比重がいちばん大きい点が考慮されました。現在わが国では国民消費財を生産する企業の技術的再装備が行われています。これもこの種の見本市を開くことに決めた理由の一つです」

見本市の正式な名称は″国際軽工業機械展85″で、三つの主要なセクションから構成されている。最大のセクションは縫製の分野のための設備。皮革・製靴企業のための設備も大きな関心を集めている。もう一つのセクションはニット製品のための設備。

この国際見本市には専門家はもとより、大勢のドシャンベ市民も見学に訪れている。

（イズベスチヤ紙4月21日号）

短信アラカルト

バルト海を行く列車

バルト海のクルシ湾沿岸のクライペダ市（リトワ共和国）とドイツ民主共和国のリューゲン島のムクラン港とを結ぶフェリー航路（五〇六km）が、来年10月に開通する。この航路に就航予定の船は、目下ドイツ民主共和国で建造中であり、世界初の2層甲板、2スクリュー船で、全長一九〇m余り、幅26m、排水量二万二〇〇〇t余り、喫水は7m余りである。五〇六kmの航路の所要時間は18時間、一〇三両の鉄道4軸車の積み込み、積み下ろしに要する時間は4時間。この航路に使われるフェリーは3隻。フェリーによる貨物輸送量（一九九〇年時点の推定）は五三〇万tになる。これだけの貨物を普通の貨物船で運ぶには、港を二つ（バース数各10、就業人員延べ三〇〇〇人）新設しなければならないが、フェリーの場合はバースが各一カ所と双方に各一五〇人の人員がいればよい。運賃のコストは鉄道の$\frac{1}{6}$ですむ。

このフェリー航路だと、専用船（コンテナ船やロールオン・ロールオフ船）を使った場合に比べても、鉄道貨物は宛て先にずっと早く着く。その他のメリットは貨物を積み替えずにすむことである。従って余分な労力、エネルギーがいらず、貨物も傷まない。なお、フェリー施設の工費は5年半で償却されよう。

タクシー運転手がガイド役

「レーニン図書館の旧館を建てた人は?」、「スクリフォソフスキー救急研究所の建物についている女性の名は?」――今夏モスクワで開かれる世界青年学生祭を前に、モスクワのタクシー車庫でタクシー運転手の職能コンクールが行われた。青年学生祭に参加する外国客に、モスクワの歴史を紹介するのも、タクシー運転手のサービスとあって、五〇〇〇人の運転手は一生懸命。しかし大半の運転手がりっぱにガイド役を果たせることがわかって、関係者を喜ばせた。

レニングラードが冬季五輪開催地に立候補

このほどソ連オリンピック委員会総会は、一九九六年冬季オリンピック開催の候補地として名乗りを上げたレニングラード市の申請を一致して支持し、国際オリンピック委員会（IOC）あてに、憲章どおり大会を組織することを保証した文書を添えた書簡を送るよう、ソ連オリンピック委員会に委託した。

人口約五〇〇万人の工業、学術、文化の大中心地であるレニングラードには、あらゆる規模の競技を開催できる近代的スポーツ施設が沢山あり、すでに欧州フィギュアスケート選手権、世界ジュニア・アイスホッケー選手権などが開催されている。伝統のレニングラード郊外のカブゴロボ競技会は、スキー競技界に広く知られている。一九八〇年にはレニングラードのメイン・スタジアムでモスクワ五輪のサッカー予選が行われ、市は〝五輪都市〟の地位を得た。

レニングラードを訪れたファン・アントニオ・サマランチIOC会長は次のように語った。「レニングラードは素晴らしい都市だ。レニングラードには記念建造物や近代的スポーツパレスがあり、申し分ない。ここでは真のオリンピック的な友情と観衆の尊敬が感じられる」

レニングラードが第17回冬季オリンピックの開催地に立候補したことは、世界オリンピック運動の理想にソ連のスポーツマンたちが忠実なことを改めて証明している。



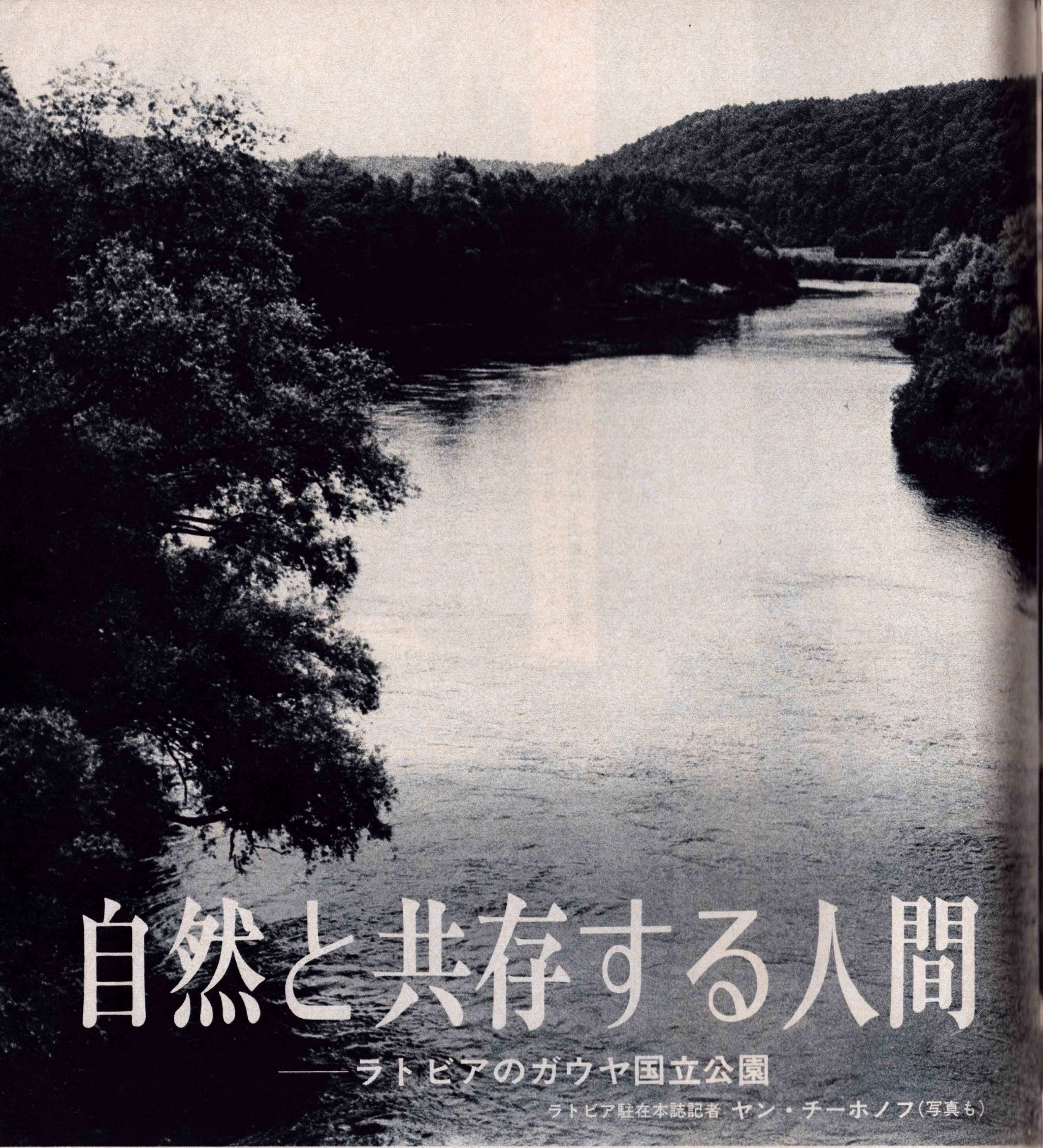
偶然の出会い（N・ソコロフ撮影）



▲国立公園の中央を流れるガウヤ川



自然を求めてやって来たハイカーたち



自然と共存する人間

――ラトビアのガウヤ国立公園

ラトビア駐在本誌記者 ヤン・チーホノフ（写真も）

手入れの行き届いた森と伐採用林区、野生動物とコルホーズの畑や牧場、自然保護地帯と建設資材工場群……ふつうの尺度では互いに対立するものが、ここラトビア共和国（バルト海沿岸）のガウヤ国立公園では仲良く同居している。一九七三年に創立された、ガウヤ川流域に広がるこの広大な国立公園を紹介しよう。

ガウヤ渓谷――この谷そのものがすでに自然の造った壮大な記念碑である。ガウヤ渓谷の形成が始まったのは数百万年前。この長い年月はすばらしい景観を作り出しただけでなく、学術的に価値のある多くのものを生み出した。ここでは地殻の構造や太古の地球の歴史まで調べることができる。現にチェルトバヤ洞窟の近くでは、三億年前に生息していた甲冑魚の化石が発見されている。

ガウヤ川はかつて船の往来でにぎわい、スカンジナビアから地中海に抜ける有名な通商路の支線の一つだった。また曲がりくねったガウヤ川の険しい岸、高さ85ｍに達する丘は、この地を天然の要害に変えた。数百年前、ラトビアに侵入したドイツ騎士団はここにトライダ域を築いた。そ

の一部は今でも残っており、修復されて博物館になっている。ここにはまたこの地方の〝アトランティス〟があった。アライシュ湖の底で発見された9世紀の居住地がそれで、湖水の中に23の建物が沈んでいたのである。

古い要塞、宮殿、水車小屋、寺院……ガウヤ国立公園には三二八の歴史、建築、考古学、芸術、民族建築の記念物が九万ha以上のエリアに点在している。

自然美を守るために

ガウヤ渓谷の史跡と美観は、この国立公園に毎年およそ一五〇万人の観光客をひきつけている。

国立公園の主任建築家ヤニス・クルミニシはこう語っている——「この土地に興味が向けられるようになったのは最近ではありません。公園内の有名なグトマニャ洞穴の壁には16世紀の見学者のサインを見ることができます。またガウヤ渓谷にはいくつかの感動的な民衆伝説があり、ラトビアの画家は昔からよくここを好んで描いてきました」

だが、ここ数十年の観光ブームによって事態は複雑になった。調査で分かったところによると、10人が森林公園の1haで1日過ごせば、そこからは大きな動物だけでなく、小動物、鳥すらも逃げ出してしまう。公園内の多くの施設は探求心旺盛な人たちの重圧に辛うじて耐えていた。森林内の小道ですら〝疲労〟の色がはっきり見えてきた。人と自然との関係を調整する制度を作る必要があった。そしてラトビア共和国閣僚会議の決定による規則が導入された。

公園はさまざまな規制のあるいくつかのゾーンに分かれている。全面積の約1割は立ち入り禁止区域に指定されている。ここはほとんど人の手の入っていない自然が残っていて、鳥や野生動物が多く、学術研究が行われるだけのゾーンである。

他のゾーンには、人が自由に自然と触れ合う休息のための区域が広々ととってある。観光客に特に人気のある場所には、駐車場、モーターボートの係留場、キャンプ場が設置されている。

この国立公園の大半のエリアでは経済活動が行われている。公園内に六万人の人が住んでいるということも、この公園のユニークな点だろう。

土地利用者には、美観として価値の高い土地の要素を保護し大切にするという条件が課せられている。ヤニス・クルミニシ主任建築家は次のように言っている——「ふつうは私たちの同意がなければ畜舎や他の生産施設を建てることも灌漑施設を作ることもできません。住宅建設プランも景観との調和が必要です。農作物の種類も、環境との調和を考慮して選びたい。いまのところ私たちは、公園内では空中散布や化学物質を使った集約農法が必要な作物の栽培は禁じています」

観光客対策

ガウヤ国立公園を訪れる人には厳しい義務が課せられている。つまり衛生規則を守ること、ボートは決まった場所にのみつなぐこと、自動車は駐車場に止めること、森を火災から守り、草木や歴史的な記念物を大切にすることは言うまでもない。



トライダ城址で発掘調査をする考古学者



修復されて今は博物館になっているトライダ城の一部



コウモリの越冬用の巣箱を調べる公園の主任動物学者ヤニス・プリクマニス



国立公園内にある古都ツェシス



▼公園内の休息ゾーンに置かれたユーモラスな木彫り

しかし、この公園の管理部の指導者たちは、禁止することよりも人と自然の触れ合い方を啓発し、教えることの方が大切だと考えている。公園には植物の勉強コースが特別に設けられ、観光客はそこを通って、今まで〝見たことがある〟程度のたくさんの植物の名前を知り、どんな花もけっして引き抜いてはいけないことを肝に銘じ、公園内に一〇〇本余りもある大木に親しむ。

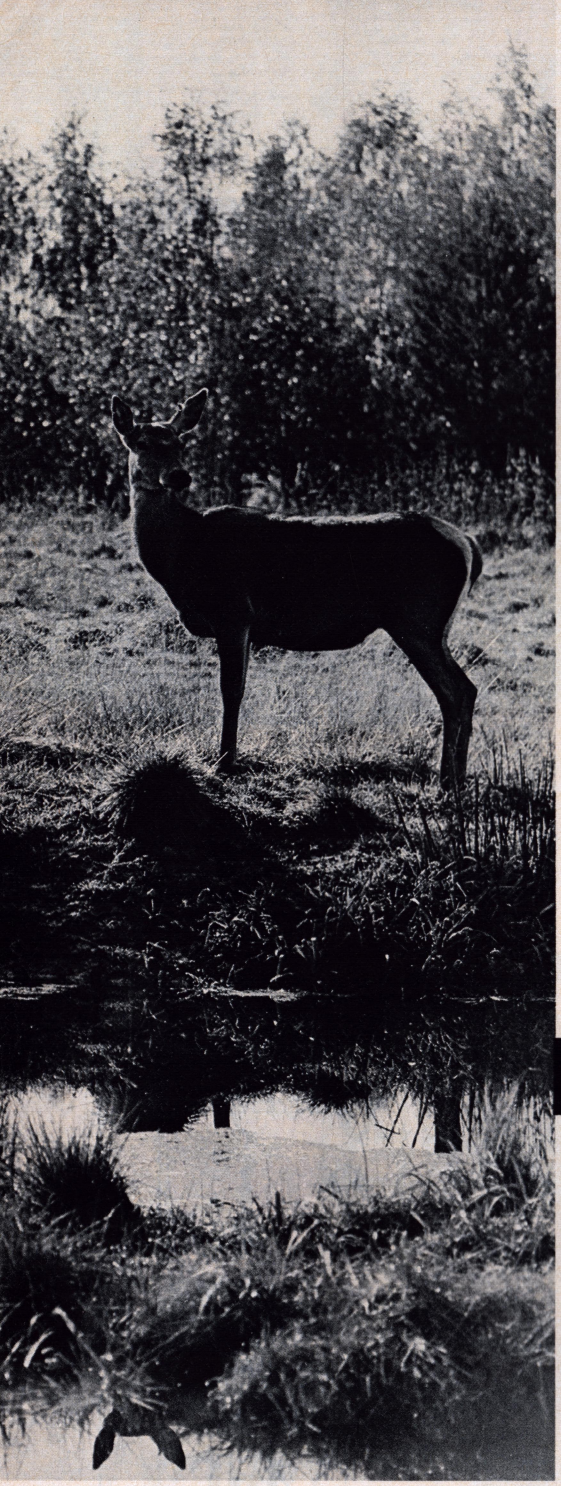
狩猟学者の計算では、公園内には一三〇〇頭のノロ、二二〇頭のアカシカ、四七〇頭のイノシシ、二五〇頭のヘラジカ、多数のビーバー、ウサギ、キツネが住んでいる。動物の一部は捕まえて、広い檻の中に収容してあり、中は展望台に登っていつでも見られるようになっている。野鳥は一三五種おり、この中には古くからレッド・データブックに記載されているナベコウ（コウノトリ科）もいる。

地元民の協力

「この公園ができて10年ちょっとになりますが」とヤニス・クルミニシは言う。「この間、たくさんの人が公園の友だちになりました。地元の住民や学童たちが森林の植樹や回復作業に参加し、考古学者の発掘を手伝い、余暇にはボランティアの自然保護監視員の仕事もしてくれます。多くの子供たちが樹木の世話をし、冬場に森の動物たちにえさをやってくれます。

休暇の一部を公園のために割くことが、多くの市民の習慣になりました。家族総出で、また仲の良いグループでやって来て、道を掃除し、森に落ちている枯れ枝をかたづけ、休息ゾーンの整備を手伝います。多くの人がここの銀行に開設されている〝森林保護特別口座〟に自分の貯金の一部を定期的に振り込んでくれています」





ガウヤ国立公園を横切る高速道路
こうした森の住民たちに出会うのも珍しいことではない。

本だな

東京タワーから何が見えたか?

——開高 健の作品集



このほどモスクワのプログレス出版所から「海外の文芸評論と記録文学」シリーズの一冊として、開高 健氏の中編小説・ルポ・エッセイ集がロシア語で出版された(二七〇ページ、一〇万部)。この小説・ルポ・エッセイ集には、第2次大戦末期の実際の事件を題材にした『ロビンソンの末裔』、最近20年間の東京の生活を探訪した『ずばり東京』、現代日本の幾つかの当面の政治、経済、エコロジー、道徳的諸問題を取り上げた『一億人の自殺者』が収められ、『東京タワーから見下ろすと』という統一した書名が付けられている。編者は翻訳者の一人でもある日本研究家のボリス・ラスキンである。

開高 健の名は日本文学に関心を持つソ連の読者にかなりよく知られている。中編小説の『巨人と玩具』、『パニック』、『裸の王様』でデビューした彼は、『裸の王様』で芥川賞を受賞した。これらの作品は約20年前ラスキンの訳で出版された。その後同じくラスキンの訳で『日本三文オペラ』、『青い月曜日』が出て、ソ連での開高 健の小説の人気は揺るがぬものになった。

現代日本に寄せるソ連の読者の興味の大きさ、深さについて語ることは、とりもなおさず争う余地のない真理を繰り返すことにほかならない。おそらくソ連ほど数多く、現代日本文学の翻訳を含め、日本関係の本が出版されている国はほかにあるまい。翻訳された本のなかには、内部から日本をリアルにのぞいているものも少なくない。開高 健の作品もその点で見逃せないものの一つである。

『東京タワーから見下ろすと』に入っている諸作品の執筆年はまちまちであるが、中には20年前に書かれた古いものもある。しかしそうした作品は、東京都民だけでなく、世界各地に住む人々にも関心のある生活と問題を取り上げているので、今も新鮮で、切実だ。

この小説・ルポ・エッセイ集のはしがきを書いているのは、永年ソ連テレビ・ラジオの駐在記者として日本で働いていたジャーナリストのウラジーミル・ツベトフである。ツベトフは、およそ作家たるものは読者が自分自身を理解し、自信を深め、真理追求の意欲を高めるのを助けなければならない、と述べたソ連の大作家マクシム・ゴーリキーの言葉を、開高 健に当てはめて引用している。

開高 健のルポは現代日本の現実の裏の裏までのぞいている。開高 健は日本や西側の多くのライターによく見られる皮相な評価や悪意のある結論を暴露しているが、このことは彼の作品のはっきりした長所である——こうV・ツベトフは指摘している。

開高 健のルポに登場する人々は、職業も、社会的地位もまちまちである。V・ツベトフはこうした人々と会った印象をはしがきに付け加えているが、それは、ルポの執筆時から現在までの日本の変わりようを、読者が知るのに役立っている。

本書に掲載された多くの写真も、日本の現実をよりくわしく知るのに役立っている。

今日のソ連邦
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
定価　一五〇円

